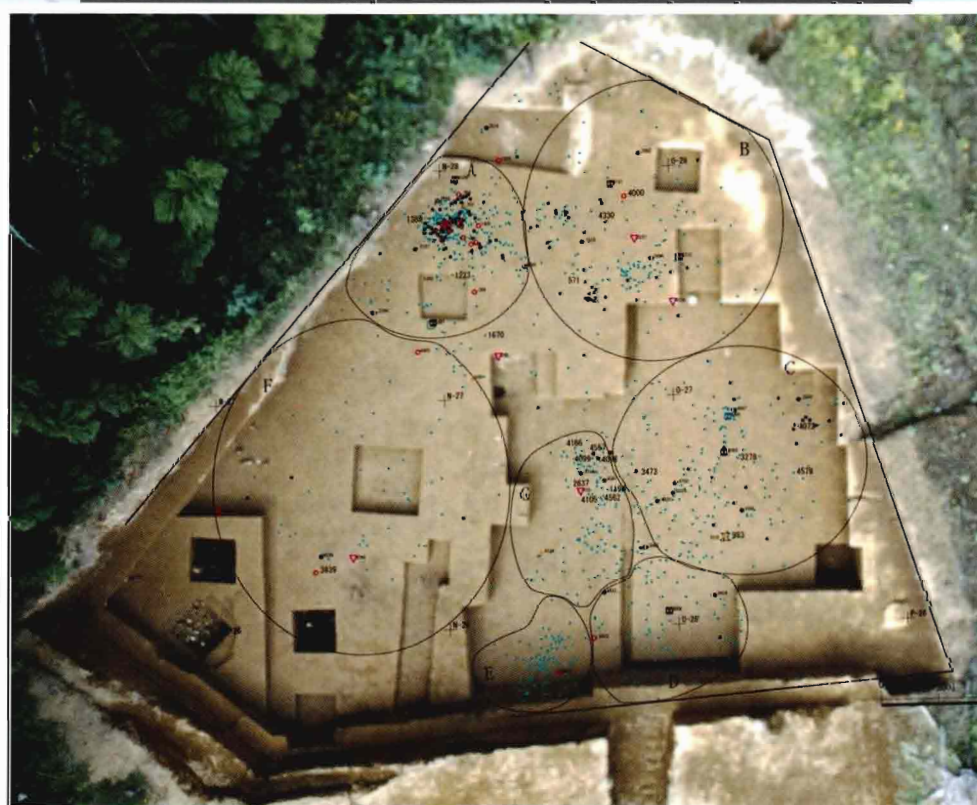


神奈川県考古学会設立20周年記念

平成21年度考古学講座 記録集

かながわの
旧石器時代の
ムラと住まいを探る

主催 神奈川県考古学会



2011年3月

神奈川県考古学会

表紙の写真は、津久井城跡馬込地区の環状ブロック群

裏表紙の写真は、田名向原遺跡の住居状遺構（上 画像幅約12m）と小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（下 画像幅約5m）

目次

はじめに

開会挨拶	神奈川県考古学会 会長 岡本 孝之	1
趣旨説明	鈴木 次郎	1
基調講演 旧石器時代のムラと住まい	明治大学文学部教授 安蒜 政雄	3

各論1 旧石器時代各時期のムラを探る

ナイフ形石器文化期のムラ① -環状ブロック群と石斧の生産-	発表 梶中 俊明 コメント 小池 聡	7
ナイフ形石器文化期のムラ② -最寒冷期における活発な礫群活動-	発表 中村喜代重・諏訪間 順 コメント 伊藤 健	16
ナイフ形石器文化期のムラ③ -遺跡間石器接合と遊動生活-	発表 吉田 政行 コメント 服部 隆博	25
槍先形尖頭器文化期のムラ -石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産-	発表 鈴木 次郎 コメント 及川 穰	35
細石刃文化期のムラ -細石器石器群の諸活動-	発表 砂田 佳弘 コメント 佐藤 明生	44

各論2 旧石器時代の住まいを探る

田名向原遺跡の住居状遺構とその性格	発表 戸田 哲也・麻生 順司 コメント 島田 和高	56
小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群 (速報)	発表 栗原 伸好 コメント 御堂島 正	66

講評

愛知学院大学文学部教授 白石 浩之	75
-------------------	----

講座開催後のコメント

補記 相模野の細石器石器群の諸活動	砂田 佳弘	78
旧石器時代のムラと住まいの復元に向けて	比田井民子	79

例言

1. 本書は、神奈川県考古学会が2010年3月7日に横浜市歴史博物館講堂で開催した平成21年度考古学講座『かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』の記録集である。
2. 収録内容は、各発表者の発言を記録テープにより再現し、発表者の意図を損なわない範囲で一部修正を加えており、その内容については発表者による校正を受けている。
3. 発表者が当日使用した写真(スライド)についてはできる限り収録したが、一部の割愛を行っている。
4. 平成21年度考古学講座『かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』の関連資料としては、開催当日刊行した予稿集があり、本書と合わせてご利用いただきたい。
5. 本書の編集は鈴木次郎が行い、(財)かながわ考古学財団旧石器時代研究プロジェクトチームの協力を得た。
6. 本講座は、神奈川県考古学会講座担当の明石 新・井出智之・小山裕之・鈴木次郎が担当し、役員諸氏の協力を得た。

は じ め に

開会挨拶

岡本 おはようございます。雨の中、朝早くからご来場いただきありがとうございます。

神奈川県考古学会は、来年発足20周年を迎えます。現在、いろいろ企画を練っているところですが、その前段として、今日は、「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」という考古学講座を開催します。10年ほど前には、「相模野旧石器編年の到達点」という講座を開催しましたが、今回は、石器ではなく、ムラというのがテーマにもたれたことに非常に感慨深いものがあります。今日は、若い研究者の発表もありますが、10年前から、あるいは20年前から神奈川の旧石器時代研究を引っ張ってきた県教育委員会の方々（鈴木さんがその代表ですが）、今でも先頭に立って研究を行っていることについて、旧石器時代研究を脇からみている者として感慨深いものがあります。今日は旧石器時代の石器ではなく、遺跡そのものを考えていくということですが、ムラと住まいという、それは縄文時代の貝塚あるいは環状集落というものに続き、現代まで変遷していくわけですので、今日はその歴史の最初の段階というものを皆さんと考えてみたいと思います。

趣旨説明

鈴木 神奈川県内の旧石器時代研究は、これまでは編年研究を中心に行われてきました。本県では、関東ローム層が厚く堆積しているという好条件を背景として、他地域に先行して詳細な編年が組み立てられております。これに対し、旧石器時代の住まいやムラの研究は、なかなか明瞭な遺構が発見されないこともあり、未だ十分明らかにされているとはいえません。旧石器時代の人々が活

動した痕跡は、礫群などの遺構とともに、石器群の分布状態によって示され、当時のムラの構成や居住様式のあり方は、こうした石器群の分布状態を分析することにより明らかにできると考えられます。今回の講座は、こうした石器群の分布や住まいに関連した遺構を取り上げ、旧石器時代の住まいやムラの構成などに迫ってみようという企画しました。

まず、最初の基調講演では、「旧石器時代のムラと住まい」と題して、明治大学の安蒜政雄先生より、全国的な視野から研究の現状と課題についてお話しいたします。

その後、県内の各時期を代表する遺跡を事例として取り上げ、実際に調査を担当した方々から、石器群の分布状態や遺構のあり方について発表していただきます。

1番目は、「ナイフ形石器文化期のムラ①」として、相模原市城山町津久井城跡馬込地区から県内ではじめて確認された、今からおよそ3万5千年から3万年前の環状ブロック群について、畠中俊明さんに発表していただきます。

2番目は、「ナイフ形石器文化期のムラ②」として、およそ2万5千年前のビュルム氷河期の最寒冷期に営まれた、礫群を使用した活動や暮らしについて、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡を例として中村喜代重さんと諏訪間順さんに発表していただきます。

3番目は、「ナイフ形石器文化期のムラ③」として、およそ2万3千年前の綾瀬市吉岡遺跡群と藤沢市用田鳥居前遺跡の出土石器が、約2kmを隔てて遺跡間で接合した事例について、そして、そこから想定される当時の遊動生活について吉田政行さんに発表していただきます。

4番目は、「槍先形尖頭器文化期のムラ」として、お



写真1 岡本孝之会長



写真2 会場風景

よそ2万から1万9千年前の石器の分布状態が対照的なあり方を示す清川村宮ヶ瀬サザランケ遺跡と綾瀬寺尾遺跡の事例について、私が発表いたします。

5番目は、「細石刃文化期のムラ」として、およそ1万9千から1万5千年前の旧石器時代終末期の石器分布や石器の組み合わせなどをおして当時の活動や生業について、砂田佳弘さんに発表していただきます。

これまでの5件の発表は、石器の分布を中心とした、いわば当時のムラの様子、あるいは生活様式についての発表ですが、この後の2件の発表は、住まいに関係した遺構についての発表です。

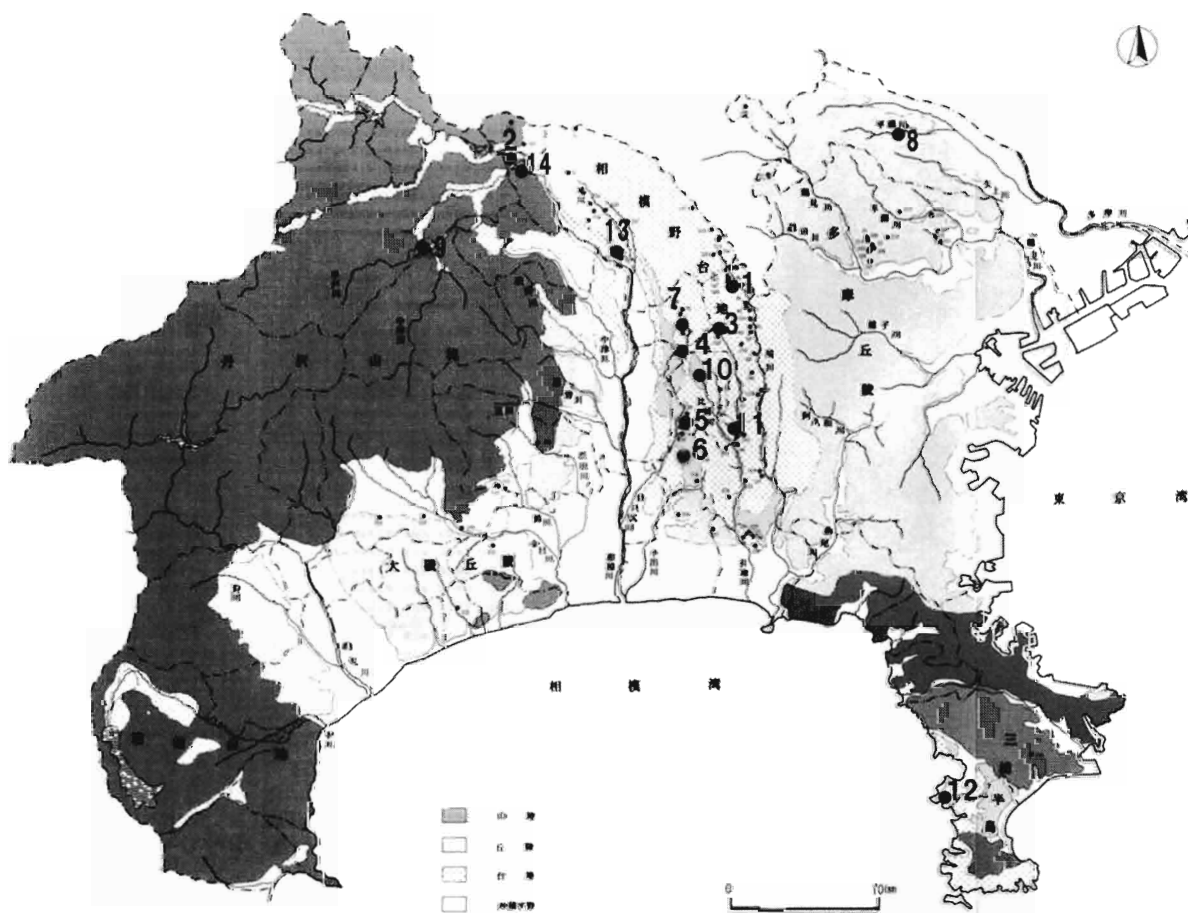
まず、相模原市田名向原遺跡の住居状遺構ですが、平成9年に発見されたこの遺跡は、全国的にも重要な遺跡として、平成11年に国指定史跡に指定されて保存・整備が行われております。今日は、およそ2万年前のこの住居状遺構の特徴と、その立地や規模、遺物出土状況などから、この遺構の性格について戸田哲也さんと麻生順司

さんに発表していただきます。

また、相模原市城山町小保戸遺跡は、昨年の夏に調査され、これから資料整理を行う遺跡ですが、およそ2万2、3千年前の礫群が環状に巡り、その内側から石器や炭化物が集中して出土し、住まいとの関係で検討すべき遺構であります。今日は速報としてその概要について栗原伸好さんに発表していただきます。

なお、各発表については、それぞれ1名の方からコメントをいただきますが、単なる感想ではなく、ご自身のこれまでの調査や研究に基づいた見解を述べていただく予定です。

以上、本日の発表の趣旨と概要を申し述べました。盛り沢山の発表ですが、どうぞ1日おつきあいいただきたいと思います。



1 月見野遺跡群、2 津久井城跡馬込地区、3 大和配水池内遺跡、4 柏ヶ谷長ヲサ遺跡、5 吉岡遺跡群、6 用田鳥居前遺跡、7 栗原中丸遺跡、8 鷺ヶ峰遺跡、9 宮ヶ瀬遺跡群、10 寺尾遺跡、11 代官山遺跡、12 打木原遺跡、13 田名向原遺跡、14 小保戸遺跡

図1 神奈川県下の旧石器時代遺跡の分布と事例発表の遺跡

旧石器時代のムラと住まい

明治大学文学部教授 安蒜 政雄

安蒜 本日は、「旧石器時代のムラと住まい」について話をしてほしいと依頼されました。しかし、旧石器時代のムラと住まいについての研究はまだ日も浅く、定説があるわけではありません。したがって、今日お話しすることは私の個人的な見解で、そういう考えもあるのかなと聞いていただければと思います。

今年、群馬県岩宿遺跡の発掘調査が終わって60年、それから、あまりいい思い出ではないのですが、日本の旧石器時代研究において前期・中期旧石器のねつ造が発覚して10年経過し、さらに、旧石器時代専門の学会である日本旧石器学会が発足して5年がたつなど、いろいろな意味で節目の年です。その節目の年に、日本の旧石器時代研究をリードしてきた神奈川県がムラと住まいをかけた講座を企画したことで、今後、同テーマが学界をあげての大きな課題となるでしょう。

さて、私の話しの大筋は、予稿集にまとめてありますが、そのすべてにふれる時間はありません。いくつか絞ります。

まず、本日のテーマにある旧石器時代の「ムラ」と「住まい」です。一方でムラと呼びながら、住まいについてはなぜ「イエ」といえないかに、旧石器時代研究の現状が表れています。そうした状況下ですが、私は、あえて旧石器時代のムラとイエという言葉を用いてお話ししたいと思います。

日本列島の石器時代でもっとも特徴的なイエの跡は縄文時代の竪穴住居です。それは、周りの地面よりも一段低く掘り下げた床があり、柱を垂直に立てる穴があり、



写真3 安蒜政雄氏

中央には炉が設けられています。これが日本の石器時代の標準的なイエの跡です。では、日本列島の旧石器時代には、どのようなイエがあったか。田名向原遺跡では、縄文時代の竪穴住居とよく似たイエがみつきり大きな話題になりました。ところが、田名向原遺跡のようなはっきりとしたイエの跡は、現在までに発掘された1万数千箇所の旧石器時代の遺跡の中で、ごく数例です。そうすると、多くの遺跡に果たしてイエ跡があるのかなのか、というところから議論を始める必要があります。

広く世界に目を向けると、旧石器時代のイエの1つが天然の覆いを利用した洞窟や岩陰であり、もう1つが野外に造り出されたイエです。日本列島の場合、洞窟や岩陰はほとんどなく、野外にイエを造っていたと考えられます。ヨーロッパでは、洞窟内で火を焚いたり柱を立てた痕あるいは動物の骨を積み上げて屋根をふいたりした事例が、前期旧石器時代の40万年前まで古く遡るといわれています。しかし、野外に明確なイエを造るようになるのは、後期旧石器時代になってからです。そうした住居状遺構と呼ばれるイエ造りの痕跡は、最終氷期の寒冷期以降に盛んとなり、ヨーロッパばかりかアジアでも類例が増えています。

日本ではいつ頃から明確なイエが造られたか。その答えの1つが、田名向原遺跡の発見例です(写真57~67)。すぐおわかりのように、田名向原遺跡の住居状遺構は、中心に炉の跡が2つあり、それを取り囲むように12箇所の柱を立てたと思われる穴が巡り、さらにそれらを取り囲むように、あたかも外と内を区切るように石が置かれている。柱穴とおぼしい穴が実際に柱穴であれば、穴を掘って柱が固定されているわけで、非常にしっかりした構造のイエの跡です。旧石器時代の生業は狩猟と採集で、1箇所に長く留まることがなく、季節により狩場を代える移動生活によって支えられていました。そうした状況下で、この丈夫なイエがどういう役割を果たしていたのかが問題になります。あらかじめ同じ場所に、何度も間をおいて住むことを見越して建てられたイエであるかもしれませぬ。とにかくも、田名向原遺跡にはとても耐久性にとんだ造りのイエがあったのです。

ところで、この田名向原遺跡のイエから、仮に柱の穴

や炉そして周りに置かれた石を取り除くと、一体何が残るか。そこには、石器を作った痕跡を示すブロックだけが残ります。このブロックと呼ばれる石器作りの作業場は、日本列島のどこの遺跡を掘っても認められます。とすると、どの遺跡からも発見されるブロックは、イエの屋内にあったこととなり、それらのイエは、炉の跡もない、柱の跡もない、簡単な造りのイエだったと想定されます。そうしますと、旧石器時代には、少なくとも二種類の造りが違うイエがあったとみてよいでしょう。1つは、田名向原遺跡例のように柱穴や炉を周りと区切る石を置いたイエ、縄文時代の竪穴住居と同じような、数こそ非常に少ないものの住み直しがきく堅牢な造りのイエです。そしてもう1つは、屋根の覆いの痕跡も残らないような、極めて簡便な造りのイエ。旧石器時代には、こうした二種類のイエがあり、後者が圧倒的に多数を占めています。そこで、旧石器時代の標準はブロックだけが発掘される簡便な造りのイエだったと仮定して話を進めます。

さて、ブロックがイエの跡であるという視点から旧石器時代の遺跡を見直すと、ブロックのほかにイエに関連してくる遺構として、焼け礫がまとまる礫群と炉があります。そのブロックと礫群や炉の間には、住まいの性格

にかかわる組み合わせの変化があります。このブロックと礫群・炉間の関係を古い方から、ナイフ形石器文化、槍先形尖頭器文化、細石器文化の順番でたどってみます。

まず、一番古いナイフ形石器文化ではどうかというと、例外もありますが、概略、礫群はブロックの分布とは重ならず、しかも礫群の数とブロックの数が一致しません。礫群とブロックが一對一で対応しないのは、個々の礫群が各々どこかのブロックに所属するものではなく、複数のブロック（イエ）に共有されていたためとみられるのです。

つぎの槍先形尖頭器文化になると、例えば田名向原遺跡の住居状遺構の近くにブロックが2つと礫群が2つあり、ブロックと礫群が重なり合っている。ブロックがイエだとすると、イエの中に礫群があるというかたちに変化しています。つづく、細石器文化ではどうか。本州には良好な資料がないので、北海道の柏台1遺跡を例にとります。柏台1遺跡では全部で15箇所のブロックが残されており、15のブロックのうち13箇所のブロックの中央部に炉がすえられている。そして、7箇所のブロックには礫群があります。柏台1遺跡のブロックは新旧の二時期に分かれると想定されていますが、古い方のブロックには炉があり、しかも礫群がある。これに対して、新し

区分	ナイフ形石器文化			槍先形尖頭器文化	細石器文化
	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期
ムラの構え	環状のムラ			川辺のムラ	
				小さなムラ	
イエの造り	簡便な造りのイエ			堅牢な造りのイエ	
住まいの性格	礫群の屋外共用			礫群の屋内専用	
				礫群・炉の屋内専用	
				炉の屋内使用	

図2 ムラと住まいの変遷

い方のブロックでは炉しかない。ブロックがイエならば、まずイエの屋内に礫群と炉があり、そのつぎに炉だけになる。このような屋内設備の移り変わりが、柏台1遺跡をとおして認められるのです。

以上をまとめます。図2最下段の「住まいの性格」をみてください。ナイフ形石器文化では、礫群とブロックが重ならないうえ、数も一緒ではなく、礫群は複数のイエの間で共用されていた段階だといえます。つぎの槍先形尖頭器文化になると、イエを示すブロックと礫群が重なり、礫群が屋内に取り込まれてきます。さらに細石器文化の段階になると、屋内で礫群が炉と併用され、やがて礫群は姿を消していく。つまりブロックが段々屋内に専用設備を持ち込み、1軒1軒のイエが自立化していく経緯がとらえられるのです。こうして、どの遺跡にも残されている簡便な造りのイエが、旧石器時代の終わりに向けて、1軒1軒が次第に自立した姿を示します。

そのようにイエの性格が変化する中、旧石器時代にはどんなムラが営まれていたのか。ムラのかたちをみきわめながら、その推移していった様子を追ってみましょう。今から四半世紀前、誰がみてもイエが集まったムラ跡だとすぐに思い当たる遺構が、群馬県下で発見されました。下触牛伏遺跡から、20箇所あまりのブロックが50メートルの円を描くようにして並ぶ環状ブロック群が、はじめて私たちの前に姿を現したのです。これが、もっとも明確な旧石器時代のムラの跡です。しかも、この環状のムラ跡は、日本の旧石器時代が始まって間もない頃に構えられた、最古のムラでもあったのです。

しかし、環状のムラはその後、姿を消していきます。そして、つぎにどのようなムラが営まれたのか。見解は分かれますが、私の考えは以下のとおりです。例えば、武蔵野台地の野川流域には旧石器時代全体で約300箇所の遺跡が確認されており、各遺跡の分布を時期別に分けていくと、旧石器時代の中頃には百数十箇所もの遺跡があります。そうした状況を見ると、ほぼ同時に川に沿って何軒ものイエが並んだ川辺のムラが繰り返し構えられていたと想定されるのではないかと。ここ相模野台地でも、月見野遺跡群などの在り方をとおして同様の現象がとらえられます。現在の山間を抜ける街道を進むと、まず数軒の家があり、そこから数十メートルあるいは数百メートル離れるごとに、また数軒程度の家が建ち並ぶ村に出合います。それに似て、川沿いにイエが並ぶのが川辺のムラ。したがって、遺跡の1つ1つはムラではなく、川辺のムラの一部なのです。この川辺のムラは、以後、旧石器時代の終わりまで続きますが、それぞれのイエが

自立化していく中で1遺跡が1つのムラとなるかたちに変化して、今度は1つ1つがそれぞれ2、3軒のイエでできた小さなムラが登場します。イエが自立することにより、川辺のムラが小さなムラへと変質していくのです。こうして、旧石器時代のムラの構えは、環状のムラから川辺のムラへ、そして川辺のムラが小さなムラへ変わり、その小さなムラが縄文時代のムラに移行していったと思われる。

以上、お話ししてきましたように、ブロックをイエの跡と考えると、イエには堅牢と簡便の二種類の異なった造りがあり、ムラには環状のムラと川辺のムラそれに小さなムラという三種類の構えの違いがみられます。このイエの造りとムラの構えの移り変わりとおして、旧石器時代の住まいの歴史をたどることもできそうです。ただし、ブロックをイエと考えること自体にも少なからず問題があります。それは、何よりもまずブロックが石器を作った作業の場にそのまま残されているのか、あるいは作業後にその場で寄せ集め別のどこかに捨てられたのか。つまり、ブロックの形成には、その場所に遺棄されたとする作業場説と、取りまとめて廃棄されたゴミ捨て場説とがあり、結論をみるまでには至っておりません。そのどちらかなのかをきちっと検証していく必要があります。

同じことは、礫群についてもいえます。礫群には固定された使用場所があったのか、あるいは使用する度に場所を移したのか、よくわかっておりません。さらに、ブロックが石器作りの作業現場であっても、ブロックの全てがイエの中（屋内）にあったかどうかとも問題です。住居状遺構のように、イエの中にブロックがあるのはむしろ例外的なのか。それらを検討するための分析手段と方法論を確立しなければならないと思います。このように、旧石器時代の住まいの研究は、ある種の非常に危うさを抱えており、その点をしっかりと認識しておかなければなりません。

と同時に、環状のムラから川辺のムラへ、川辺のムラから小さなムラへと、ムラ構えが推移する中、簡便な造りのイエが礫群を屋内に取り込みその礫群を炉に置き換えて自立化するという、住まいの歴史観は、あくまでも枠組みです。ヒトやモノの動きによる肉付けが不可欠となるでしょう。一例をあげます。旧石器時代の遺跡は、確かに移動生活の中で残されました。したがって、遺跡（居住地）は、元住んだ場所、前に住んだ場所、そして次に住んだ場所へと時系列上を連らなっています（遺跡の時間連鎖）。ただし、ヒト・モノの動く背景はそれ

だけではありません。川辺のムラは数百メートルあるいは数十メートルの距離をおいたイエ・イエのまとまり(遺跡群)であって、現在の街道筋と同じように1つのムラを形成していたと考えられます。そうであれば、同じムラに住んでいた者同士がお互いのイエ・イエを行き来したに違いありません(遺跡の空間連鎖)。そうした意味で、これからの住まいの研究は、従来からおこなわれてきた遺跡の時間連鎖の視点に加え、遺跡の空間連鎖の面からの分析が大きな役割を果たすように思われます。

日本旧石器時代のイエとムラについての研究には、定説はありません。仮にブロックをイエの跡ととらえるとすると、これまでお話したような図式的な住まいの歴史の枠組みを構想することが可能です。しかし、そのためには解決すべき問題も多く、1つ1つ乗り越えることが住まいの研究の進展につながるでしょう。

会場からの質問 1

質問者 今、堅牢な造りのイエと簡便な造りのイエと、2つの話を伺いましたが、その後、縄文時代草創期になって出てくる住居址はそのどちらに位置づけられるのでしょうか。

安蒜 あなたはどちらだと思われますか。

質問者 私は、簡便な造りのイエだと思います。

安蒜 私もそう考えています。川辺のムラは、旧石器時代の終末まで名残りをとどめ、河川の流域に2、3軒の簡便な造りのイエが並ぶ細石器文化が生まれました。そのムラの景観は、縄文時代のはじめに通じるものがあります。

質問者 私としては、縄文草創期の最初の住居は炉址を伴わないことから簡便なイエだと思うわけです。

会場からの質問 2

質問者 ムラを作って生活するということですが、何を食べて生活していたのでしょうか。一般常識でいうと、旧石器時代の狩猟生活は移動生活を行っていたということですが、ブッシュマンのように大型動物を追いかけていたと想定されますが、日本の場合はそうではないと思いますので、ムラを作って生活する食べ物は解っているのでしょうか。

安蒜 非常に難しい質問ですね。沢山の人が集まって住んだ、旧石器時代初頭の環状のムラを考えます。試算によれば、ゾウ1頭をしとめると、1日2食としてほしい100人で1箇月近く暮らすことができる食糧が手に入ると思われます。現代的な感覚ですが、ところが、旧石

器時代の中頃になると、大型動物がだんだんと姿を消して減っていき、狩猟対象が中小の動物へと変わってきます。そして、人々は中小河川の流域に分散して住んでいて、狩猟を行う。追い込み猟などを流域一帯で行っていたのではないかと。獲物を追いかける人、追われた獲物を待ち構える人など、役割を分担して狩りを行った人々が川辺のムラを作って住んでいたと想像されます。中小の動物が狩猟対象となるので当然狩猟方法も変化し、そのために、環状から川辺へとムラのかたちも変わったと考えられます。具体的に何を食べていたのかは、今正確にお答えできません。



写真4 講演風景

ナイフ形石器文化期のムラ①

－環状ブロック群と石斧の生産－

発表 畠中 俊明
コメント 小池 聡

司会 ただいまより、各論1『旧石器時代各時期のムラを探る』をはじめます。

司会を担当しますのは、橋口と明石と申します。よろしくお祈りします。

まず、「ナイフ形石器文化期のムラ①－環状ブロック群と石斧の生産－」と題しまして、かながわ考古学財団の畠中俊明さんにご発表をお願いします。

畠中 相模原市城山町津久井城跡馬込地区では、県内ではじめて環状ブロック群が発見されました。調査は2年ほど前に行われ、まもなく報告書が刊行される予定です。今回は、この遺跡についてお話しをさせていただきます。

ここでは、ナイフ形石器文化期①とされておりますが、

これからお話する遺跡はいつ頃のものなのか、**図3**に綾瀬市史に掲載してある旧石器時代の編年表を示しました。この図では、下から上に向かって相模野第Ⅰ期から第Ⅴ期、そして縄文時代草創期まで、出土層位によって示しております。ここで報告する津久井城跡馬込地区第6文化層は、B4層から遺物が出土しております。相模野台地では、数枚の黒色帯とその間のローム層が交互に堆積しており、一番上のL1層からはじまり黒色帯はB5層まであります。中程のL3層にATと書いてありますが、これは始良丹沢火山灰という広域火山灰で、鹿児島の方から飛来したものであることが分かっております。その年代は、26,000～29,000年前になると考えられ、今回報告する石器群は3万年前をこえる時代の石器群ということになります。

写真5は、出土石器のナイフ形石器です。上段の左側(6点)は、基部加工のナイフ形石器と呼ばれるものです。素材の剥片を打ち欠いた時の鋭い縁辺を残して、基部に加工を行ったナイフ形石器です。また、上段右側2点と中段・下段左側の石器は台形様石器と呼ばれておりますが、やはり鋭い縁辺を上端に残し、両側縁に細かな加工を行い、利器として使用した石器です。右下の2点の大形石器は、ヘラ形石器と呼んでおりますが、狩猟具の仲間と捉えられ、やはり先端に鋭い縁辺を残し両側縁全体

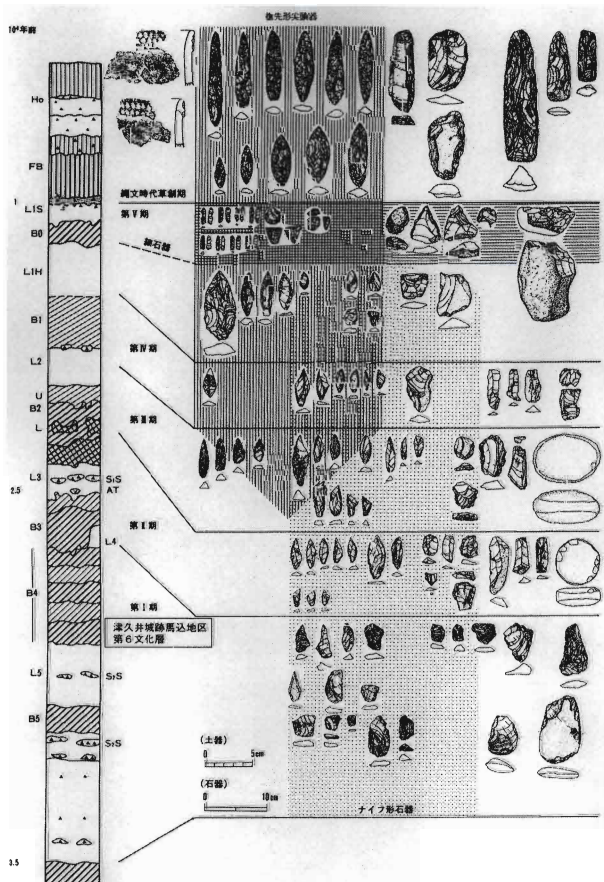


図3 相模野編年表(綾瀬市史一部改変)



写真5 出土石器(ナイフ形石器)

に加工を施しています。

写真6・7は、局部磨製石斧と打製石斧と呼ばれる石器です。写真6は、局部磨製石斧で加工した後刃部を砥石で研磨しています。写真7は、打製石斧で全体を斧形に加工しています。

図4は、遺跡の位置を示しています。津久井城跡馬込地区は、一番北に位置し、そのほか、県内で同時期の石斧が出土した遺跡5箇所を示しております。先ほど安蒜先生はこの時期を特徴付けるのは環状のムラだとお話ししましたが、県内で環状ブロック群が確認された遺跡は、今のところ馬込地区だけです。

図5は、遺跡周辺の地形図です。遺跡は津久井城の城山の一角を占め、西側は傾斜のきつい山地形をなしており、馬込地区から東側が傾斜の緩やかな台地に移行するという地形になります。また、南側の串川を挟んだ対岸にも本日発表する小保戸遺跡や大保戸遺跡があり、旧石器時代の調査が行われています。各遺跡の標高を見ると、小保戸遺跡が約130m、馬込地区が145~150m、大保戸遺跡が160mの高さであり、それぞれ段丘化された時期が異なります。現在は、相模川は遺跡のかなり下を流れており、串川はこの遺跡から1km近く下流で相模川に合流していますが、遺跡が残された当時は、遺跡北東の原の周辺は相模川の河原で、この遺跡は串川と相模川の合流点近くに立地していたことになります。

写真8は、現在の遺跡の航空写真であります。左側の深い谷が串川で、右側の山が津久井城跡になります。写真は調査中のもので、調査区の中程に黒っぽくなっている部分が埋没谷であり、旧石器時代の環状ブロック群は、埋没谷の右側（北側）から発見されました。また、調査区の右上（西側）には城山から北東方向に下る沢地形が確認されます。

図6は、調査区の全体図ですが、環状ブロック群が確

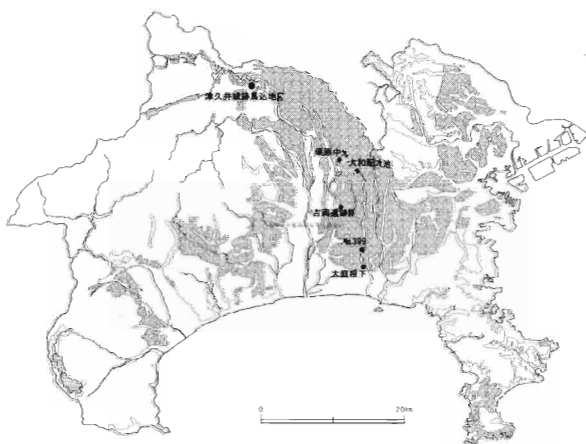


図4 津久井城跡馬込地区の位置と石斧出土遺跡



写真6 出土石器（局部磨製石斧）



写真7 出土石器（打製石斧）



写真8 津久井城跡馬込地区の航空写真



図5 津久井城跡馬込地区周辺の地形図

認められた場所は調査区北端に近い場所で、西側を沢地形、南側を埋没谷、北側及び東側を段丘崖によって区画され、独立丘陵状をなしていた可能性が考えられます。南側の埋没谷は、縄文時代中期には完全に埋まっていますが、ローム層の傾きをみると、埋没谷に向かって南側に傾斜しているのが確認され、西側の沢が埋没谷を流れていた時期があったことも考えられます。図の北側の調査区がA区北側の環状ブロック群で、各ブロックは北側から時計回りにAブロック、Bブロック、・・・、Fブロックまであり、その中央にGブロックが位置しております。環状ブロック群は、通常、円環部と中央部から構成される場合が多いのですが、馬込地区でもA～Fブロックが直径30mの円環部をなし、中央部としてGブロックがあって、環状のムラを形成しておりました。

図7は、凝灰岩製石器の分布を示したものです。凝灰岩は相模川で一番多く普遍的にみられる地元の石材であり、すべてのブロックに分布しております。

図8は、その中の母岩HFT-01とHFT-07-1とした資料で、多くの石器が接合してほぼ原石に近い状態まで復原されたものです。これは大きな剥片をとった後に、その剥片を石核として小さな剥片をとって台形様石器な

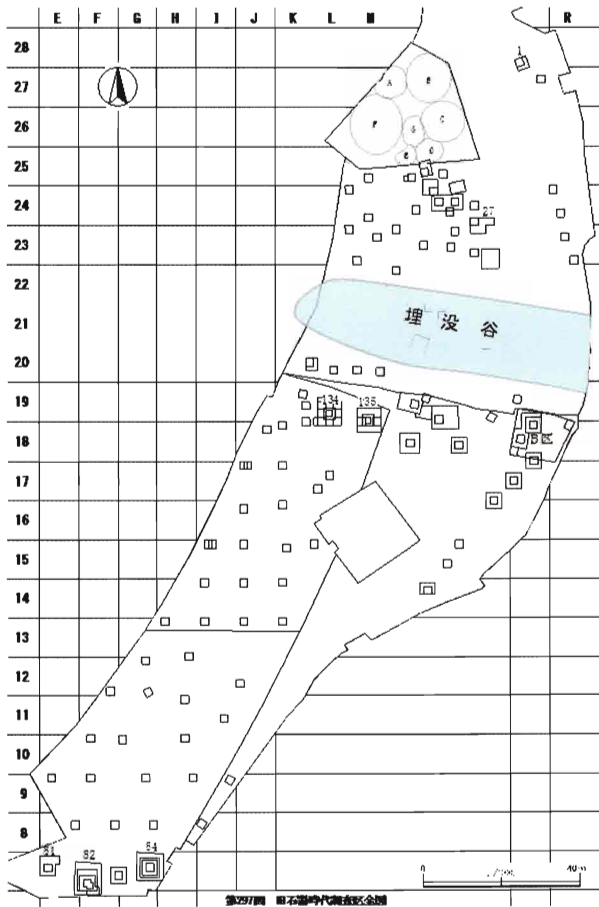


図6 旧石器時代の調査区全図

どの石器を作っております。

図9は、ホルンフェルスと珪質頁岩の分布状態を示したものです。ホルンフェルスの分布は、Aブロックに集中し、かなり北側に偏った分布をしております。そして、このホルンフェルスは石斧などを製作しており、上の接合状態の写真はHo-01とした母岩で、ホルンフェルスの大形剥片から石斧を製作している状態をよく示しております。また、珪質頁岩は、ほぼ一つの母岩まで復元されますが、これは逆に南側のEブロックに集中しています。このように、先ほどの凝灰岩の分布とは異なり、石材に

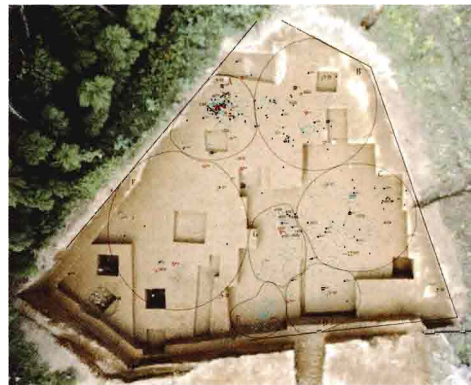


図7 凝灰岩製石器の分布

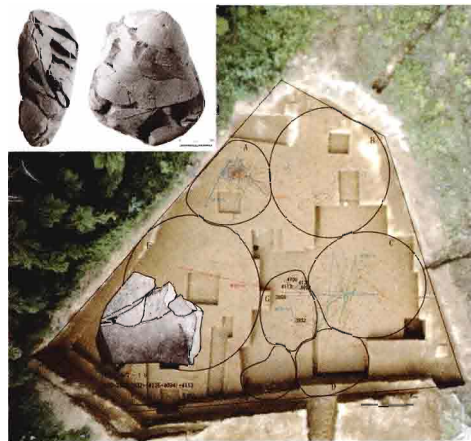


図8 母岩HFT-01及びHFT-07-1の分布と接合関係



図9 ホルンフェルス製石器と珪質頁岩製石器の分布

よる分布の偏りがみられます。

写真9は、先ほどのHo-01とした斧の接合資料を構成する石器や剥片です。全部で30点余りあります。最終的に作出された石器が右下の石斧で、ほかはこの石斧を作り出した際の剥片です。これらの石器はBブロックに分布して接合しています。

写真10は、斧を作ろうとした石材（Ho-02）の石核で、30cmほどの大きさがあります。上端に、斧を作る際の剥片を剥離した剥離面がみられます。写真11も、斧を作ろうとした同じ石材（Ho-02）の石核で、やはり30cmほどの大きさがあります。写真10の石器とは2mほど離れて出土し、接合しています。

写真14は、Ho-03とした母岩で、斧を作ろうとした接合資料です。写真12は、その石核の部分で、このまま加工が進めば斧になるかもしれません。写真13は、その裏面です。石核の一侧縁だけを両面からの打撃により剥離を行って斧の側縁を作り出しています。反対側縁はまだ加工を行っていません。

それでは、製品の斧はどのような分布をしているのか、図10に斧の分布状況を示しました。斧の製作は、AブロックやBブロックなど北側のブロックに偏っていたの

ですが、製品は、D・Eブロックを除き各ブロックにまんべんなく分布しています。これらの斧のうち、この遺跡で確実に製作された斧は、先ほどのHo-01とした母岩の斧でBブロックの1点だけです。それ以外の斧は、ここで製作されたというよりもほとんどが製品としてこの遺跡に持ち込まれたもので、持ち込まれたそれぞれの場所に分布しております。真ん中のGブロックに集中しているのが注目されます。

図11は、狩猟具と考えられるナイフ形石器や台形様



写真14 母岩 Ho-03の接合資料



写真9 母岩 Ho-01の接合資料を構成する石器

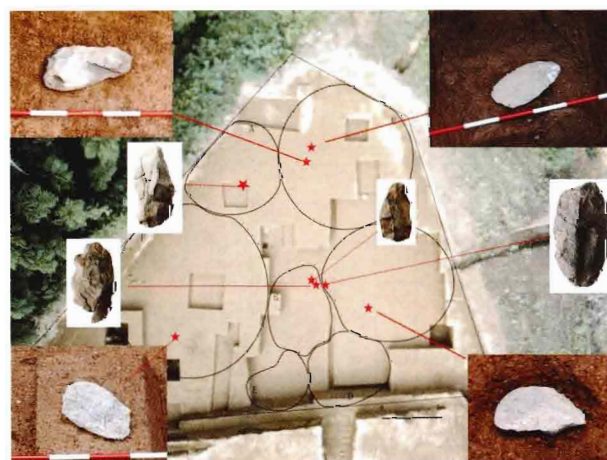


図10 石斧の分布



写真10・11 母岩 Ho-02の石核（これらは接合する）



写真12・13 母岩 Ho-03の石核（表裏面）



写真15 畠中俊明氏

石器の分布を示したのですが、これも基本的にこの遺跡で製作されたナイフ形石器や台形様石器はほとんどありません。黒曜石・ガラス質黒色安山岩・チャートといった在地石材ではない遠方から持ち込まれた石材で作られたものであり、各ブロックにまんべんなく分布していません。そして、やはり真ん中のGブロックに集中しているのが注目されます。また、D・Eブロックでは、剥片剥離を行って石器を相当数製作しているのですが、これらのブロックには、斧と同じくナイフ形石器や台形様石器も分布しておりません。

図12は、黒曜石の分布を示したものです。白抜きの印で示したものは神津島産黒曜石で、これは分布が北に偏っております。これに対して、黒い印のものは信州霧ヶ峰産黒曜石で、これは南側に偏った分布を示しています。また、山梨方面から持ち込まれた水晶は、数点ですが真ん中のGブロックに分布しています。このように、Gブロックは周りのブロックと石器の分布状況が異なることが指摘されます。

最後に、馬込地区の環状ブロック群について、各ブロックが同時に存在したという前提のもとでまとめてみたいと思います。

第一に、石器の接合率が60%以上とかなり高く、先ほどのDブロックやEブロックという石器製作の場において特に接合率が高く、中にはほぼ原石にまで還元される



図11 ナイフ形石器・台形様石器の分布

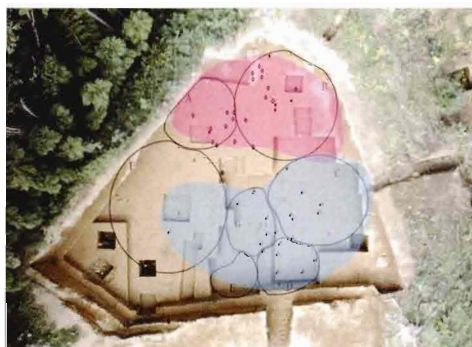


図12 黒曜石の分布

ような資料も見られることは、短期間のうちに集中的に石器製作が行われたのではないかと考えられます。

第二に、特定の石材や産地別の黒曜石が南北に分布が偏って対峙するような状況は、二つの集団が存在した可能性が考えられるということです。

第三に、特定のブロックに石材や石器の内容に偏りがみられることです。石材では、珪質頁岩が特定ブロックに偏って分布することであり、石器の内容としては、製品の狩猟具や斧の分布が中央のGブロックに集中して持ち込まれていることです。

この遺跡に限定した話ですが、このようなことから、環状ブロック群の中に機能的な分担や石器製作における分業が行われたことが考えられるのではないかと思います。これまでの発表は、石器とその分布に限定してありますが、本来、この遺跡からは礫群も発見されておりますので、石器だけではなく礫群も含めてこの遺跡（ムラ）について検討する必要があると思います。

私の発表は、以上で終わります。

司会 畠中さん、どうもありがとうございました。それでは、この発表につきまして、盤古堂の小池さんからコメントをいただきたいと思います。

小池 ご紹介いただきました盤古堂の小池と申します。よろしく申し上げます。

畠中さんから津久井城跡馬込地区の環状ブロック群について詳細な発表がありました。私のコメントは、畠中さんが発表された環状ブロック群に関して、同じ相模野第I期、あるいは相模野段階II・IIIの時期について、その他の遺跡ではどのようになっているのか県内・県外の事例を紹介し、コメントにかえさせていただきたいと思います。

図3は、畠中さんと繰り返しになりますが、綾瀬市史の編年表になります。その中で相模野第I期とされた時期が該当します。図13は諏訪問さんが作られた相模野編年で、段階II・IIIが同じ時期になります。ローム層の層位では、立川ローム層下部でL5層からB3層が該当します。この時期は、先ほど紹介されたように、図示した石斧と基部加工ナイフ形石器、台形様石器が出てくる時期となります。

図4は、畠中さんの石斧出土の遺跡分布図ですが、さらに3遺跡が加わり、大和市3遺跡（台山遺跡、大和配水池内遺跡、大和市No.159遺跡）、座間市栗原中丸遺跡、綾瀬市吉岡遺跡群、藤沢市の3遺跡（大庭根下遺跡、藤沢市No.399遺跡、同No.269遺跡）で石斧が出土しています。これらの遺跡以外にも、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡、綾

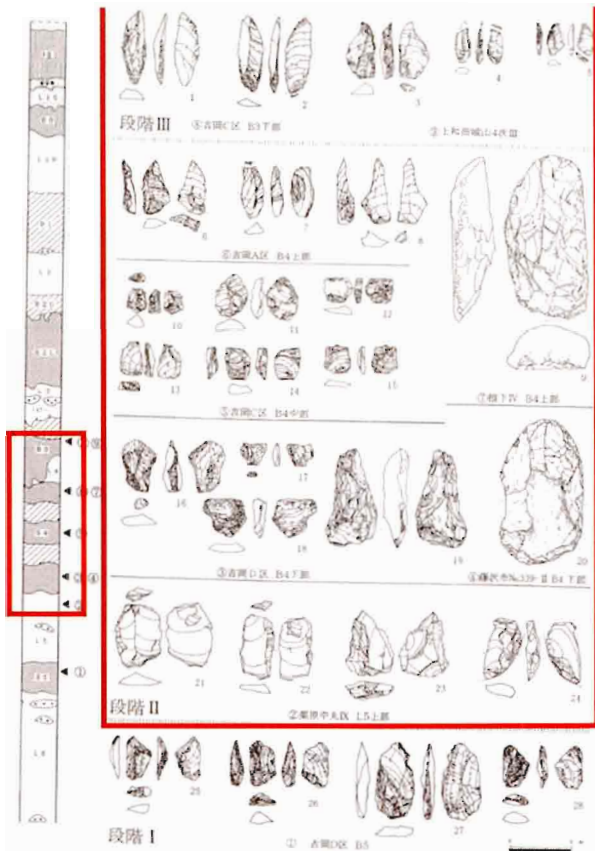


図13 段階Ⅰ～段階Ⅲ石器群（B5～B3下部出土）

瀬市早川天神森遺跡、藤沢市代官山遺跡においてほぼ同じ層位から小規模なブロックが発見されています。相模野台地全体で各水系に遺跡が展開しています。

相模野台地は、ローム層が厚いというお話しが先ほどから出ています。ローム層が厚いということは、石器群を層位的に捉えることができ編年研究には有利ですが、石斧が出土する層位まで掘るのは大変です。6m余りの深さになりますので、なかなかその深さまでの掘り下げができず、石斧の出土点数が少ないというのが現状です。図14～図16で綾瀬市吉岡遺跡群のC・D区をみてみると、B4層の小さいブロックが4箇所など、ある程度ブロックがまとまる地点があり、丘陵上に一定間隔でブロック群が展開しているということが分かります。このような環状ブロック群を形成しない遺跡も存在します。

一方、先ほど発表のあった馬込地区第6文化層ですが、ここでは1,357点の石器が出土して石器製作が盛んに行われ、60%以上の接合率がみられます。先日、遺物を見てきましたが、本当に大きな石を原石から割っていく状況が見て取れます。そして、北側のブロックと南側のブロックでは石器石材や石材産地が異なることが明らかにされています。環状ブロック群が形成される遺跡は、石器製作が頻繁に行われる比較的大規模な遺跡であるよう



図14 吉岡遺跡群C・D区B4層石器出土区

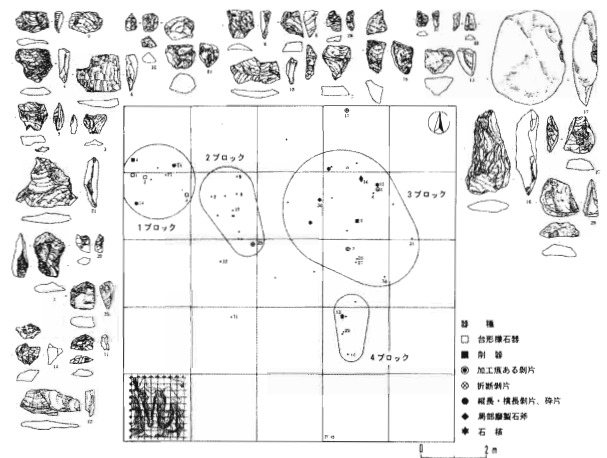


図15 吉岡遺跡群D区B4層下部石器分布図

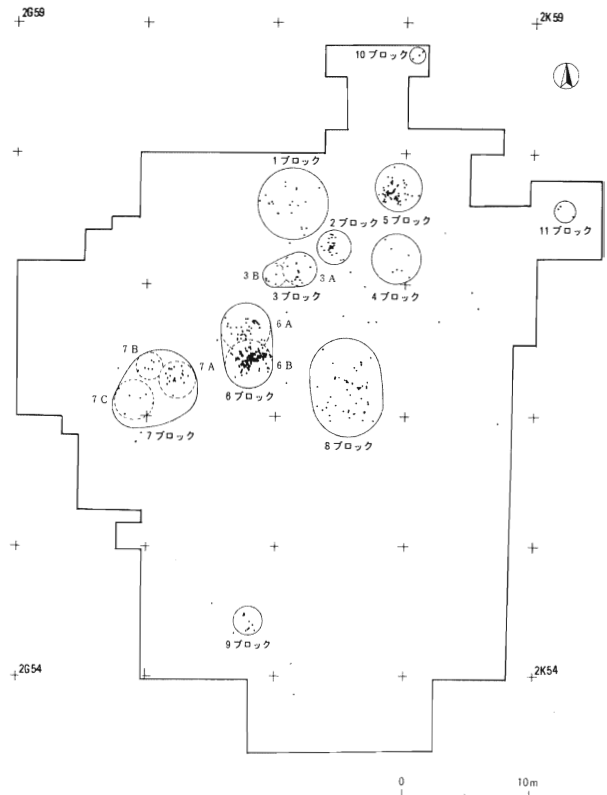


図16 吉岡遺跡群C区B4層中部石器分布図

です。

このほか相模野台地で環状ブロック群が存在するかどうかですが、続いて図17の大和市上草柳の大和配水池内遺跡を示します。この遺跡はL5層の第XIV文化層から局部磨製石斧やナイフ形石器が出土しています。速報では、遺物が広く展開するブロックとされていましたが、25mの範囲の中いくつかのブロックが環状に回っている可能性があるということを調査者の麻生さんから伺っています。環状ブロック群である可能性がありますが、残念ながらまだ整理中で、細かな内容は明らかにされておりません。遺物分布は写真16に示した状況です。

次に、環状ブロック群とは何かということを見ていきます。環状ブロック群は、先ほど安森先生がお話しされたように、1986年に群馬県下舐牛伏遺跡で最初に確認されました。図18に、下舏牛伏遺跡の環状ブロック群を示しています。まさに環状に21箇所のブロックが並んで円環部を形成し、中央にも複数のブロックが認められます。このように環状ブロック群はおよそ10~50mの範囲に複数のブロックが環状に展開し、台形様石器や石斧な

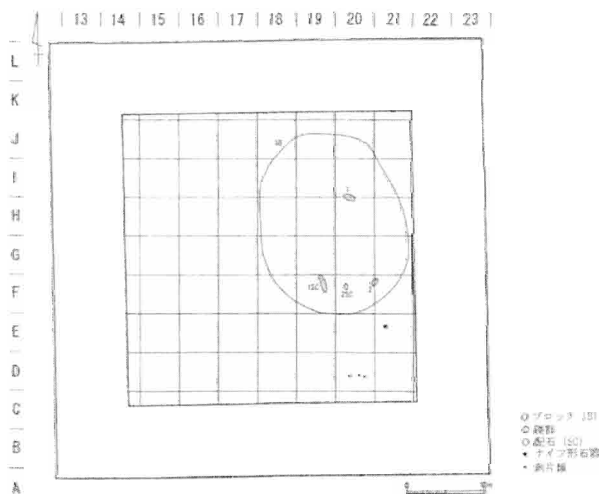


図17 大和配水池内遺跡第XIV文化層遺物分布図



写真16 大和配水池内遺跡第XIV文化層遺物出土状況

ど大量の石器が出土し、特に石斧関連資料が豊富に出土することが認められます。図19は環状ブロック群の外側にもブロックが複数広がる長野県日向林B遺跡の例です。

環状ブロック群が形成される遺跡はどのように分布しているのかといいますと、全国的に見ると100例以上あり、特に多いのは下舏牛伏遺跡を含む群馬県、房総半島の千葉県にも多くみられます。千葉県は、ローム層の堆積が薄いため立川ローム層下部の調査事例が多いということです。ほかには、武蔵野台地などにも多くみられます。

これから、私が整理をさせていただいた東京都調布市の野水遺跡の概要を紹介したいと思います。この遺跡は低位の立川第1段丘面に立地し、野川支流旧河道が形成した埋没谷に近接しています。図20の左上にブロックの分布を示しましたが、26mの範囲に環状をなす16のブロックと中央に3ブロックが分布しています。ここでは、

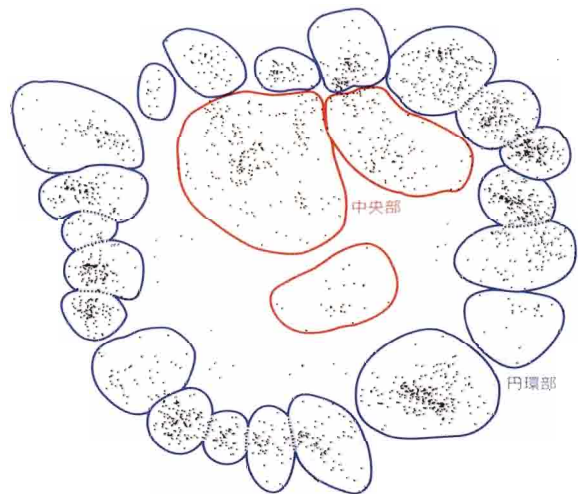
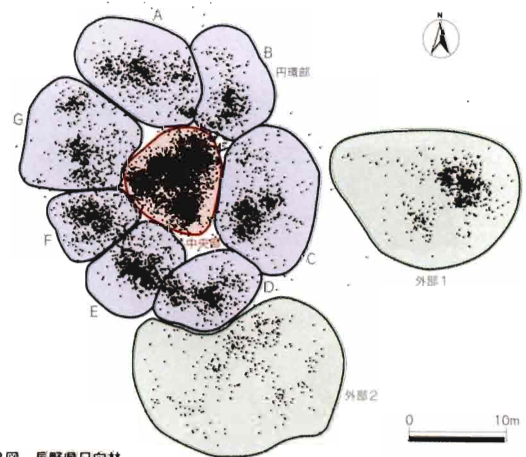


図18 群馬県下舏牛伏遺跡の環状ブロック群



第2図 長野県日向林B遺跡の環状ブロック群

(谷 2000を基に作成)

図19 長野県日向林B遺跡の環状ブロック群

6,000点の石器が出土しており、出土層位はⅩ層になります。多くの接合資料が認められ、石斧製作のほか、石器製作を頻繁に行っています。びっくりしたのですが、敲石が非常に多く、石核も480点くらい出土しています。野水遺跡は多摩川水系の豊富な石器石材を背景とした石器製作址と考えられます。

他の例をみていきますと、規模の大きな環状ブロック群としては、図21の栃木県佐野市の上林遺跡では、50m×80mの規模がみられ、3,540点の石器が出土し、40～50箇所のブロックから構成されています。先ほど、畠中さんが馬込地区で触れられたように、石材の分布に一定

の法則がみられるということが分かっています。図22は、このブロック群が形成された時に、どれくらいの範囲の石材や人の関わりがあったのかを示しております。複数の石材産地を含む広域にわたる「もの」と「ひと」の係わりが想定されています。

さて、環状ブロック群のその他の様相をみていきたいと思います。千葉県の上四塚遺跡では、環状ブロック群が二つ並んで発見され、環状ブロック群を越えたブロッ

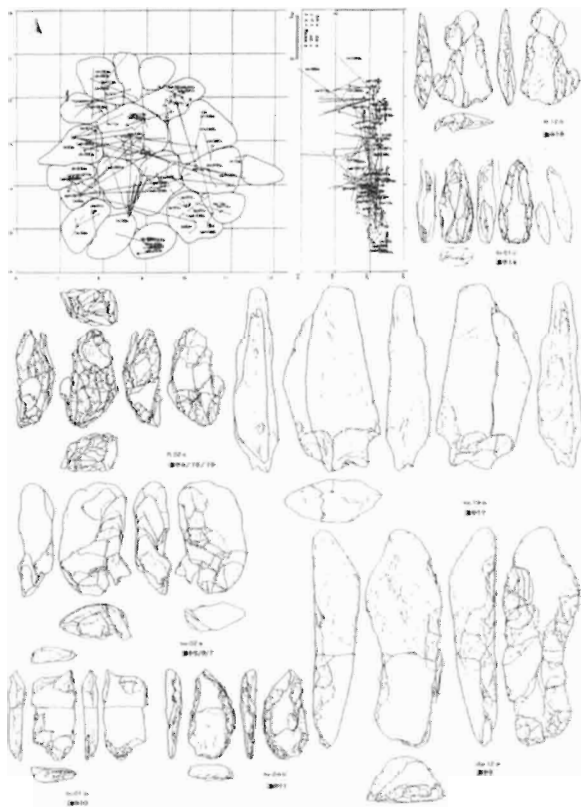


図20 調布市野水遺跡の環状ブロック群と出土石器



写真17 小池 聡氏

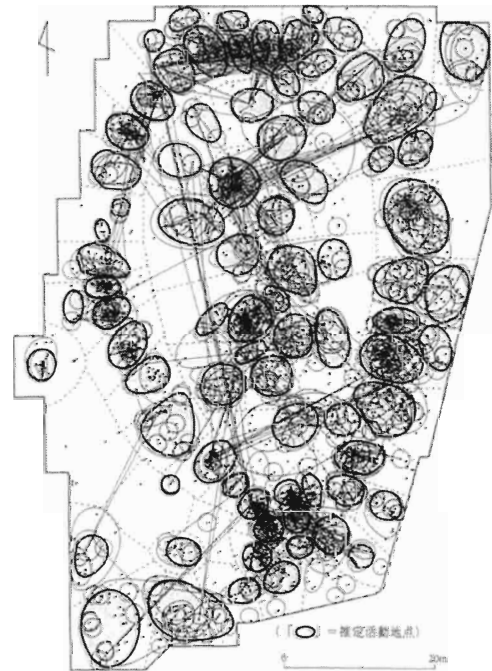


図21 栃木県上林遺跡の石器分布と接合関係

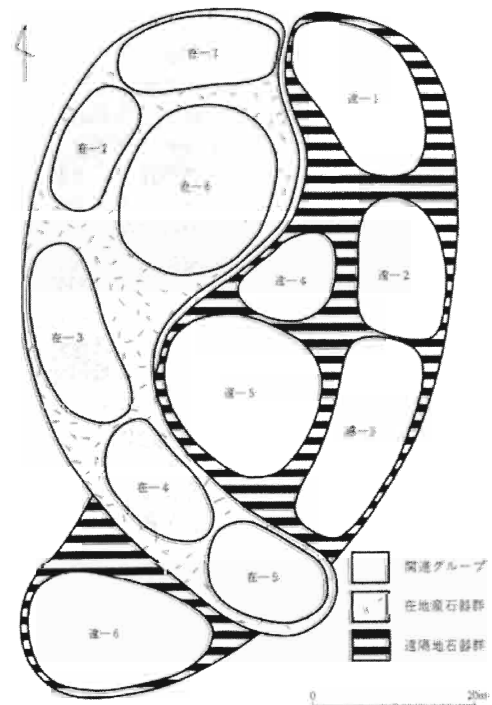


図22 上林遺跡における構成集団概念図

ク間で石器が接合しております。また、**図23**の千葉県関畑遺跡でも45m離れた環状ブロック群間で石器が接合しており、隣接する複数の環状ブロック群間でも密接な関係があったと考えられます。このような環状ブロック群間の関係は興味深いものです。

それでは、こうした環状ブロック群は、人がどのように行動した結果できたのかということを見ていきたいと思えます。**図24**は、長野県立科F遺跡の例で須藤さんが提起したのですが、集団とブロックの関係、あるいは共同体と空間利用の関係について述べています。作業空間・共同作業空間と住居空間、中央広場を想定した「ムラ」の構成をとると考えられています。また**図25**は、下触牛伏遺跡の例ですが、馬込地区や上林遺跡などでもみられた一定の石材利用について、栗島さんが石材分割と居住モデルについて提起しています。また、環状ブロック群のムラと景観については、**写真18**に示すように、テントなどが環状に並ぶ景観が考えられています。上林遺跡では連結したテントを考えています。

最後に、環状ブロック群の性格については、おおよそ5つくらいあります。石材交流の場、祭祀の場といった「場」の機能や、外敵から防御するため、大型動物狩猟のためなど活動痕跡説、離合集散する集団の集合時痕跡など、それらを合わせた説などもみられます。

以上で、私のコメントを終わります。

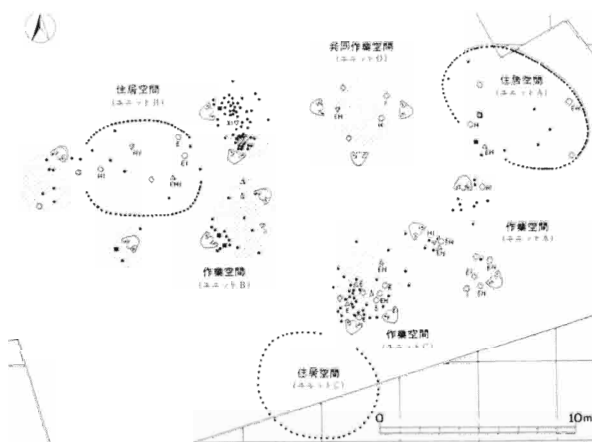


図24 環状ブロック群と空間利用の関係 (長野県立科F遺跡 須藤 1993)

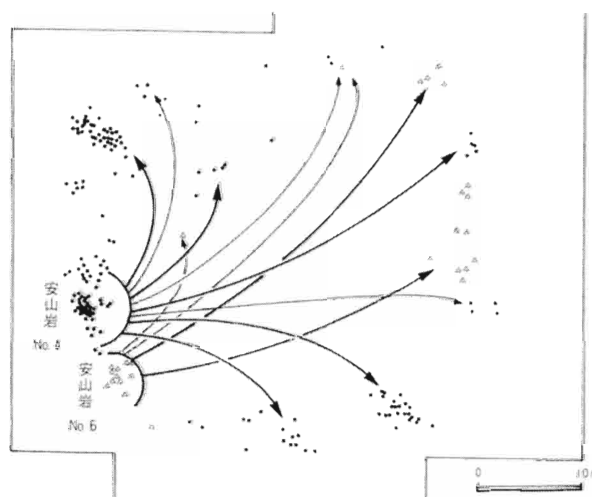


図25 下触牛伏遺跡の個体分布と個体分与の関係 (栗島 1993)

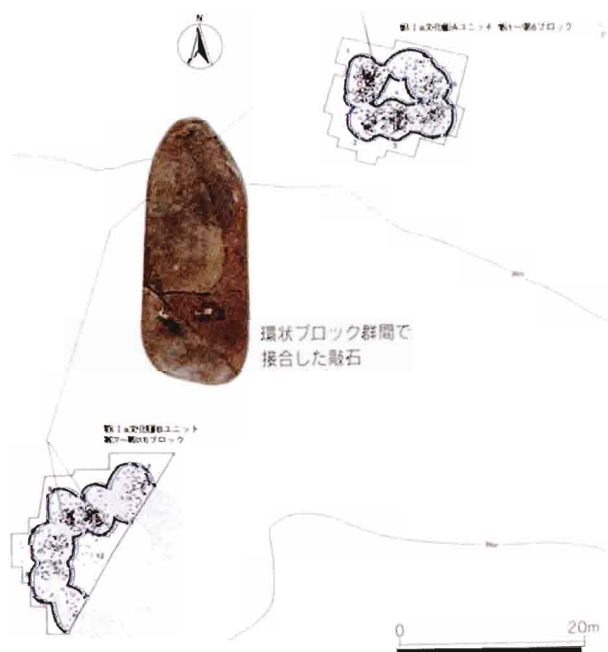


図23 千葉県関畑遺跡の環状ブロック群間の石器接合



写真18 上林遺跡の環状ブロック群から推定されたムラの様子 (佐野市教育委員会 2004)

ナイフ形石器文化期のムラ②

－最寒冷期における活発な礫群活動－

発 表 中村喜代重・諏訪間 順
コメント 伊藤 健

司会 続きまして、「ナイフ形石器文化期のムラ②－最寒冷期における活発な礫群活動－」と題しまして、小田原市教育委員会の諏訪間さんに発表をお願いします。
諏訪間 皆さんこんにちは、小田原市教育委員会の諏訪間と申します。

私は、学生時代、海老名市にある柏ヶ谷長ヲサ遺跡の調査に、中村喜代重さんのご指導の下、現在長野県にいる堤隆さんや川崎市教育委員会の服部隆博さんらとともに参加させていただきました。この遺跡は、相模野台地の層位でいうB2層から6枚の文化層が検出され、当時の県内の旧石器時代研究の重要な遺跡となりました。特に第IX文化層は、B2L層の中位から国府型ナイフ形石器が県内ではじめて発見されるとともに、2,855点の石器と3,000点をこえる礫が出土し話題になりました。

今回の考古学講座では、「旧石器時代のムラと住まい」をテーマとして行うということで、私は、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の礫群を中心とした発表を依頼されました。相模野台地の旧石器時代は、3万5千年ないし4万年前にはじまり、縄文時代に移行する1万5千年前までの2万年から2万数千年の間の時代ですが、私がこれから発表する

ナイフ形石器文化期②は、およそ2万5千年前後前の時代のお話しということでご理解いただきたいと思います。ところで、地球規模での環境変動は、最近では、酸素同位体ステージ、略してOISといいますが、そのNo.でお話しすることが多くなっています。日本列島での確実な旧石器時代の始まりの年代は、3万5千年前から4万年前と考えられていますが、その時代はOIS3の中頃に相当します。このステージ3は2万8千年前ないし3万年前まで続きます。その後、AT火山灰を挟んでステージ2に移行しますが、ステージ2は非常に寒冷な気候です。さらにその後、縄文時代以降現代までの温暖で湿潤な時期がステージ1であり、ステージNo.の偶数は寒冷な気候、奇数No.が温暖な気候ということが出来ます。そして、これからお話しするナイフ形石器文化期②の時期は、ステージ2の前半ということになります。

それでは、スライドを使って発表したいと思います。

図26は、相模野台地の遺跡分布を示しています。相模野台地の中央にもっとも広い段丘である相模原面があり、柏ヶ谷長ヲサ遺跡は相模原段丘面上の目久尻川流域にあります。

図27は、遺跡の立地と分布で、相鉄線柏台駅の近くに位置しています。現在は区画整理が行われ、商業ビルなどが建ち並んでいますが、遺跡は北側に大きく張り出

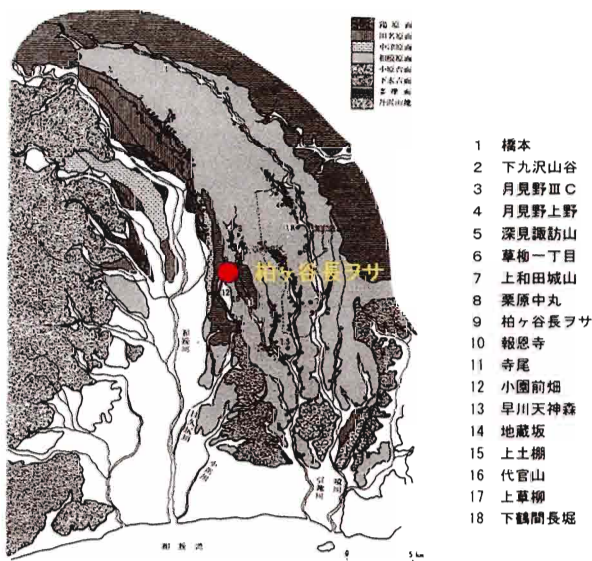


図26 相模野台地の遺跡分布図



図27 柏ヶ谷長ヲサ遺跡全体図

した台地に位置し、遺跡の周りを目久尻川が流れています。図をみて分かりますように、この地点は目久尻川流域でもっとも大きな張り出し地形を形成しています。遺跡は3地点に分けて調査を行いました。第Ⅱ区は広く調査を行いました、第Ⅰ区は宅地造成面の高さの関係で一部しか調査を行っていません。

次に出土層位のご説明をしますが、写真19の中央が相模野台地の層位で立川ローム層は7～8mの堆積がみられます。右側が武蔵野台地、左側が愛鷹山麓の層位で、相模野台地は武蔵野台地に比べて2倍のローム層の厚さがあります。中央やや下の黄色い部分に鍵層となるATと相模野上位スコリアがみられますが、その上層のB2層から今回の対象となる私の編年区分でいう段階V石器群あるいは相模野第Ⅲ期の石器群が出土します。

写真20は、調査状況の写真です。直接遺跡全体を掘るのではなく、まず2m四方の調査区を多数掘って、石器が出土した調査区を拡張するという調査方法をとりました。前方に見えるのが国道246号のバイパスで、遺跡の位置関係が分かると思います。

柏ヶ谷長ヲサ遺跡では、B2層という1.5m前後の厚さのローム層から6枚の石器文化層が検出されました

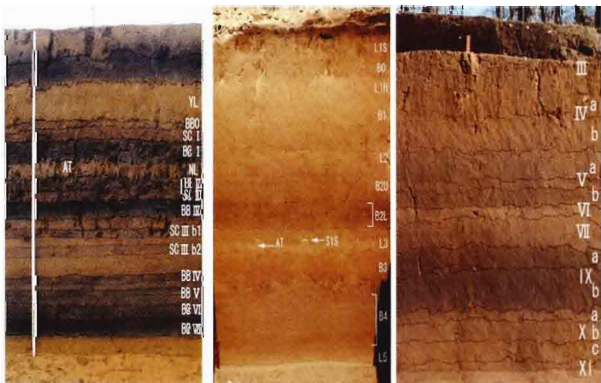


写真19 各地のローム層序（左：愛鷹山麓、中：相模野台地、右：武蔵野台地）



写真20 柏ヶ谷長ヲサ遺跡の調査状況

が、写真21にみられるように第Ⅸ文化層の礫群の50cm上層から第Ⅵ文化層の礫群が検出されるなど、層位的に重なって文化層が検出されました。各文化層の個別の石器はローム層中で動いているため上下差をもって出土しますが、礫群は比較的安定して平らに出土しています。

写真22は、第Ⅶ文化層の礫群です。礫群はいろいろな出土パターンがあり、ここでは集中した小さな単位が認められますが、どこまでを一つの単位とするか難しい問題です。

図28は、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の石器の編年図で、このうち下層から第ⅩⅠ文化層～第Ⅵ文化層までの6枚の文化層が今回の対象となる時期です。そして、今回のお話しの中心となるのが第Ⅸ文化層で、B2L層中位の石器群です。

写真23は、第Ⅸ文化層の出土石器です。上段左端の石器が硬質細粒凝灰岩（丹沢の凝灰岩）を使用した国府型ナイフ形石器です。写真を概観して黒くみえる石器が黒曜石とガラス質黒色安山岩で、白っぽくあるいは緑色にみえる石器が硬質細粒凝灰岩です。この文化層では、黒曜石・ガラス質黒色安山岩・硬質細粒凝灰岩の3種類が主要な石材となります。そして黒曜石は、箱根畑宿・天城柏峠の2産地で占められます。



写真21 礫群の検出層位



写真22 第Ⅶ文化層の礫群

図29は、第Ⅸ文化層の遺物分布で、石器は東西120mの範囲に分布（上段）し、その中から2,855点の石器が出土しています。石器ブロックの区分は大変難しいのですが、報告書では24ヶ所のブロックに区分しております（中段）。礫は約3,000点出土し、山梨県の保坂康夫さんに分析をお願いしましたが、125ヶ所の礫群に区分されました。ほかに900gをこえる大きな礫については配石として捉え、60ヶ所の配石を認定しています（下段）。

図30は、第Ⅸ文化層の礫の平面分布図です。図上で波線で囲んだ範囲を礫群の単位として捉えています。この区分は見かけ上の区分で、どこまで一つの単位とするか非常に難しい問題です。分析の時間が十分あって礫の接合関係を明らかにした上で区分を行えばもう少し明確な単位が捉えられると思いますが、接合はほとんど行っていません。従いまして、このような視覚的な区分がどこまで有効かといいますと非常に難しいといえます。また、図上で黒くみえるのが大きな礫で、配石として区分したものです。

柏ヶ谷長ヲサ遺跡の礫群についてみてみますと、まず、礫が非常に密集していて、何十点もの礫があたかも皿状の凹みに入った状態のような密集型があります。また、礫が一箇所にまとまってその周囲に散漫に分布する集中型があり、さらに全体に礫が分散している状態のものを含め、一応、密集型、集中型、分散型に分類することができます。各文化層の礫群のあり方をみてみますと、密



図28 石器群の編年図

集型は第Ⅷ文化層と第Ⅸ文化層にしかみられず、これらは礫群というよりもむしろ磨石の集中やキャッシュあるいは埋納といった特異な遺存状態を示しています。したがって、ほとんどの礫群は集中型と分散型から構成されます。このほか、先ほどご説明した配石として区分される大形の礫があります（表1）。

次に、各礫群を構成する個別の礫についてみてみますと、まず赤く焼けている礫（赤化）があり、それから完形の礫もありますが、割れている礫があります。また、火ハネといって表面が剥がれた礫があり、数は多くありませんがタール状の付着物がみられる礫もあります。こうした礫は拳大の大きさの河原礫が多く、これらのことから礫群は火を使用した調理施設と考えられます。中には礫群そのものを祭祀施設として捉える人もいますが、私はこうした考えはとりません。配石については、900g以上の重量の河原礫で礫群と区別しており、その多くは焼けておりません。しかし、大きくとも焼けている礫もあります。こうした配石は、2kgあるいは3kgを境にして調理施設とは異なる、例えば石器製作の台石として

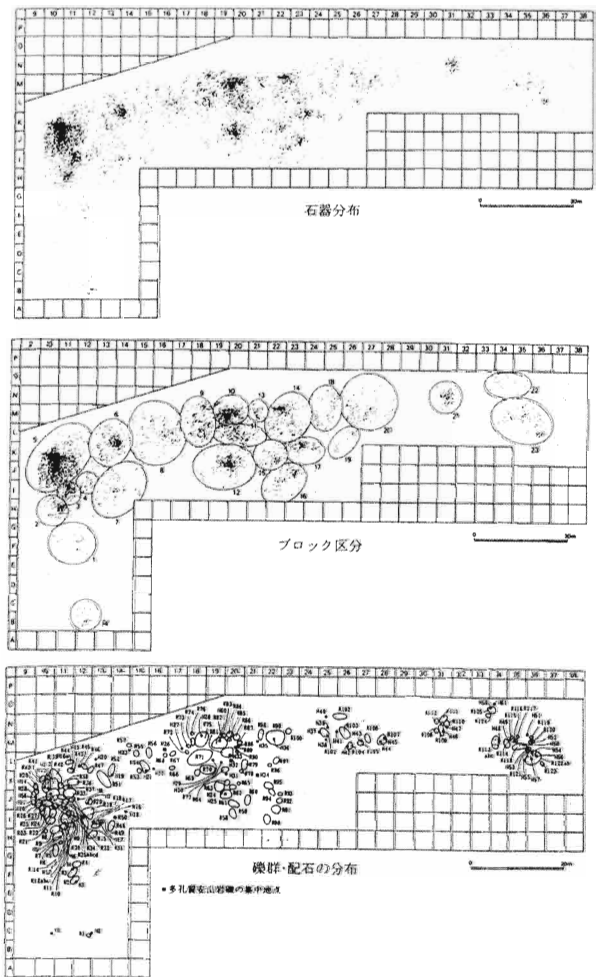


図29 第Ⅸ文化層の遺物分布図（上：石器の分布、中：ブロック区分、下：礫群・配石の分布）



写真23 第IX文化層の出土石器

使用した可能性もあります。

礫群を構成する礫の数量は多いものから少ないものま

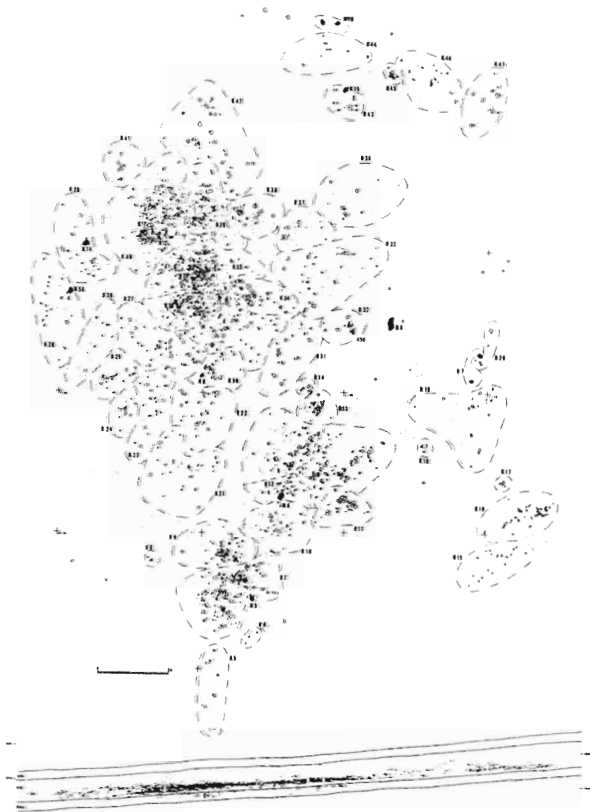


図30 第IX文化層の礫の分布

で多様であります。構成礫の少ない礫群では完形礫が多く、構成礫の多い礫群では逆に破損礫が多い傾向がみられます。ということは、礫群の使用頻度が多くなると礫が割れて点数が増えるということがいえると思います。また、石器と礫群の関係についてみてみますと、石器ブロックと礫群が重複するもの（Ⅰ類）、石器ブロックと礫群が重複しないものの隣接するもの（Ⅱ類）、石器ブロックと礫群が絡まず、石器ブロックのみみられるもの（Ⅲ類）、逆に礫群のみみられるもの（Ⅳ類）と、4つに区分されますが、柏ヶ谷長ヲサ遺跡ではほとんどがⅠ類で、石器ブロックと礫群が重複するものであり、このことは石器が残された場所と礫が残された場所が重なり、当然のことながら、石器を残す活動と礫を残す活動が同時に行われたか、連続して行われたことを示していると考えられます。それらは当時の活動（暮らし）そのものが遺跡に残されたと言えると思います。しかし、残された石器ブロックや礫群の場所が居住した場所であるかというとは簡単にはいえません。

柏ヶ谷長ヲサ遺跡の規模について、第VI文化層から第XI文化層までみてみますと、出土石器が100点前後の小規模な文化層、200点から300点ほどの文化層、2,800点をこえる大規模な第IX文化層と3つの類型に分けられます。小規模な類型Aは、単独の家族あるいは2～3家

族が短期間居住して残したと仮定しますと、石器の点数が多い文化層は、同時に大規模な集団が暮らした大きなムラと考えるよりも、小規模な集団の居住が累積した結果を示している可能性が考えられます。小規模な集団が移動してまた戻ってくるという頻繁な移動の結果を示すものではないかと考えられます。この点については、先ほど遺跡の地形図をお見せしましたが、この遺跡は大きく張り出した地形ですので、何度も立ち寄れる遺跡の立地であったと思います。

次に相模野台地の石材、つまり狩猟活動に使用する道具の石材の獲得についてみてみます。まず相模野台地では、丹沢周辺の凝灰岩や多摩川のチャートは日常生活の場で日帰りで獲得できる、いわば在地の石材です。これに対して少し離れた場所、一泊程度で行ける30kmから70km程度のいわば近地の石材としては、柏ヶ谷長ヲサ遺跡から30km離れた箱根畑宿の黒曜石、箱根の早川から真鶴にかけてのガラス質黒色安山岩、70km程度離れた天城柏峠の黒曜石などがあります。さらに、柏ヶ谷長ヲサ遺跡から信州の和田峠などの黒曜石産地までは130kmから150km、栃木県高原山の黒曜石産地までは約200kmとなります。そして神津島の黒曜石産地は、距離は100km前後ですが船を使用しなければならず、遠隔地石材といえますし、東北系の硬質頁岩は300km以上あります。

図31に示しておりますが、チャート・凝灰岩・安山岩・柏峠や畑宿の黒曜石などが日常的な生活範囲で獲得できる基本的な石器石材ということができます。

図32は、相模野台地の遺跡の石材構成を示しております。この図は沼津市の池谷信之さんが作成した図を基にして、相模野台地のデータを入れ込んだものです。

黒色が黒曜石、白色が凝灰岩、青が安山岩・チャート・その他の石材を示しています。この図をみますと、黒曜石が多く使われた時期と使われていない時期が交互にあらわれていることが理解できます。黒曜石が多く使われる時期は4～5回あることがわかります。旧石器時代全体の石材の移り変わりの中で、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の段階Vの時期は、黒曜石も多いですが、硬質細粒凝灰岩や

	密集型	集中型	分散型	配石
第Ⅵ文化層		5	3	1
第Ⅶ文化層		9	6	3
第Ⅷ文化層	2	10	6	5
第Ⅷ文化層	3	60	70	61
第Ⅸ文化層		1	16	10

表1 柏ヶ谷長ヲサ遺跡各文化層の礫群

ガラス質黒色安山岩も多いという特徴がみられます。この時期は、遺跡に近い石材の利用が行われたものと考えられます。

次に、黒曜石の産地別の推移をみてみます。図33は、相模野台地のB5層からL1S層まで順番に黒曜石産地の推移を示したのですが、図の黒は箱根畑宿、青は天城柏峠、白は信州、水色は神津島を示しています。そして推移を見ると、神津島は特に極端で目立ちます。それ

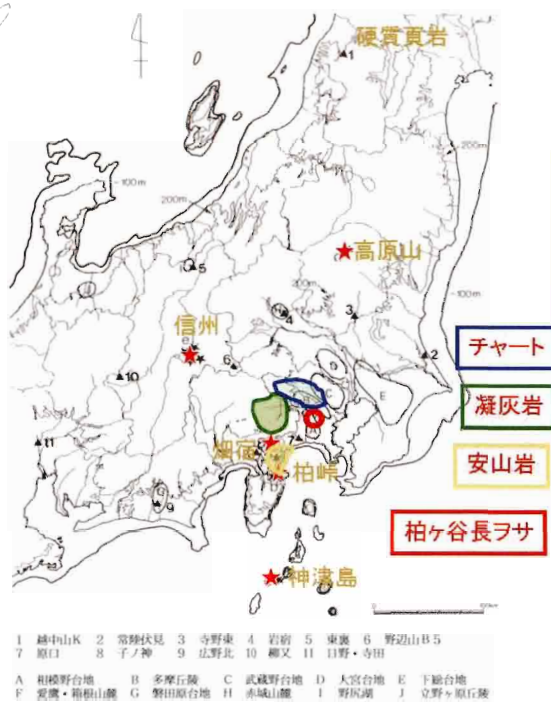


図31 相模野台地旧石器時代石器群の石材構成

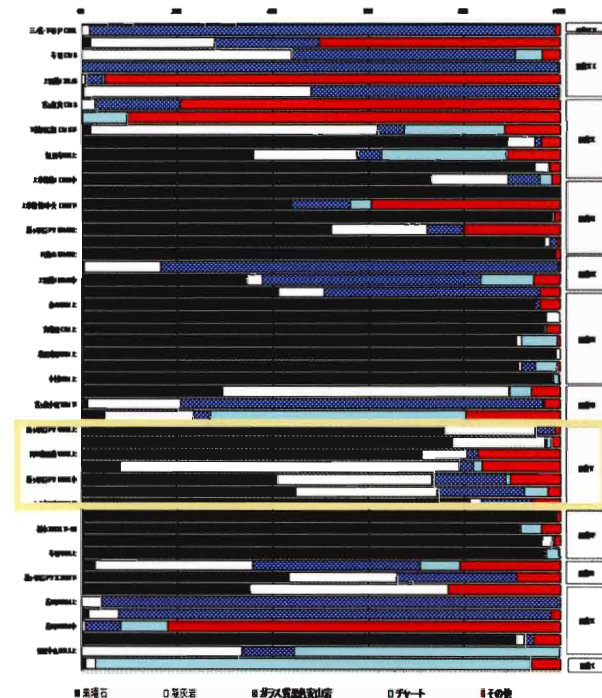


図32 相模野台地旧石器時代石器群の石材構成

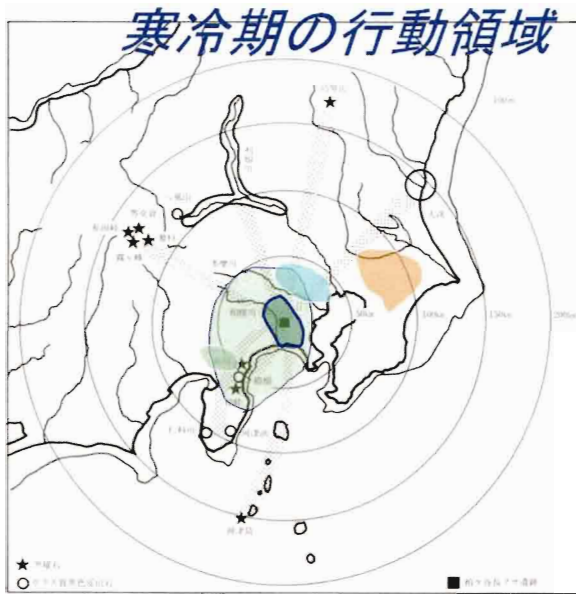


図35 寒冷期の行動領域



写真24 諏訪問 順氏

発になったこともあって北関東の集団が南関東に移動してきたのではないかと、ということができると思います。これは一つの仮説ではありますが、今回の大規模な遺跡を礫群の使い方を含めて考えますと、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の頃に、遺跡が増えることはこのように考えることができると思います。

これよりも前の環状ブロック群の時期は、いくつかの集団が集まって活動したといわれておりますが、ナイフ形石器文化の中頃になりますと、大規模な集団が存在したとは考えにくく、むしろ短期間の移動を繰り返すような暮らしが想定されると思います。

以上で、私の発表を終わります。

司会 諏訪問さん、どうもありがとうございました。

それでは、東京都埋蔵文化財センターの伊藤健さんにコメントをいただきたいと思います。伊藤さん、よろしくをお願いします。

伊藤 ご紹介いただきました東京都埋蔵文化財センターの伊藤と申します。

諏訪問さんは、個別の遺跡、ムラの復元からお話しを始められ、大きなスケールのお話しに移っていきました。それに対し私は、マクロな側面からお話ししたいと思います。とはいえ、諏訪問さんのご意見と変わりませんので、後押しするものになると思います。

私は、東京、武蔵野台地のお話しをさせていただきます。最近まで武蔵野台地の発掘調査を行っていました。もうすぐ報告書が刊行されますが、この時期の遺物が

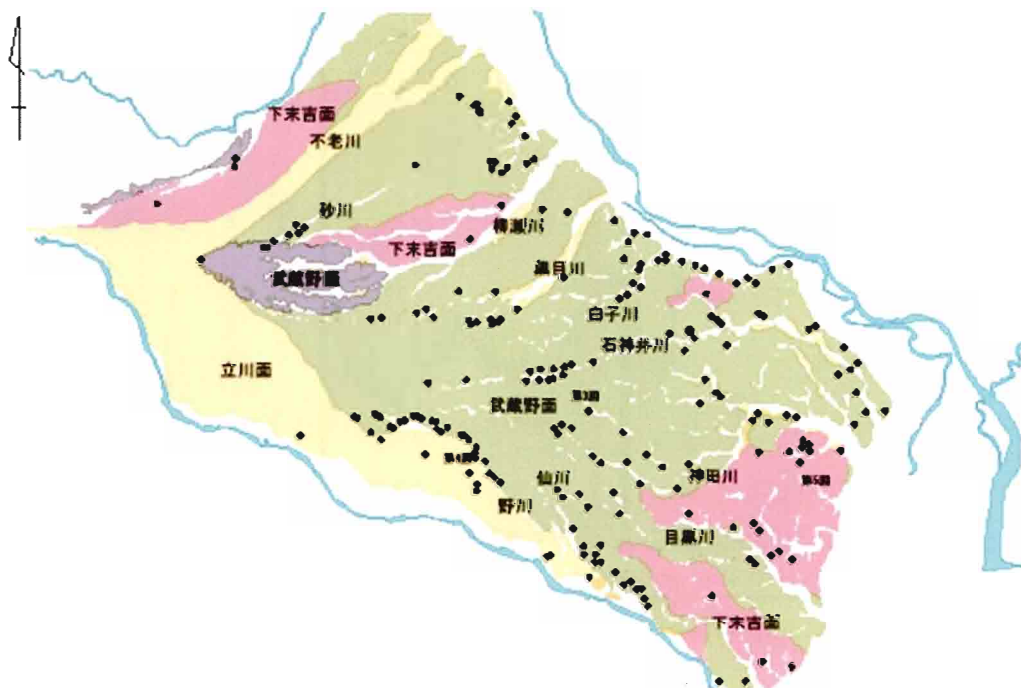


図36 武蔵野台地の旧石器時代遺跡の分布状況

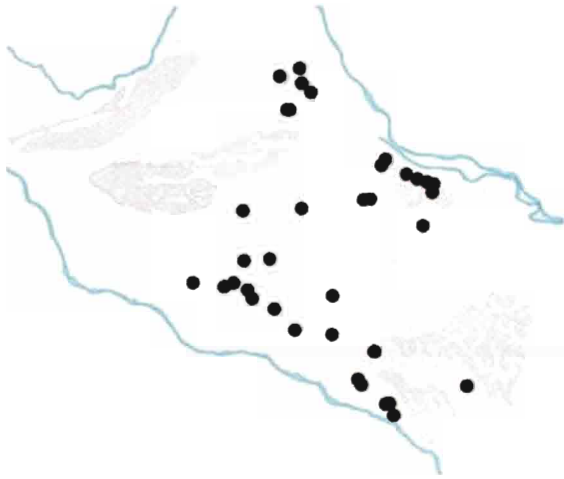


図37 段階Ⅲの遺跡分布状況

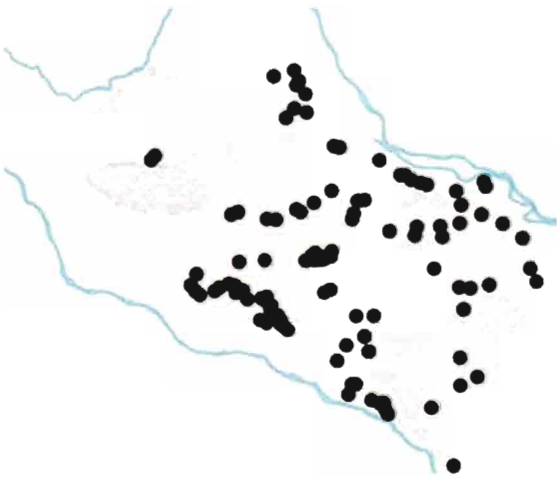


図38 段階Ⅴの遺跡分布状況



図39 段階Ⅵの遺跡分布状況

4万点も出土しています。柏ヶ谷長ヲサ遺跡よりもはるかに多いのですが、まだ報告書が刊行されていないため武蔵台遺跡の内容を具体的にお話しすることはできませんので、マクロな視点からお話しするところです。

まず、武蔵野台地には旧石器時代が遺跡はどれくらいあるかといいますと、諏訪間さんが段階Ⅴと呼ぶこの時

期（私は「Ⅴ層・Ⅳ層下部段階」と呼びます）の遺跡数は、111箇所265文化層に達します。少し前に集計したのですが、多くの遺跡が見つかっています。この時期は他の時期に比べて時間的に長いのですが、そのことを差し置いても一番多い時期と言えます。

武蔵野台地でどのような研究が行われているかといいますと、一つは編年研究です。ローム層の層厚で言いますと、静岡県のア鷹山麓、相模野台地よりは薄い。層厚が厚いと層位的出土例が顕著で編年研究に有利ですが、実は武蔵野台地は手頃といえます。あまりローム層が厚いと深くまで調査することができないという嫌いがあり、その点でも編年研究で多くの蓄積がありました。しかし、10年前、神奈川県考古学会の考古学講座で「相模野編年の到達点」というシンポジウムがありました。相模野では編年研究が到達したのだということです。素晴らしいことですが、忸怩たる思いを持ちました。編年研究は、武蔵野台地では到達したということができません。残念ですが。

そうした中、私たちは武蔵野台地ならではの研究を模索しました。武蔵野台地は、遺跡が多いことが特徴です。何といても東京を含む土地ですので、開発行為が多く発掘調査も多く実施されています。そして、第四紀研究のパイオニアともいべきフィールドでもあります。昨年亡くなられた羽鳥健三先生をはじめ多くの第四紀研究の先生方が武蔵野台地の地形・地質形成についての研究を培ってきました。地形・地質形成と遺跡立地・遺跡分布の研究は、これらの要件が揃って素地が出来上がっており、東京・埼玉の武蔵野台地の研究者は、この10年間にそれらに注目してきました。

図36～図39は、武蔵野台地の旧石器時代遺跡の分布状況です。遺跡分布の時代的変遷の特徴を述べますと、初期は遺跡が少なくしかも大きな川に面した武蔵野台地の南北端に分布します。段階Ⅴでは遺跡が増加し、台地の中央にも多く分布するようになります。そしてこの後再び遺跡が少なくなり、段階Ⅵでは台地の中心の湧水地点に分布する傾向があります。肝要な点は、段階Ⅴでは偏りなく遺跡が分布し、旧石器人がいろいろな場所に暮らしていたということです。具体的にどのような地形に住んでいたのかといいますと、微地形との関係が重要です。小川のすぐ上の岡に遺跡があります。小川には湧水があり飲料水を欠かすことがなく、見晴らしが良いという条件です。また、森の奥ではオオカミやトラなどの動物が棲んでおり、危険なため人は住めなかった可能性があります。川の近くだと、石器に用いる石材を確保でき

るということもあります。

遺跡の増加と分布の拡大は、この時期が最寒冷期に相当し食糧資源が少なく、頻繁に移動を行っているいろいろな場所に住んだ結果と考えられます。人口増加も考えられますが、先ほど諏訪間さんが指摘されましたように、移動が頻繁になり、何度も何度も行ったり来たりして、結果的に遺跡が多くなったと思われれます。

次に、今回のお話しの中心である礫群です。この時期は礫群が非常に多い特徴があります。武蔵野台地のこの時期の特徴として、大変多くの礫が密集して分布することが挙げられます。それらの礫群の礫をどこから搬入したかといいますと、多摩川の河原、遺跡崖下の小川の河原、あるいは段丘礫層中の礫が考えられますが、いずれも多摩川が運んだ礫が起源ですので性質は同じです。柴田氏、中井氏が紹介されていますが、多摩川の礫と礫群の礫の石材構成比率がほぼ同じです（柴田1992、中井2006）。恐らく礫の大きさに対するこだわりがあったと思いますが、石材に対する選択性はなくどこでも拾える礫を採取したと考えられます。

ところが、河原には礫が転がる河原と転がっていない河原があります。前者は野川など立川面の小川や石神井川・神田川等の上流域が相当し、後者は石神井川・神田川等の下流域などが相当します。礫群の規模は、礫が転がる河原に面した遺跡で大規模で、転がっていない河原に面した遺跡で小規模である模様で、礫群の規模は川の流域と関係があります。また、同じことが石器と石材の関係でもいえます。この時期は石器石材の粗質化が認められますが、河原で比較的簡単に拾える粗質の石材が増えます。多摩川源流などの遠隔地の良質の石材を利用しないで、近くの河原で探索した可能性が考えられます。

このように石器石材も礫の石材も遺跡の近くのものを用いることは、行動範囲がかなり狭くなった証拠ではな



写真25 伊藤 健氏

いかと考えます。一箇所に留まったまま移動しないということではないのですが、その前の時期までは広い範囲を移動していたところ、この時期には狭い範囲の中での頻繁な移動によって地域化、部族化、領域形成がなされたというわけです。言い換えれば、100km単位の広い範囲を移動していたところから、数十km単位の狭い範囲を領域として移動生活を行うようになったということです。動物、植物ともいずれも均質な資源分布の中で、領域内の狭い範囲を移動する生活になったと考えることができます。

さて、武蔵野台地ではどうもこの時期を二時期に分けることができそうだとわかってきました（国武2003、伊藤2007）。そうしたところ、いまお話ししたような地域化が明確になるのは後半の段階です。一方で、前半段階には地域化はそれほど明確でないという状況です。このことは諏訪間さんのご発表を肯定的に後押しするものといえますが、二時期に区分され後半段階の地域化が相模野台地でも認めることができるかどうか、今後の課題だと思います。

(司会) 伊藤さん、どうもありがとうございました。

参考文献

- 伊藤 健 2007 「ナイフ形石器文化編年の形成過程－V層・IV層下部段階の解体へ向けて」『旧石器研究』3 日本旧石器学会
- 国武貞克 2003 「両面体調整石器群の由来－関東地方V・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性－」『考古学』I 安斎正人
- 柴田 徹 1992 「礫群の礫についての岩石学的考察」『飛田給北遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 中井 均 2006 「明治大学調布附属校用地の立川礫層」『野川流域の旧石器時代』フォーラム 講演会・公開シンポジウム資料集 調布市教育委員会他

ナイフ形石器文化期のムラ③

－遺跡間石器接合と遊動生活－

発表 吉田 政行
コメント 服部 隆博

司会 午後の部の司会を担当します霜出と服部みはるです。よろしくお願いします。

それでは、「ナイフ形石器文化期のムラ③－遺跡間石器接合と遊動生活－」と題しまして、かながわ考古学財団の吉田政行さんにご発表をお願いします。

吉田 かながわ考古学財団の吉田政行と申します。これから私に与えられましたテーマ「ナイフ形石器文化期のムラ③遺跡間接合と遊動生活」について、お話しさせていただきたいと思います。私の発表に関する資料は、レジュメの31～42頁です。本日は、スライドを用いて説明します。

私が今回のテーマであります、遺跡間接合の事実に触れることができたのは、綾瀬市の吉岡遺跡群の調査の出土品整理作業においてです。吉岡遺跡群については、私達が第二次調査を行いました。本日発表される砂田さんや白石さんが第一次調査を実施されており、たくさんの石器、資料を発掘され、非常に大きな成果を上げておられました。その吉岡遺跡群の第二次調査に携わったことから、今回の発表機会を与えていただきました。

私の発表に関する概要は、①発表対象遺跡がどのような位置関係で、どのような地形に立地するかという点。②遺跡間接合が確認された吉岡遺跡群の石器群と用田の石器群の概要。③実際に遺跡間接合資料を含む石器群がどのような遺物分布を示し、どのように発見されたかという点。④接合個体（原石に戻る過程を示す）をもとに、吉岡ではどのような石材・石核消費がなされていたか。⑤吉岡・用田の遺跡間接合個体・遺跡間接合資料から、2遺跡間で、どのような石材・石核消費が行われたか。⑥座間市の栗原中丸遺跡という大規模な遺跡がありますが、同時期の資料がたくさん発見されている栗原中丸遺跡の接合個体に焦点を当てて、どのような石材・石核消費が行われたかを見ていく。⑦吉岡・用田から見える遊動生活ということで、接合個体に焦点を当てて、消費のあり方、あるいは石器の残され方から当時の人たちの生活のあり方、仕方、過ごし方について推論を述べます。

最初に、畠中さんや諏訪間さんから相模野の石器の変遷がスライドで示されましたが、今回紹介するのは相模野第Ⅳ期前半、B1層下部とされる時期です。写真26に示した層位です。中央よりやや下の明るい層がL3層になり、その上がB2層からL2層、B1層となります。すでにお話がありましたとおり約2300年前前後の石器群です。諏訪間さんの話にあったステージの2ですね。寒冷化が進んできているB2層の時期を経て、温暖化が近付いている時期です。写真27・28に示したB1層の石器については、先端が尖る細身のナイフ形石器が主として発見されています。石材には相模野の旧石器ではよく利用される緑色の硬質細粒凝灰岩が主に利用されており

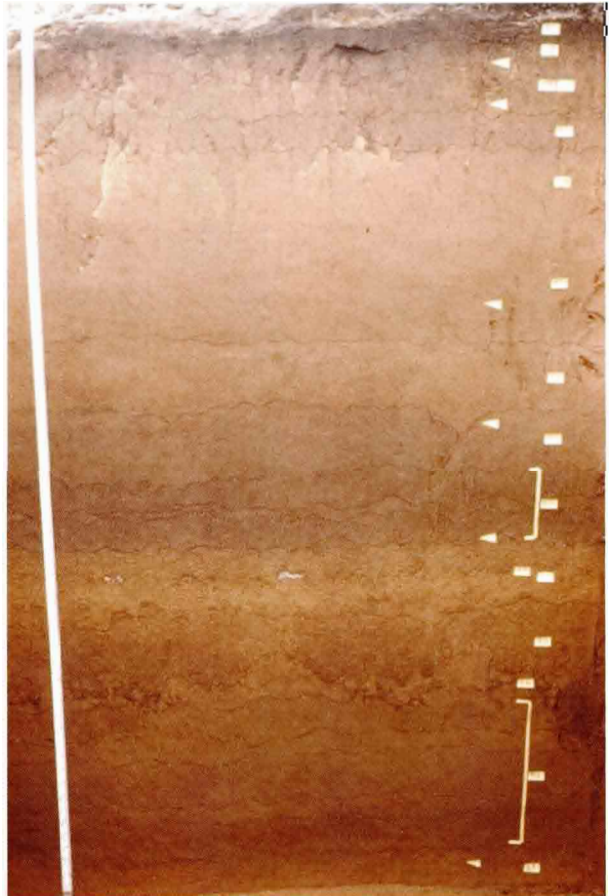


写真26 相模野台地のローム層序（栗原中丸遺跡）



写真27 上土棚笹山遺跡の出土石器

ます。また、それとともに、槍先形尖頭器も主な石器となります。この時期には、石刃と称される縦長の剥片がナイフ形石器の素材としてよく利用されています。ちなみに、写真27は綾瀬市の上土棚笹山遺跡の石器群、写真28は本蓼川遺跡の石器の写真を利用させていただきました。図40に示した遺跡の分布図は、旧石器研究プロジェクトでかつて作成した、相模野B1層下部相当の石器群が発見されている遺跡をプロットしたものです。主に、相模野台地の台地内河川の脇に遺跡が点在しています。まわりは境川の流域、そういった河川に沿って遺跡が分布する姿が見えます。先程の安蒜先生のお話でいえば、川辺のムラということになるのでしょうか。相模野台地の河川沿いに遺跡が点在しています。



写真28 本蓼川遺跡の出土石器

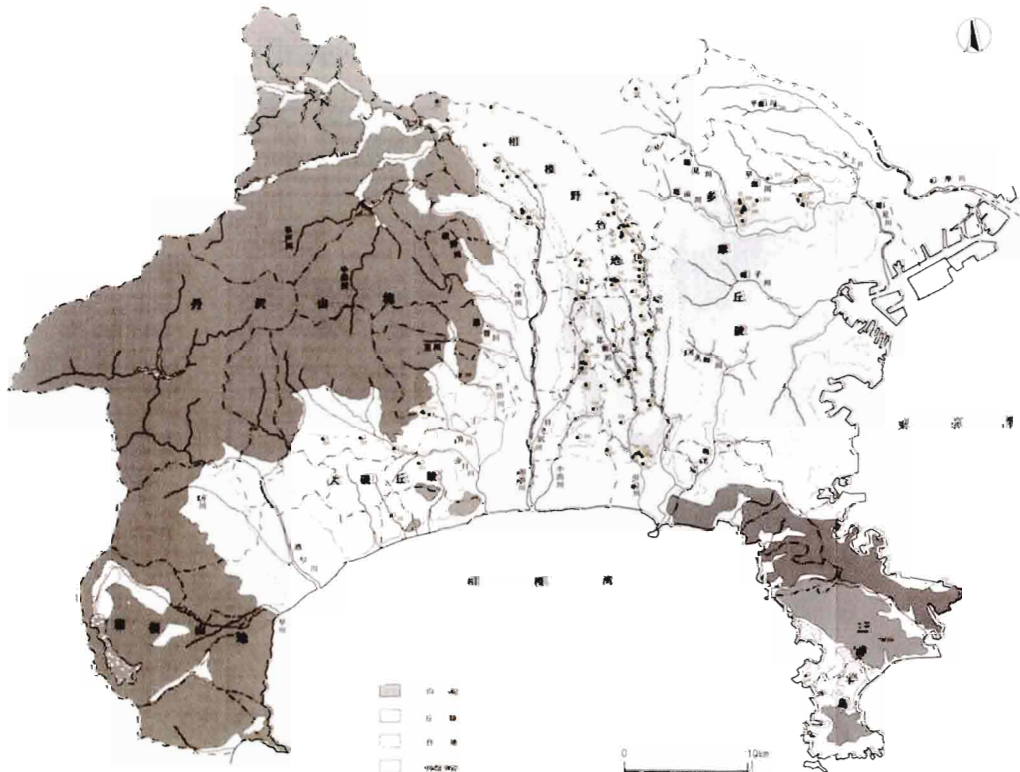


図40 B1層石器群出土遺跡の分布

次に、遺跡間接合が確認された石器群の紹介をします。対象とする遺跡は吉岡遺跡群B区、綾瀬市の南の方に所在する吉岡遺跡群で、図41の上の★印になります。こちらは真ん中に西の方から低地、谷がカニの足のように入りっており、この谷をぐるりと囲むように丘陵・台地が伸びています。一番西の大きな台地がB区です。こちらの石器群になります。第一次調査と第二次調査を通して、最下層としては、B4層下位の資料があり、畠中さんの発表であった、石斧を伴うような資料に相当する時期のものから発見されています。この中には、石斧の製作時に産した剥片が含まれています。石器群はその他に、B3層、B2層、B1層と複数の遺物群が、重層的に発見されています。そういった重層的な吉岡遺跡群B区の石器と約2キロ離れた距離にある藤沢市の用田鳥居前遺跡の石器とが接合しました。藤沢市の北で、図41の下の★印になります。こちらB2層より上のB1層、L1S層、ローム漸移層にかけて石器群が確認されています。これらの二つの遺跡はそれぞれ台地にのっていますが、その間には、低地が存在します。

実際どんな資料が見られるか。図42の上が吉岡遺跡群B区の遺物分布です。直径10m、石器集中1としたま

とまりの中に、密集部が二つ、三つあります。礫群1とありますが、北の密集部と重なるように礫群が存在するという分布状況です。こちらはナイフ形石器、搔器、削器と多種類の石器が石器集中の中に認められました。点数も700点を超え、石材も硬質細粒凝灰岩を中心に黒曜石、珪質頁岩、硬質頁岩といわれる石材が多種類認められました。一方、図42の下が、用田鳥居前遺跡の石器分布です。縮尺は吉岡と同じにあわせてあります。接合資料が出土したのは第3石器集中とされたかたまりです。こちらは、径4m程度の広がり、細かいドットがありますが、これらは炭化物のドットがほとんどです。石器は、礫石器の破片をのぞくと20点ほどで点数は多くなく、散漫な分布を示しています。石材も硬質細粒凝灰岩と珪質頁岩で、器種も少ない。そういう違いがみられました。次に吉岡の石器接合関係を石材ごとに見ていきます。緑色が礫群ですが、こういった重なりを示しており、接合が確認された三つの石材で見ると、硬質細粒凝灰岩(図43)は北と南の二つの密集部にまたがって分布しています。接合も北と南にまたがって接合しています。図

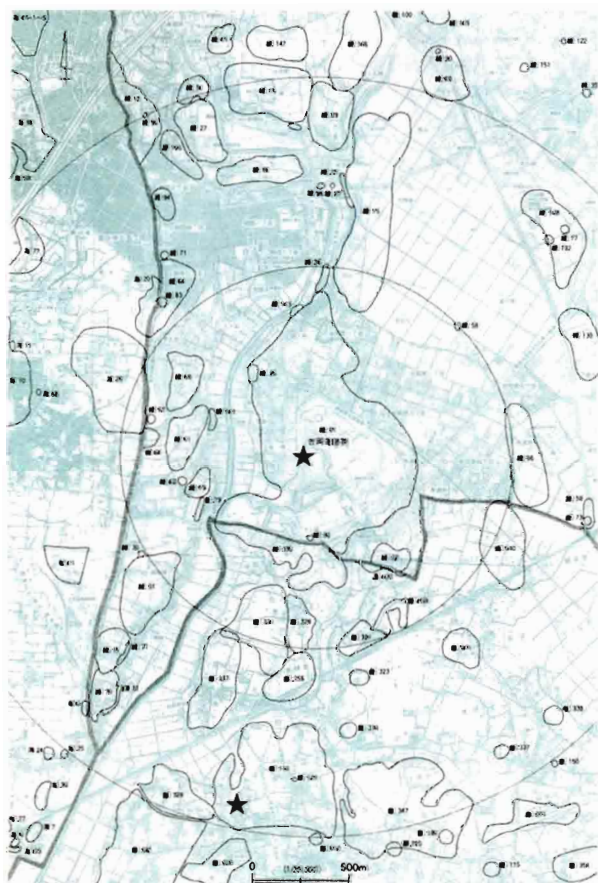


図41 吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の位置

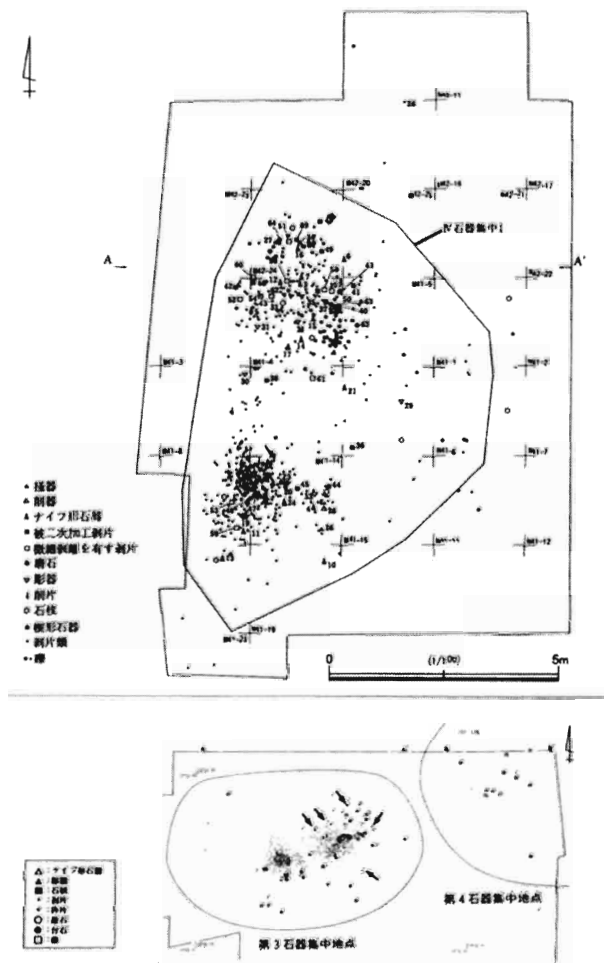


図42 吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の遺物分布

44は、碧玉（黄玉石）で、こちらも北と南の両者密集部にまたがるように分布し、接合も確認されます。図45は、珪質頁岩で、こちらは北の密集部に分布し、接合も北のみです。この三つのうち二つが北と南の両者にまたがって接合が確認される。とくに、凝灰岩は密に接合しているのです、おそらく、等しい時期に残されたといえます。

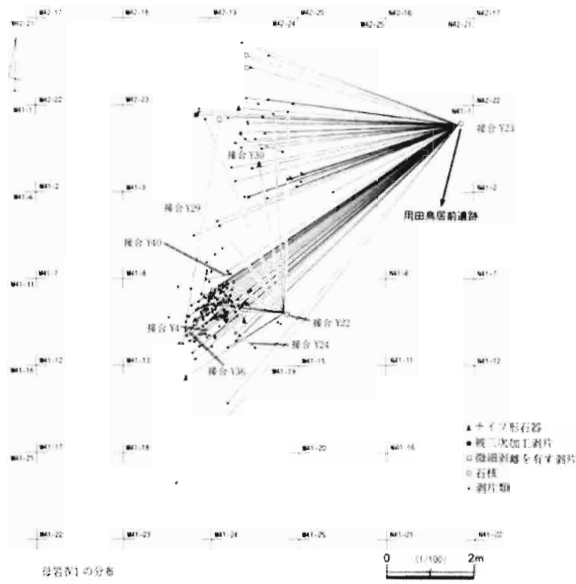


図43 遺跡間接合個体（硬質細粒凝灰岩）の分布

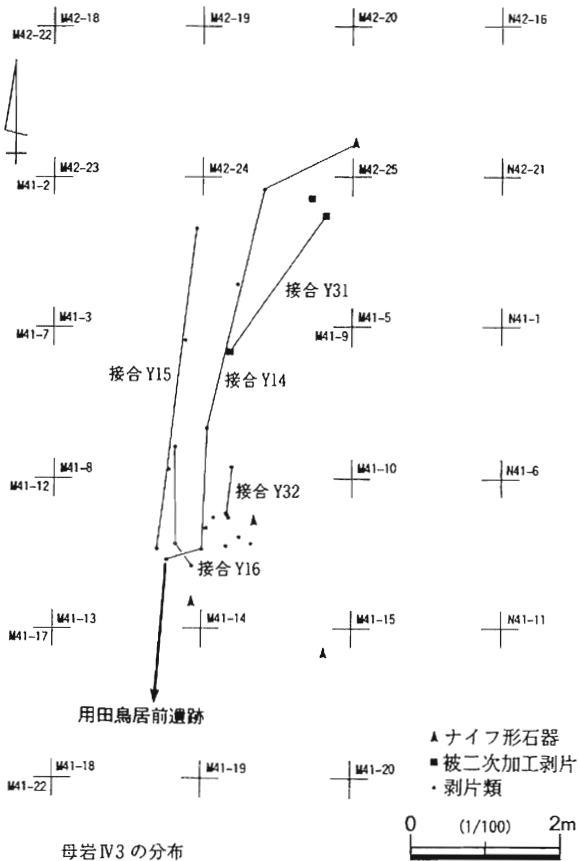


図44 遺跡間接合個体（碧玉）の分布

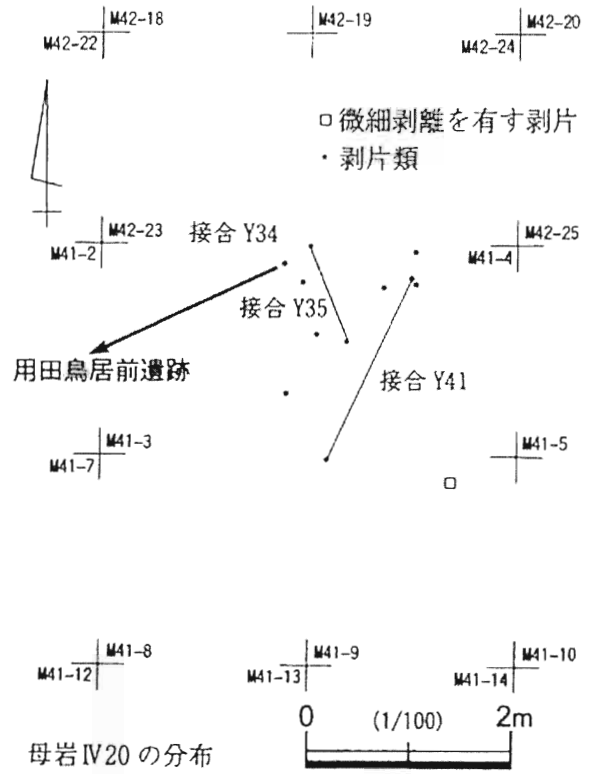


図45 遺跡間接合個体（珪質頁岩）の分布

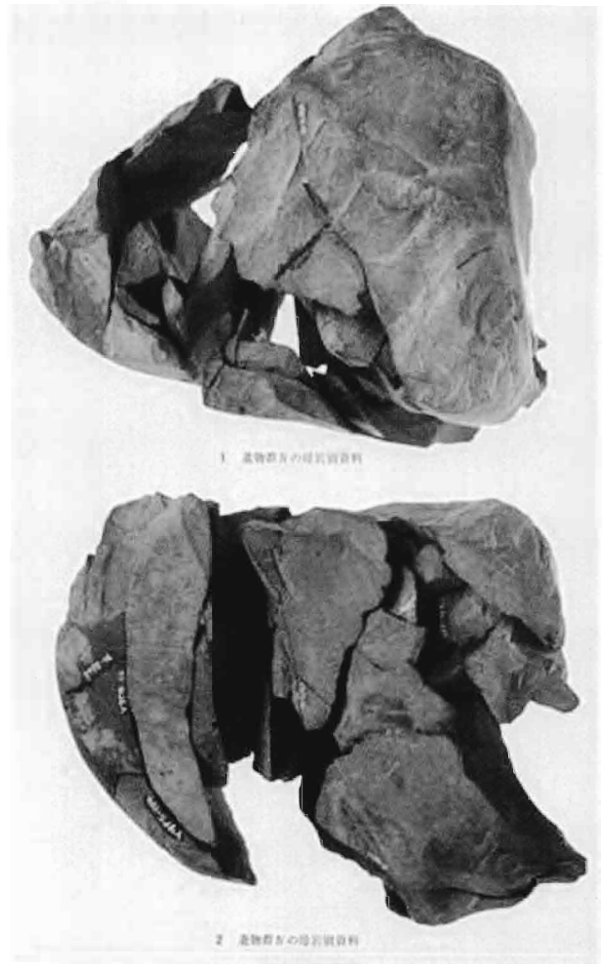


写真29 吉岡遺跡群の接合個体 (1)

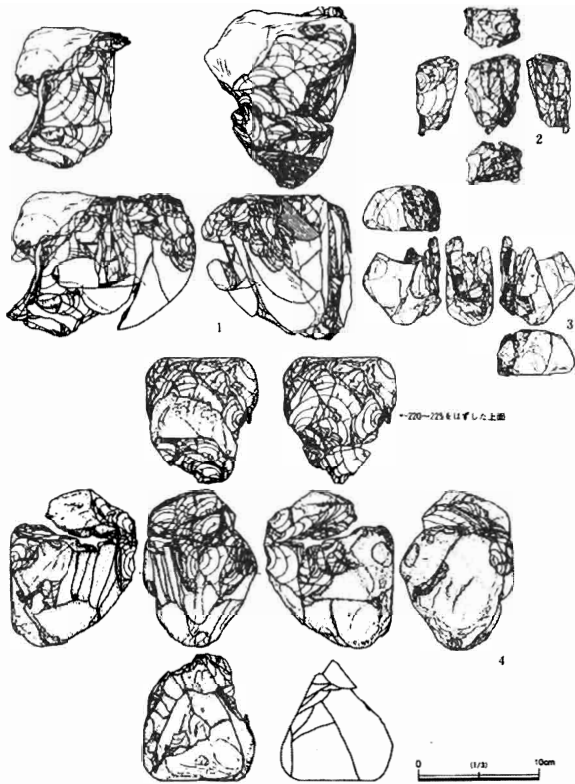


図46 吉岡遺跡群の接合個体(2)

吉岡で残された接合個体(図46・図47)をみてみます。ここでは、島田和高さんが個別別資料に対して使用された「消費完了原料」、「消費途次原料」という表現を利用させていただきます。ここでは石核を含む接合個体(写真29、図46)を、消費完了を示す接合個体とします。いずれも、石核が中に含まれており、それぞれ吉岡で消費が完了していることを示しています。いずれも硬質細粒凝灰岩の接合個体で、長径が15cmから20cmほどの塊の状態に遺跡に持ち込まれたと考えられます。なぜならば、こういった接合個体は原礫面(原石の表面)を残す剥片が多数接合しているからです。それによって、最初から最後まで吉岡で消費されたことを示していると考えられます。一方、石核を含まない消費途次を示す接合個体(図47)も存在します。この時期の石材消費に関しては、石材の搬入と搬出による遺跡連鎖が想定されます。それぞれの遺跡で、遺跡内に石材が持ち込まれ、遺跡内で消費され、それが途中でほかの遺跡に石材が持ち込まれることで遺跡が連鎖すると考えられています。図47も、石核を含まない資料ということで、吉岡で消費されたのち、さらに別のところへ持ち出されたであろう接合個体です。図47の上段左(1)は、遺跡間接合が確認された石材と同じ碧玉で剥片同士の接合個体です。同じく上段の中と右(2・3)は、珪質頁岩で剥片同士の接合で石核なし、それ以外の5個体(4~8)は、硬質細粒凝

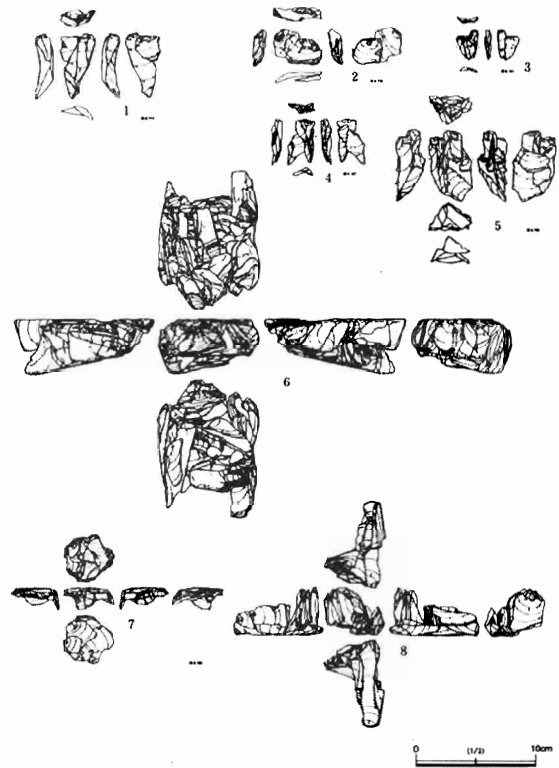


図47 吉岡遺跡群の接合個体(3)

灰岩の接合個体で、石核が残されていませんが、ナイフの素材が打ち剥がされて、それが接合しており上と下それぞれから打ち剥がされています。しかし、原礫面を残す剥片が接合しているので、ある程度原石に近い状態で持ち込まれ、石核準備から始まり、目的とするナイフの素材をはがした後、石核に相当する部分が持ち出されている個体です。図47の7も良質の石材ですので、石核の打面に相当する部分を周囲から打ち剥がして、打面を整える作業を行っています。石核が残されていない資料です。こちらの吉岡で見られた接合資料から、最初から最後まで消費が吉岡で行われた資料。石核石材消費が途中で終わり、石核が他へ持ち出された資料の両者が確認されました。

それが、用田との関係の中で見てみると(写真30・図48)、Aとした硬質細粒凝灰岩の接合個体ですが、303は、やや大ぶりの縦長剥片で用田で見つかった剥片。321~323はナイフと剥片で、こちらは最終の石核に接合するものですが、消費の比較的前半に近い段階、消費の後半に近い段階、それぞれ、吉岡の資料と接合しています。原石が持ち込まれて、吉岡でバカバカと打ち割られ、ナイフの製作も吉岡で行われた。BとCとする碧玉、珪質頁岩の接合個体、こちらは、いずれも石核が含まれず、消費途次を示す接合個体。すなわち、この確認から、やはり用田を経たとしても、やはり、碧玉、珪質頁岩は消

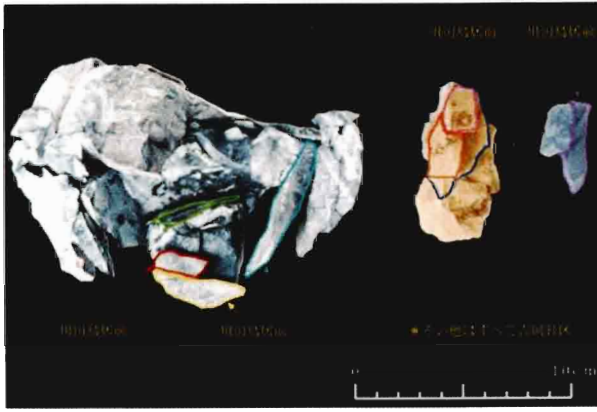


写真30 吉岡・用田の遺跡間接合資料(1)

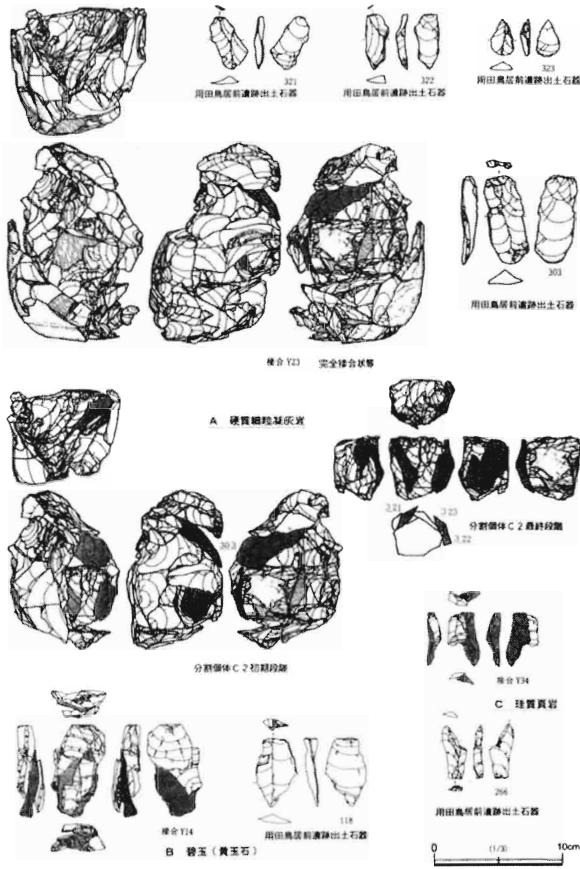


図48 吉岡・用田の遺跡間接合資料(2)

費途次の状態を示すことが確認できます。

では、こうした吉岡のように、石材を持ち込んで、原石から消費しつくす消費完了原料を示す資料が多く認められる遺跡がほかにあるかという点、同じ目久尻川沿いにあります。それが、座間市の栗原中丸遺跡の第V文化層の石器群です。栗原中丸遺跡は非常に多くの石器集中・ブロックが確認され、資料も多数の石器が発見されています。石材には硬質細粒凝灰岩が主として用いられていることが示されています。図49が石核を伴う消費完了原料を示す接合個体で、打面から連続的に縦長剥片を打ち剥がして、それが石核に接合する姿が認められる

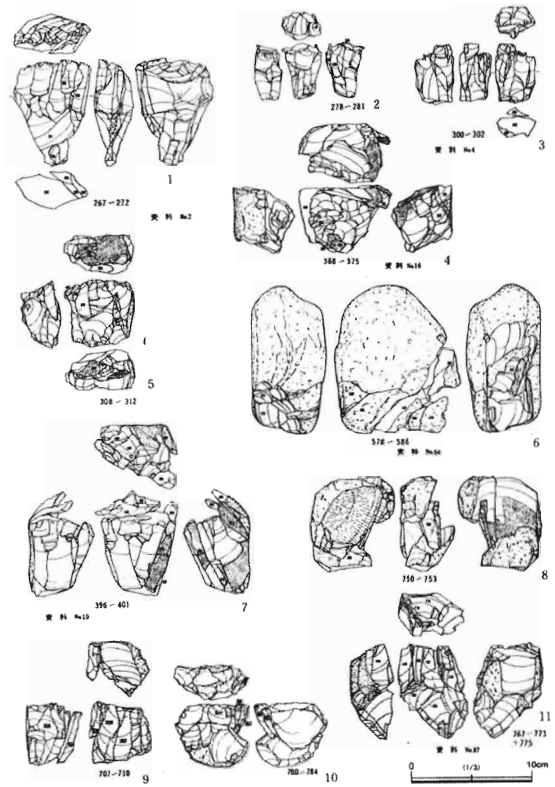


図49 栗原中丸遺跡第V文化層の接合資料(1)

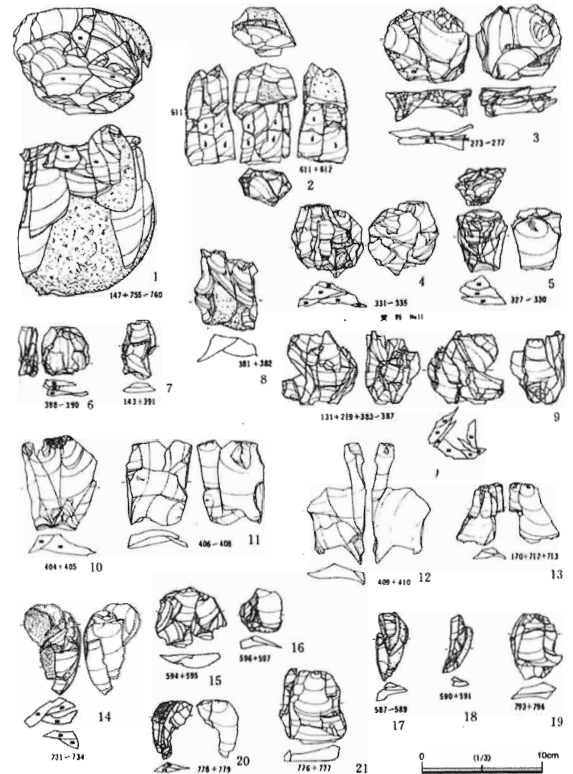


図50 栗原中丸遺跡第V文化層の接合資料(2)

接合個体です。図49の6は、原礫面を広く残す資料が接合しているので、原石で持ち込まれて、その場で消費されつくしている。こちらも消費完了から石核を伴う資料、それ以外に石核を持たず消費途次を示す資料もある。図50の1・2を除く資料は、剥片が接合する個体です。

吉岡

出土石器点数
構成する器種 多
構成する母岩



本拠地

用田

出土石器点数
構成する器種 少
構成する母岩



野营地

- ・遊動生活
- ・本拠地と日常的野营地の関係＝
微視的遊動景観
- ・本拠地の移動や遠隔地石材産地への移動＝
巨視的遊動景観

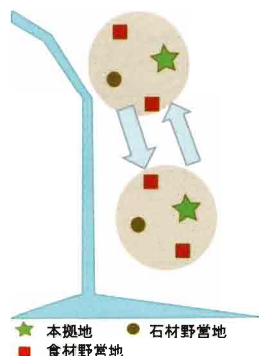


図51 吉岡－用田から見える遊動生活

石核の端部を取り込むように、石核の調整、整形に伴う資料や吉岡の資料によく似た石核の整形、調整にまつわる作業を示す資料があります。こうした資料が栗原中丸では認められ、吉岡の消費に近い消費を示しています。栗原中丸では石器集中が多数認められ、時期差も想定されるので、全部ひっくるめというのはおおよぼな議論かもしれませんが、吉岡の消費のあり方と似ているのではないかと思います。

では、立ち戻って、吉岡・用田から見えるものは何か。図51は遊動生活と書かれていますが、吉岡の方では、構成する非常に多数の石器、多種の器種、多種の石材があった。用田は少ない点数、少ない器種、少ない石材であった。そこから、吉岡がホームベース。用田は狩猟等の作業に伴う野营地と考えられます。用田の石材消費の痕跡は乏しく、本拠地で大量に消費し、ナイフの素材となる剥片やナイフを持ち出し、用田に残されるような野营地で活動を行って、食材の確保を行った際に使用したものが残され、その活動の後に、野营地である用田から本拠地に戻って行ったと考えられます。

それを模式化してみます。遊動生活というと、広い範囲を往還しながら、行き戻りしながらも、実際には、日常的な範囲や、活動域の移動というのは、その一部にあって、ある一年を見てみると定まった範囲を活動域としていることになると思います。そして遊動については、その範囲のステージがあると思います。本拠地と食材野



写真31 吉田政行氏

营地、石材野营地ということで図51の下段に図化してみました。こうした範囲、用田と吉岡では2 km、直径4 kmが日常的なマイクロな遊動景観といえるかもしれません。そういったものから、本拠地の移動に伴って、座間の方へ、マイクロな景観が移動する。さらには、この時期、黒曜石の産地である中部高地・信州へ、石材獲得のために、さらに、北西のほうへ移動していったであろうマクロな遊動景観が想定されます。こちらは諏訪間さんから、日帰りとか一泊とか話ありましたが、諏訪間さんが話をされたB2の時期と比べて、この時期が異なるころは、南西方向へのベクトルが弱くなっているのかなと。箱根の石材、黒曜石が乏しくなっている。最後に、「吉岡・用田をこえて」と出ましたが、相模野では、こうした本拠地と野营地のサークルが河川沿いに、信州方面へ向かって影響することで、遊動生活が営まれていた。そして、「季節性」とあげましたが、それは、こうした信州への石材採取は夏に行ったのではないかという点を示したものです。

以上、お茶を濁すようで恐縮ですが、これで終わりとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会 吉田さん、どうもありがとうございました。コメントについては、川崎市教育委員会の服部隆博さんをお願いします。

服部 川崎市の服部と申します。よろしく申し上げます。

今日のテーマは、ムラと住まいを探るということですが、ただいま吉田さんからお話のあった遊動生活について、私からは、用田鳥居前遺跡のような小規模な遺跡に着目し、午前中、安藤先生がお話しされた川辺のムラ、ここでどのような暮らし、住まいが行われていたのかということについてお話ししたいと思います。このため吉田さんのような大きな話ではなく、小さな話をいたします。そこで用田鳥居前遺跡と同じく小規模な遺跡で、私がかかりました川崎市宮前区鷺ヶ峰遺跡の分析結果を

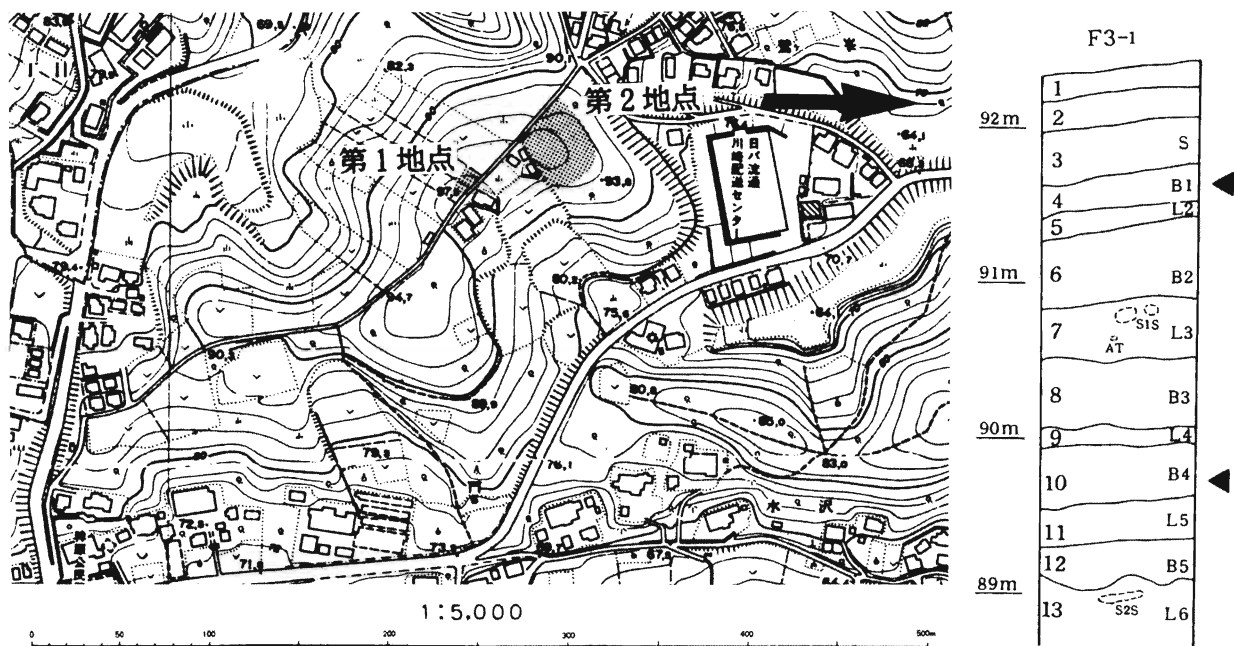


図52 鷺ヶ峰遺跡の地形図

踏まえながらコメントをしたいと思います。

図52は、鷺ヶ峰遺跡の地形図です。この遺跡は、多摩丘陵1面の狭い尾根上に立地し、第1地点とそこから80m離れた第2地点が調査されており、今日は第2地点を中心にご紹介したいと思います。

図53・54は、鷺ヶ峰遺跡の全体図ですが、第2地点は3ブロックから構成され、出土石器の総点数は34点です。先ほどの用田鳥居前遺跡はどうかといいますと、2ブロックからなり出土石器は31点で、ほぼ同じような規模の遺跡であるということが出来ます。

図55・56は、個体別の資料が3つのブロックからどのように出土したのかを表した図です。出土石器の内訳は、まずナイフ形石器1点、ドリル1点、削器3点、微細な剥離痕のある剥片14点、剥片・碎片14点、石核1点という構成になっております。微細な剥離痕のある剥片というのは、なかなか聞き慣れない名前ですが、今まで使用痕のある剥片といていたものです。どういうものかといいますと、剥片の鋭い縁辺に小さな剥離痕が連続して認められるもので、いうならば刃こぼれのある剥片ということが出来ます。そして、用田鳥居前遺跡の方は、ナイフ形石器2点、彫器1点、石のハンマー2点、台石1点、剥片23点、石核2点と報告書に記載されています。ですから、刃こぼれのある剥片がないなあと気になりまして、神奈川県教育委員会をお願いして見せていただいたところ、私の観察では、剥片の中に8点ほど微細な剥離痕のある剥片がありました。接合している石器はよく見えませんので、さらに1・2点は増えるかもしれませ

んが、剥片の3分の1から2分の1が微細な剥離痕のある剥片でした。そうしますと、鷺ヶ峰遺跡と用田鳥居前遺跡は、極めて類似した規模と内容をもつ遺跡であるということが出来ます。つまり、ナイフ形石器のような定形的な石器が少なく、微細な剥離痕のある剥片を主体とする石器群であります。

図57は、相模野台地・多摩丘陵・下末吉台地・武蔵野台地の旧石器時代遺跡の分布図ですが、今私たちがいる横浜市北部や川崎市の多摩丘陵あるいは下末吉台地の遺跡はどうかといいますと、坂本彰さんが「貧弱な遺構と乏しい遺物」と的確に指摘されていますけれど、鷺ヶ峰遺跡と同じような小規模な遺跡が多いということです。遺跡数はどうかといいますと、大杉山神社遺跡をはじめ全部で15くらいは遺跡しかありません。この地域

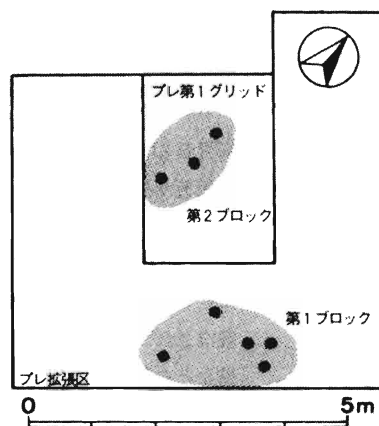


図53 鷺ヶ峰遺跡第1地点全体図

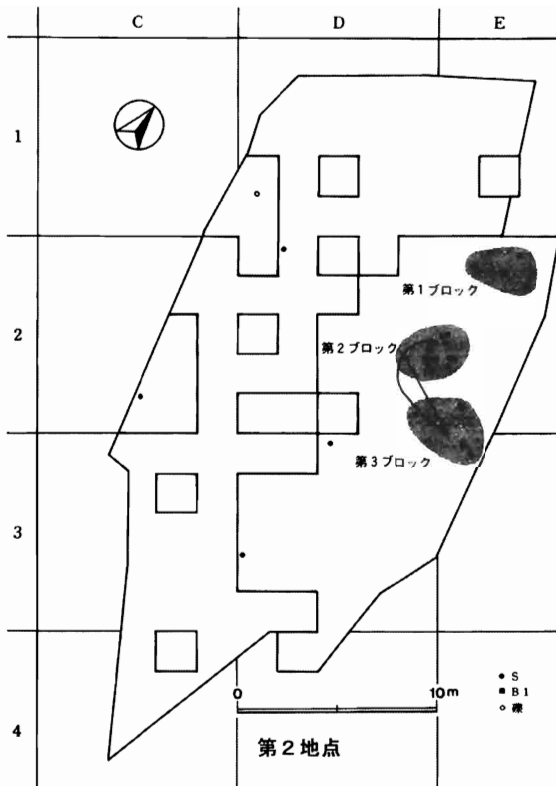


図54 鷺ヶ峰遺跡第2地点全体図

個体	第1ブロック	第2ブロック	第3ブロック	ブロック外	攪乱地
No. 1		19	18		
No. 2		17			
No. 3		27			
No. 4		26			34
No. 5		23, 21	20		
No. 6	29				
No. 7				33	31, 32
No. 8				28	
No. 9					5
No. 10	15, 14	16, 8, 30		9	
No. 11	23	3, 2	13, 6		
No. 12		11, 24, 22	25	10	
No. 13				1	
No. 14				7	
No. 15				12	

図56 第2地点各ブロックの個体別出土石器

の立川面や武蔵野面の台地は沖積低地の下に埋没しているので遺跡が分かりにくかったり、遺跡自体が小規模なので見つかりにくいということもありますので、実際の遺跡数はもっと多いと思われます。

次に規模ですが、出土石器は三ノ丸遺跡の153点が最も多く、ほかは50点以下の小規模な遺跡です。先ほど申し上げたような定形的な石器が少なく、微細な剥離痕のある剥片を主体とする遺跡ということが出来ます。そうしますと、小規模な遺跡では微細な剥離痕のある剥片を主体とするということは、その微細な剥離痕のある剥片とはどういう石器かということが分かれば、小規模な遺

跡はどのような性格の遺跡なのかということが分かってくるのではないかと考えてみました。

それでは、微細な剥離痕のある剥片、刃こぼれのある剥片とはどういう石器かということについては、横須賀市の佐藤さんが横須賀市長浜ノ上遺跡、今は「ソレイユの丘」という公園になっていますが、この遺跡の分析をされておりまして、微細な剥離痕のある剥片は、「引き切り」、「押し切り」という今でいうナイフのような使い方をしていたということが分かっています。また、細かい刃こぼれがただけですので、あまり硬いものを削ったり、長い時間使用したものではなく、いわば肉のような柔らかいものを切ったり、遺跡間の移動に携行して長い間大切に使用した石器ではなく、いわば消耗品的に使用して刃こぼれが生じたら捨ててしまうというような石器であると思われます。それから、微細な剥離痕のある剥片は、基本的にはその場で剥離した剥片を使用するものではなく、石器を集中的に作った場所、先ほどの話では吉岡遺跡群や栗原中丸遺跡などから装備品として持ってきた剥片を使用していると考えられます。

結論を申し上げます。

これまで述べた各要素を総合的に考えてみますと、微細な剥離痕のある剥片を通して小規模な遺跡でのリアリティーのある生活が少し分かってきたかと思えます。ど

個体	第1ブロック	第2ブロック
No. 1	4, 7	
No. 2	2, 5, 9	8
No. 3		3
No. 4		6
No. 5	1	

図55 第1地点各ブロックの個体別出土石器

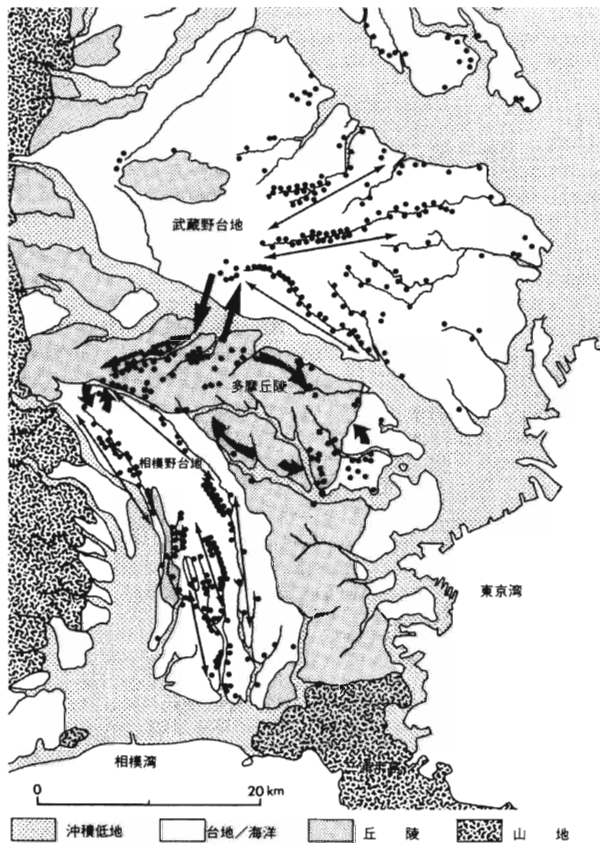


図57 関東地方西南部の旧石器時代遺跡の分布

ういう内容かといいますと、2～3家族程度からなるグループが移動しやすいテントで寝起きをして狩りを目的に短期的なキャンプをしていた。そして、食料がなくなっ



写真32 服部隆博氏

たり、装備品としての石器がなくなったらベースキャンプに戻る。ベースキャンプというのは大規模な遺跡であり、吉岡遺跡群や栗原中丸遺跡などで、また集中的に石器製作を行い、遊動生活に戻っていく。ここで先ほどの吉田さんの遊動生活に結びつく訳です。このような光景が目に見えてくるのではないのでしょうか。小規模遺跡というのはあまり注目されることはなく、遺跡間接合のようなことがなければ見逃されてしまいがちですが、実は、小さい遺跡にこそ日常の生活の様子を知るための重要な手がかりが潜んでいるのではないかということをお話しさせていただいて私のコメントとさせていただきます。

司会 服部さん、どうもありがとうございました。

槍先形尖頭器文化期のムラ

－石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産－

発表 鈴木 次郎
コメント 及川 穰

司会 では、引き続きまして、「槍先形尖頭器文化期のムラ－石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産－」と題しまして、かながわ考古学財団の鈴木次郎さんに発表をお願いします。鈴木さん、よろしくお願ひします。

鈴木 かながわ考古学財団の鈴木です。よろしくお願ひします。

これから「槍先形尖頭器文化期のムラ」と題してお話しさせていただきます。これは、これまで吉田さんがお話ししたB1層のナイフ形石器文化期に続くもので、相模野では槍先形尖頭器を中心とする石器群がありまして、そうした時期のものであります。この時期の中で、今日お話しするのは、清川村宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺

跡で石囲い炉がみつかっており、その事例を中心に発表したいと思います。しかし、宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡の事例は、相模野全体の中では一般的なものとはいえませんので、寺尾遺跡第Ⅱ文化層という一般的な事例と比較するかたちで発表させていただきます。

この発表の前に、まず私なりに用語について整理したいと思います。私は、石器が集中しているところをブロックと呼んでいます。これは安森先生も同じように呼んでおられますが、研究者によっては、石器集中とか石器集中地点という呼び方もしております。そうしたブロックがいくつか分布して一つの遺跡を構成するわけですが、各ブロックから出土した石器群について、母岩別資料あるいは個別資料分析により密接な関係が捉えられ、同時

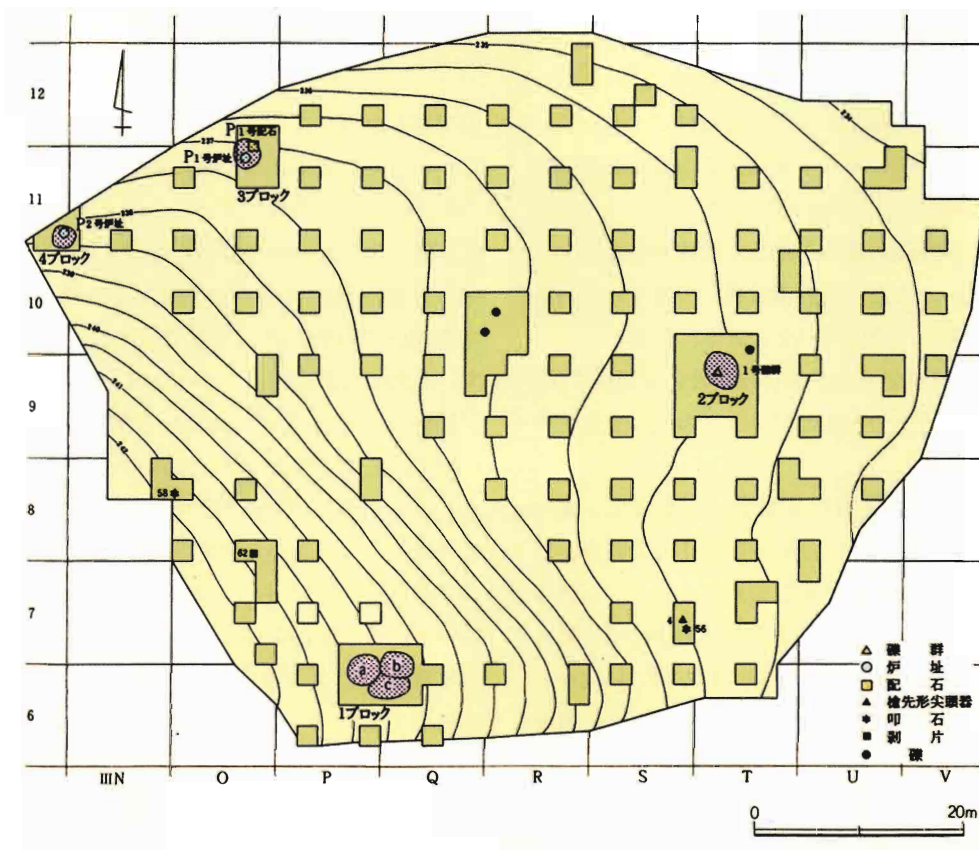


図58 サザランケ遺跡第Ⅲ文化層全体図

に存在したと考えられるブロック群についてユニットと呼んでおります。今日のテーマでいえば、ユニットがムラに相当するでしょうし、ブロックはイエに相当するものと私は考えており、これからの発表はこうした考えのもとでの発表です。

まず、清川村宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅲ文化層の概要ですが、その立地は、丹沢山塊の小規模な段丘地形であり、石器の出土層位は、L1H層の上位から中位で、槍先形尖頭器文化期の後半に位置づけられます。遺物の分布は、4ヶ所のブロックが遺跡全体に点在し、各ブロックではいずれも槍先形尖頭器を盛んに製作しております。

発見遺構は、まず第1ブロックでは遺構はなく炭化物集中のみ確認されました。それに対して、第2ブロックでは礫群が発見されています。第3ブロックでは石囲い炉・配石・礫群が集中して発見され、第4ブロックでも石囲い炉が発見されています。

次に石器群の内容ですが、出土石器は合計2,823点であり、そのうちの98%が剥片・碎片という、いわば槍先形尖頭器を製作した際の石屑が中心で、ほかに槍先形尖頭器の素材となりうる剥片もあります。道具となっている石器は、槍先形尖頭器が37点、これは実際には多くが加工途中で折れているため資料数は47点あります。そのほか削器が1点、RF（加工痕ある剥片）が4点、UF（使用痕ある剥片）が4点で、石器製作に使用した叩石3点、台石1点ほかという内容です。そして石材ですが、2,351点と全体の82%が箱根のガラス質黒色安山岩を石材としており、これは個体分類で8個体以上あることはわかっておりますが、個体差の識別が難しく個体分類が完全にはできていません。また、硬質細粒凝灰岩あるいは凝灰質頁岩といった凝灰岩類が449点7個体、黒曜石がわずかに13点で4個体、文紋岩6点1個体ほかという構成です。

それでは簡単に遺跡の内容とブロックの内容を見ていきたいと思えます。

写真33は、調査中の遺跡の遠景で、現在は宮ヶ瀬ダムが完成して宮ヶ瀬湖という湖の湖底に沈んでおり、かつてはこういう溪谷の風景を示しておりました。写真の上方から早戸川が流れてきて、手前左から中津川が流れてきて下の中央で合流し、中津溪谷（右方向）に向かっていきます。サザランケ遺跡は、そのすぐ上にある遺跡で、二つの川の合流部に形成された小規模な段丘地形に立地しています。さらに、写真の奥には上原遺跡・中原遺跡があり、同じ小規模な段丘上に立地しています。

図58は、サザランケ遺跡第Ⅲ文化層の全体図です。



写真33 宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡の遠景

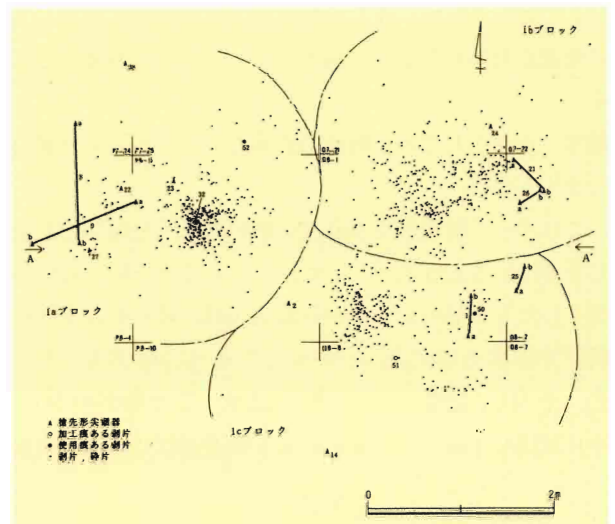


図59 第1ブロック遺物分布図

○で示したのがブロックの位置で、みてわかりますようになりかなり離れて点在しております。ブロック間の距離は一番近いもので第3ブロックと第4ブロックが18m、それ以外ですと40mから60mも離れています。ブロックの分布はかなり特異なあり方を示し、遺跡は東西100m、南北70mの台地のほぼ全体を占めているという状況です。それでは個別にみていきます。

図59は、第1ブロックの分布図です。図58で3つの○印を示しているように、東西6m、南北4mの広がりをもちますが、詳細にみますと1a、1b、1cという3つの小ブロックから構成されております。ここからは、出土石器が1,453点あり、そのうちの1,430点が剥片・碎片で槍先形尖頭器を作った際の石屑です。

写真34は、1ブロックの出土石器です。左側4列は槍先形尖頭器でいずれもガラス質黒色安山岩を石材としております。いくつか接合しているのがわかりますように、大半が加工途中で折れてそのまま放棄され、未成品の状態に残されたものです。次に、右の4点は剥片で、槍先形尖頭器の素材として準備された剥片だろうと考え



写真34 第1ブロック出土石器(1)



写真35 第1ブロック出土石器(2)

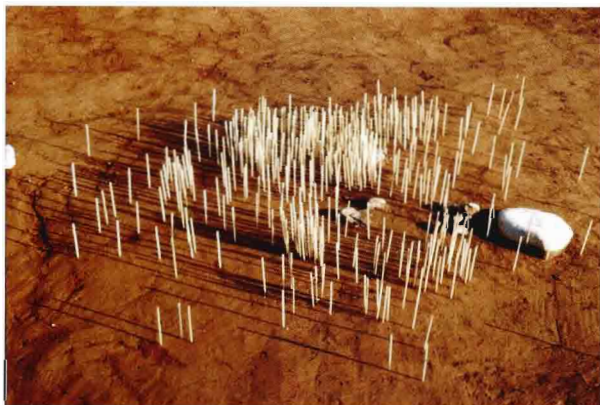


写真36 第2ブロック遺物出土状況



写真37 第2ブロック礫群と台石



写真38 第2ブロック出土石器



写真39 第3ブロック遺物出土状況

ております。これらの石材もガラス質黒色安山岩です。そして、右下の2点は、黒曜石の剥片で、伊豆柏峠産の黒曜石です。

写真35は、硬質細粒凝灰岩で槍先形尖頭器を作っており、右は未成品の槍先形尖頭器です。また左は、未成品の状態で二つに折れたもので、加工した際に剥離された剥片が接合した状態のものです。

写真36は、第2ブロックの遺物分布状態です。こちらは径3 mぐらいの範囲に石器が集中して出土しています。この写真は石器が出土した位置を最終的に串で表示したもので、実際にはかなり上下差をもって出土しています。出土石器としては、左端に少し見えるのが礫器で、右の大きな石が台石です。そして、台石の左側にいくつか石が見えるのが礫群です。ここでは石器は728点出土していますが、礫器と台石を除くと、すべてガラス質黒色安山岩の槍先形尖頭器と剥片・碎片です。

写真37は、写真36から石器を示す串を取り除いた状態で、台石と礫群です。礫群は、このように非常に貧弱な礫群です。拳大の礫が完全なカタチ、あるいは割れた状態で出土しており、これ以外に、石器と一緒に取り上げた断片があり、合わせて25点あります。大きな石は台石です。これより、先ほどの石器の分布状態をみると、

礫群の傍で石器を作っていたということがわかります。

写真38は、第2ブロックの出土石器です。いずれもガラス質黒色安山岩を石材としており、右の2点を除き槍先形尖頭器です。右の2点は、加工痕ある剥片あるいは使用痕ある剥片とした石器で槍先形尖頭器の素材の可能性のある石器です。

写真39は、第3ブロックです。第3ブロックは、直径2mほどの狭い範囲に石器が集中しており、さらにそこから少し離れたところから槍先形尖頭器など少数の石器が点在しています。この写真は石器の出土状態で、このように石器の出土レベルの高低差があります。石器が集中している下に石が少しみえますが、これが石囲い炉で、石囲い炉の傍で石器を作っており、そこに石屑を残したという状態を示しています。手前にみえる大きな石が配石です。さらにその右奥に焼けた拳大の礫が点在している礫群です。

写真40は、石器を取り除いた遺構全体の写真です。石囲い炉は、長さ1mくらい、幅70cmくらいの規模で、子供の頭の大きさの石を中心に20個ほどの石をU字状又はコの字状に配置しており、中のロームは赤黒く焼けて硬くなっているのが観察されました。手前の配石遺構は、人頭大の大きな石が密集していますが、焼けておりません。礫群としたものは焼けております。配石の性格はわかっておりません。

写真41は、第3ブロックの出土石器です。左側4点はガラス質黒色安山岩の槍先形尖頭器です。右の3点は、同じ母岩ですが、流紋岩の縦長剥片とそれに加工した削器です。右上の欠けた石器が削器ですが、これは4点の破片が接合したもので、それでもなお欠けた部分が残る完全な石器ではありません。資料数はこの破片4点を含め6点となります。これで全ての石器です。

写真42は、第4ブロックです。こちらは調査の不幸で一部を壊してしまいましたが、直径約4mの範囲から石器が出土しています。石がみえるのがやはり石囲い炉です。ですからここでも石囲い炉の傍で石器を作っていたことがわかります。

写真43は、その石囲い炉です。一部欠けておりますが、この左側から上の方に子供の頭大の大きさの石を配置し、反対側に拳大の石を並べています。このあたりが少し黒くなっているのがわかりますが、ここが特に焼けております。石囲い炉はこのような状態です。

写真44は、第4ブロックの出土石器です。ここではいずれもガラス質黒色安山岩の槍先形尖頭器と加工痕ある剥片を取り上げております。このほかに凝灰質頁岩が



写真40 第3ブロック石囲い炉と配石・礫群



写真41 第3ブロック出土石器

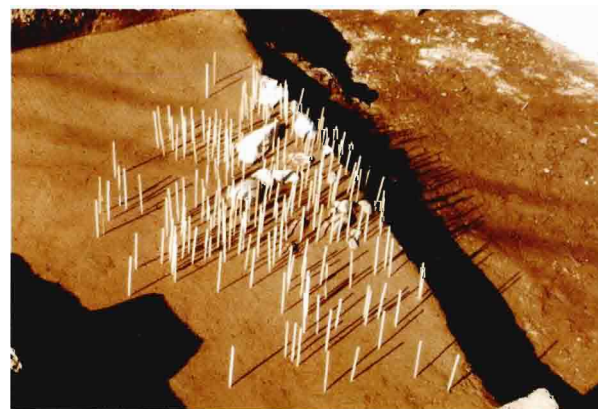


写真42 第4ブロック遺物出土状況



写真43 第4ブロック石囲い炉



写真44 第4ブロック出土石器

合計170点出土しておりますが、全て剥片・破片で、製作された石器は何処か違う場所に持ち去られたものと思われる。さらに黒曜石の小さな破片が10点ほど出土しております。同じ黒曜石でも第1ブロックとは異なり、信州和田峠産の黒曜石であり、和田峠産黒曜石でも石器の加工を行っていたことを示しております。

以上が、各ブロックの状況です。次に、サザランケ遺跡第Ⅲ文化層のブロックをまとめてみたいと思います。

まず第1ブロックでは、遺構は検出されておられません。しかし、炭化物集積が検出されています。さらに、第1ブロックは3つの小ブロックに区分され、それぞれの小ブロックをブロックとして捉えてもよいと思います。ですから第1ブロックは、3ブロックから構成される1つのユニットとして捉えることもできます。このブロックでは、他のブロックに比べて剥片・破片のサイズが大きく、平均約2倍の大きさがあります。こういったことから、このブロックは、槍先形尖頭器の素材作成から製品の製作工程まで一貫して行ったブロックと考えられます。

これに対して、第2ブロックから第4ブロックは、礫群あるいは石囲い炉を伴い、やはり槍先形尖頭器の加工を行っておりますが、剥片・破片の大きさが第1ブロックより小さく、素材からの加工を中心とした、あるいは折れた石器の再加工を行った、石器製作の後半段階の工程を中心としていたと思われる。

また、先ほど槍先形尖頭器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片といった石器は、石器が集中するブロックの周辺部から出土する傾向が認められるといましたが、こうしたあり方は、槍先形尖頭器の時期に限られるものではなく、B1層のナイフ形石器文化の時期にも認められます。こうしたことから、ブロックが槍先形尖頭器の生産場所とすると、その周囲に製品が置かれていたと捉えることができると考えられ、そうしますと、各ブロックは礫群や石囲い炉を中心にもつイエと捉えてもよいのではないかと考えられます。これは、午前中の安蒜先生の

講演で言及された、新しくなるとイエの中に礫群や炉をもつあり方に移行するという指摘と、くしくも宮ヶ瀬の例も同じようなあり方を示すということになります。

それから石材で最も多いガラス質黒色安山岩ですが、個体別にみていきますと、礫面をもつ剥片・破片が非常に少ないようです。このことから、この遺跡では、原石状態で持ち込まれたのではなく、原石を粗割した大形の剥片あるいは素材となる剥片の状態で持ち込まれたものと考えられます。これが宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡の特徴です。

サザランケ遺跡第Ⅲ文化層の特徴としては、まず各ブロックの共通点として、石材はすべてガラス質黒色安山岩を中心として槍先形尖頭器の製作を行っています。個体別資料の分析はなかなか難しいのですが、わずか1個体でブロック間の共有関係が認められます。このことから4ヶ所のブロックは同じ集団が残したブロックと考えられます。次に、相違点をみていきますと、各ブロック間の距離が大きく離れています。近い例でも第3ブロック・第4ブロック間で18mあり、他は40m~60mも離れています。しかもブロック間で石器の接合関係は確認されておられません。このことから、各ブロックは同時に残されたものではなく、同一集団が回帰的に、いったん遺跡を離れてから再びこの遺跡に戻ってきてその際に違ったブロックに居住したと考えられ、そのような生活を行った可能性が大きいと考えられます。ですからサザランケ遺跡のムラは、1ヶ所あるいは2ヶ所のブロックの、第1ブロックを3ヶ所のブロックと捉えるなら3ヶ所のブロックからなる小規模なムラであったと考えられます。

先ほどサザランケ遺跡は一般的ではないと申し上げましたが、次に、一般的な遺跡の中で比較的小規模な事例として寺尾遺跡第Ⅱ文化層についてご紹介します。

寺尾遺跡は、相模野台地の座間丘陵の尾根上に立地しており、第Ⅱ文化層の出土層位は同じL1H層でもやや下の方から出土しています。5ヶ所のブロックが40m×20mの範囲に弧状に分布しており、各ブロック間の距離は非常に近接しております。発見遺構としては、第3・4・5ブロックから小規模な礫群が検出されています。

石器群は、合計217点と少ないですが、やはりこの遺跡でも石器製作を行っており、190点余りが剥片・破片で占められます。石器としては、槍先形尖頭器が中心で、ナイフ形石器は1点、削器や加工痕ある剥片などが出土しています。石材は非常に多様で、チャート115点、ホルンフェルス51点、硬質細粒凝灰岩24点、黒曜石20点、



写真45 寺尾遺跡第Ⅱ文化層出土石器

ガラス質黒色安山岩7点という構成です。

写真45は、寺尾遺跡第Ⅱ文化層の出土石器で、上段が槍先形尖頭器で、その右端1点がナイフ形石器です。中段の左2点は槍先形尖頭器の未成品が折れたもので、それ以外は削器と加工痕ある剥片・使用痕ある剥片という石器で、石材は多様だということがお分かりだと思います。

図60は、ブロックの配置状況を示しておりますが、各ブロックは丘陵の肩に位置し、埋没谷を取り囲むように5ヶ所のブロックが弧状に配置されています。第3ブロックと第4ブロックの間は大きく開いておりますが、ここからも12点の石器が出土しており、何らかの活動を行っていた場所と思われ、ブロックの一つとして捉えることもできると思います。それから遺構としては、第3・4・5ブロックから小規模な礫群が検出されています。出土石器は、多いブロックで50点・60点、少ないブロックは13点、第5ブロックは最も少なく9点出土しております。第5ブロックを除き小規模ながら槍先形尖頭器の製作を行っており、第5ブロックでは槍先形尖頭器の製作の痕跡はみられません。こうしたブロックのあり方を示しております。

次に、各ブロックの関係(図61)をみますと、各石材毎に個別別資料に分けると、ブロック間での共有関係が多く、各ブロックが密接な関係をもつことが認められます。つまり、ここでは5ヶ所のブロックが同時に存在した一つのムラとして捉えることができると思います。

それでは、寺尾遺跡第Ⅱ文化層のムラをまとめてみますと、まず、小規模な石器製作を行っているブロックとして第1ブロックから第4ブロックがあります。逆に、石器の製作を行っていないブロックとして第5ブロックがあります。そして、5ヶ所のブロック間では合計8個

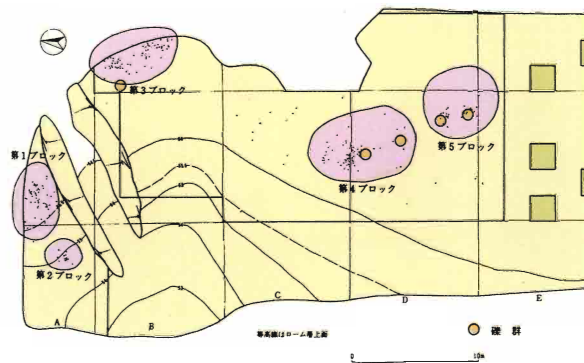


図60 寺尾遺跡第Ⅱ文化層全体図

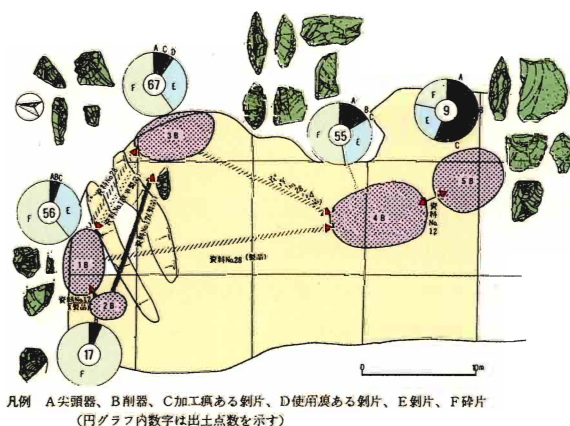


図61 第Ⅱ文化層ブロックと個別別資料関連図

体の共有関係が認められます。このことは予稿集の51頁の表に示しております。このようなことから5ヶ所のブロックは、一つのムラとして捉えることができると思います。

最後に、まとめとして槍先形尖頭器文化期のユニット＝ムラをみていきますと、まず前半では、今申し上げた寺尾遺跡第Ⅱ文化層を代表としますが、数箇所のブロックから構成されるユニットがみとめられます。これは、ナイフ形石器文化期の後半、つまりB1層の段階とほぼ共通したあり方を示しております。予稿集に示しておりますが、大和市局見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層や相模原市中村遺跡第Ⅲ文化層では、多数のブロックが検出されています。上野遺跡では、130m×40mの範囲から37のブロックと13の礫群が検出されていますが、これを個別別資料分析によって分けると、7つのユニットに分けられると報告されております。中村遺跡もほぼ同様のあり方を示しております。また、石器石材も寺尾遺跡第Ⅱ文化層で説明しましたように、多様なあり方を示しております。

これに対して、槍先形尖頭器文化期の後半は、サザランケ遺跡第Ⅲ文化層に代表されます。ここでは、1・

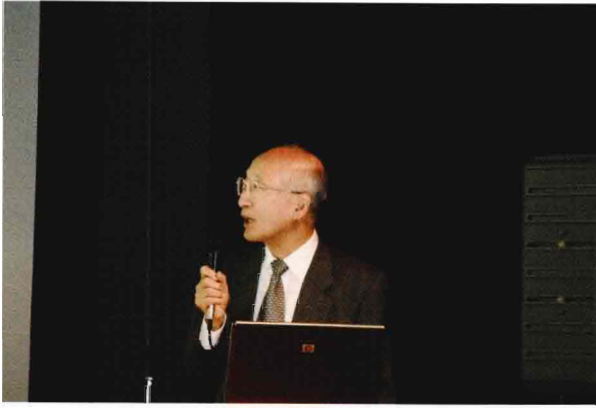


写真46 鈴木次郎

2ヶ所のブロックから構成される小規模なユニットが中心となります。その中には、サザランケ遺跡第1ブロックのように槍先形尖頭器の製作を集中的に行ったユニットもみられます。特に、藤沢市用田南原遺跡第Ⅱ文化層では、さらに極端にした大規模なユニットが認められます(68頁の**写真79**)。ここでは25m×15mの中に6ヶ所のブロックが集中して分布し、4,000点の石器が出土し、100点の槍先形尖頭器とそれ以外には微弱な加工を行った剥片が若干あるだけというサザランケ遺跡と同じあり方を示しています。石器石材は、やはりガラス質黒色安山岩がほとんどで、他の石材は少なくなります。このように、槍先形尖頭器文化期でも前半と後半ではその内容が変わっており、後半のあり方は、その後の細石刃石器群あるいは細石刃文化期につながるようなあり方を示すようになります。

以上で私の発表を終わります。

司会 鈴木さん、どうも有り難うございました。それでは、東京都教育委員会の及川穰さんに、ただいまの発表に対するコメントをしていただきます。及川さんよろしくをお願いします。

及川 東京都教育委員会事務局の及川と申します。鈴木次郎さんへのコメントをさせていただきます。

私は、修士論文や『考古論叢神奈河』14に掲載の論文(及川2006)を執筆する際に、神奈川県内の遺跡出土資料をかながわ考古学財団や大和市教育委員会事務局に見学させていただきました。特に今回のコメントはその成果を盛り込んだ内容となっています。鈴木次郎さんへの具体的なコメントになるかどうかはわかりませんが、鈴木さんの発表の中で、特に槍先形尖頭器の生産という点に焦点を絞ってコメントしたいと思います。

私は、石器石材原産地の開発、原産地遺跡の形成という観点から研究を行っておりまして、特に長野県長和町の黒耀石原産地遺跡である鷹山遺跡群の調査研究に参加

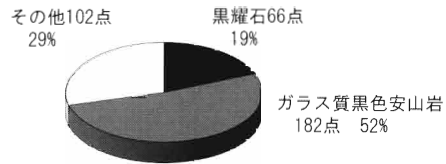


図62 石材別槍先形尖頭器点数

しており、原産地での石材資源の開発の様相と消費地での分布状況とを総合的に捉えるという視点をもっております。

まず、**表2**ですが、分析対象とした石器群の出土層位はLIH層の下層から上層までであり、鈴木さんは槍先形尖頭器文化前半と後半に区分していますが、その両方を幅広く含んでおります。若干説明を加えますと、表の上の方では、剥片・碎片の量も多く、集中部数も多い大規模な遺跡で、表の下の方ほど、集中部数も少なく、剥片・碎片の量も少ない小規模な遺跡と言えます。石囲い炉や礫群の数も示しておりますが、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層は特に大きな規模の遺跡で、礫群が14基あり、遺跡の規模と礫群数が相関していると言えます。その他の遺跡では特に相関している状況はみられないというのが現状です。

次に、細かな分析はにおいて大きく捉えますと、相模野台地周辺地域の槍先形尖頭器文化期の遺跡は、全体で18遺跡、350点の槍先形尖頭器を数えました。他の時期に比べ当該時期の遺跡はそれほど多くないとも言えるかも知れません。石材別にみると、**図62**に示すように、半分以上がガラス質黒色安山岩を使用しており、これは箱根の安山岩を想定しております。そのほかでは、チャートや頁岩などが30%、黒耀石が20%という割合であります。そして、原料である石器石材の消費の特徴からこの時期の遺跡をみていくと、大きく4つのあり方がみられます。一つは、風間北遺跡第Ⅰ文化層に示されますように、この遺跡は集中部が1つしかありませんが、石器群全てが信州産黒耀石で占められる遺跡で準は相模野台地のLIH層の下層から上層まであります。もう一つは、先ほど鈴木さんからお話しのあった用田南原遺跡第Ⅱ文化層で、ここでは箱根産と考えられるガラス質黒色安山岩が利用石材のほとんどを占めております。それから、寺尾遺跡第Ⅱ文化層のように、黒耀石はありますが単独出土であり、製作痕跡を示すのは凝灰岩やホルンフェルスのような近場で採取される石材によって槍先形尖頭器を製作している遺跡です。そしてもう一つが、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層のように、黒耀石、ガラス質黒色安山岩、チャート、頁岩などほとんど全ての

遺跡名	層位	集中部数	碟群数	石器群 総数	尖頭器	ナイフ形 石器	細刃器	細石核	削器類	二次加工 をもつ 剥片	彫器	その他加 工 工具	剥片 碎 片	残核
用田南原Ⅱ	L1H	6	炭化物集中5	4412	76				1		1	6	3732	
月見野上野1Ⅳ	L1H	37	14	3609	77	15			3	71	1	15	3411	16
中村Ⅲ	L1H中心	14	2	1144	42	5			8	21		1	1067	
月見野上野5Ⅲ	L1H中～B0	11		1035	28	6			1	65		4	920	11
月見野上野6Ⅰ	L1H中	14	4	1192	27	2	5			42		11	1100	5
月見野上野3Ⅱ	L1H	6	4	952	18	1				11	2	1	919	
寺尾Ⅱ	L1H～B0下	5	3	217	8	1			6	8			192	2
サザランケⅣ	L1H下	3		620	7				1	9	1		588	5
四枚畑	L1H上	3		241	7	1				1		1	227	4
風間北Ⅲ	L1H～B0下	1		527	6					3		3	514	1
月見野上野12Ⅱ	L1H上部	7	6	215	6	1			5	20		2	180	1
上原Ⅳ	L1H下部	3		648	5					1		2	636	4
吉岡B区	L1H	5		4636	6		1021	74		5		11	3519	2
月見野上野2A・B	L1H	2	1	381	4	2			2	7		2	362	2
高座渋谷Ⅲ	L1H中～下	2	3	12	2					1	1		6	2
橋本Ⅰ	B0	—		9	2								6	
大和市No.202Ⅰ	L1H上	1		4	1								2	1

※第1図には、古淵B遺跡第Ⅱ文化層の尖頭器34点（ガラス質黒色安山岩14・その他20）を加えている。

表2 遺跡の石器群組成

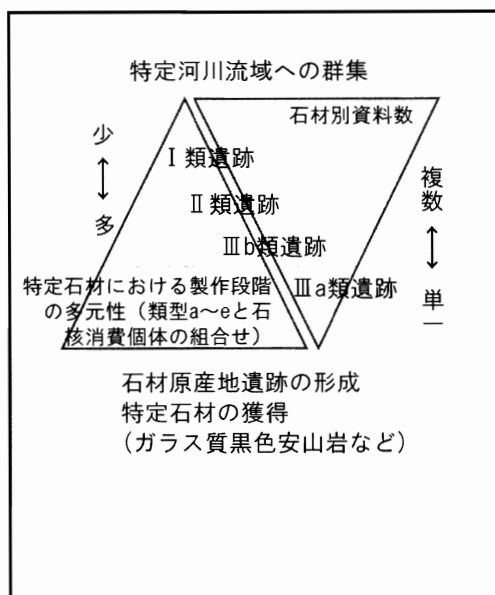


図63 相模野台地周辺地域におけるL1H層相当段階の遺跡群構成

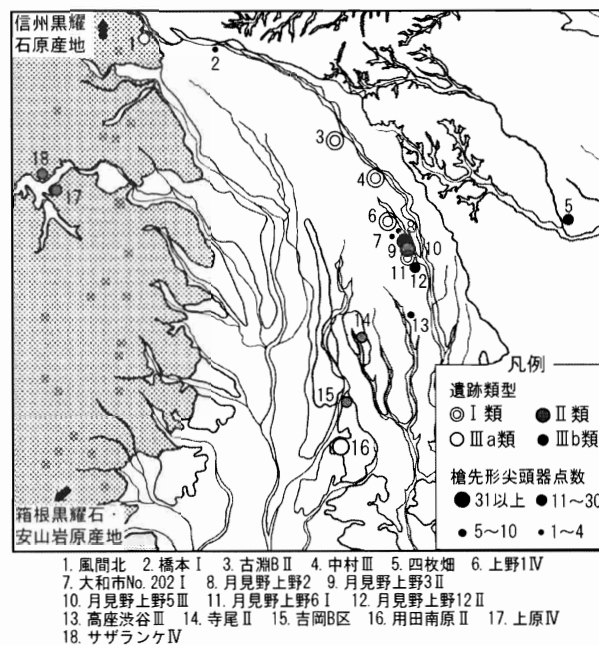


図64 遺跡群の分布

石材を網羅して槍先形尖頭器を製作している遺跡があります。これらの4つの遺跡を地図に示しているのが第3図で、拠点的な遺跡と捉えられる月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層は6番で、とりわけ目黒川には遺跡が密集していることがみてとれます。また、信州産黒耀石を使用している風間北遺跡は1番で、境川の最も上流部に位置し、箱根のガラス質黒色安山岩が石材の大半を占める用田南原遺跡第Ⅱ文化層は16番で、台地の最も南に位置しています。石材産地へのアクセスを考慮すると、遺跡の立地と利用石材構成が相関関係にあり、午前中の安藤政雄先生の川辺のムラの多様性ということが石材、原料の消費行動という観点からみてとれると思います。

結論としまして、拠点的な遺跡と捉えられる月見野上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層では黒耀石もガラス質黒色安山岩も原石段階から槍先形尖頭器を製作するという特徴があり、未使用の原石を原産地から直接持ち込んだ地点という性格をもっており、まさに原産地に石材を採りに

行ってそれを使用せずに生業活動地と考えられる目黒川周辺に持ち込んでいると考えられます。一方、風間北遺跡第Ⅰ文化層と用田南原遺跡第Ⅱ文化層では、石材が黒耀石とガラス質黒色安山岩で占められますので、それぞれの石材原産地に赴いて石器原料を確保し、目黒川流域を拠点的な遺跡のある「生業中心地」(国武2005)と想定しますと、原産地から拠点的な遺跡に向かう途中の遺跡であると捉えられると思います。先ほど鈴木さんからお話しがあったサザランケ遺跡ですが、この遺跡では鈴木さんが分析対象とされた第Ⅲ文化層の下層から第Ⅳ文化層(L1H層下部)が検出されており、黒耀石やガラス質黒色安山岩の原石段階からの槍先形尖頭器製作を示す石器群があります。私はむしろこちらの文化層出土資料が当該時期の石器群であると考えます。18番の遺跡で、この遺跡はどのような性格が考えられるかといいますと、狩猟活動に際して原料(原石の状態を含む)を持ち歩き、狩猟道具である槍先形尖頭器を補給するための地

時期 \ 特徴	利用石材	石材原産地直下型の遺跡群形成の有無	複数石材における時差消費（個別資料の階層）の展開
槍先形尖頭器石器群 (L1H層中心)	黒耀石／ガラス質黒色安山岩 ／チャート・頁岩など	○	原産地遺跡からの多元的展開 ：原石の組み込み
神子柴・長者久保石器群 (B0～L1S層中心)	ガラス質黒色安山岩 ／チャート・頁岩など	○	原産地遺跡からの多元的展開 ：主に未完成品素材の段階から
有茎尖頭器石器群 (漸移層～FB層下部)	ガラス質黒色安山岩 ／チャート・頁岩など	×	台地間スケールにおいて起点が固定的

図65 相模野台地周辺地域における移動・居住行動の時間的変遷と原料消費の特徴

点という性格を想定しております。

先ほどの鈴木次郎さんの結論ですと、槍先形尖頭器文化の前半から後半への変遷には、石器製作・供給の構造の変化を伴っているというご指摘だったと思いますが、大きく捉えれば、私も同じように考えており、後続する神子柴・長者久保石器群の様相を合わせて考えますと、原石を相模野台地に搬入して製作するという状況がみられなくなり、むしろそれぞれの原産地で尖頭器製作をか

なり進んだところまで行い、それを相模野台地に持ち込んでいる状況が認められますので、まさに鈴木次郎さんが指摘した大きな傾向が見取れるかと思います（図63・65）。ただし、石器製作や遺跡群形成のより大きな画期は有茎尖頭器石器群の時期において認められると考えております（及川2004・2008）。以上です。

司会 及川さん、どうもありがとうございました。

引用文献

- 及川 穰 2004「神子柴・長者久保石器群をめぐる行為論－石器製作工程の類型化と遺跡の連関に関する考察－」『駿台史学』122 駿台史学会 p37-82
- 及川 穰 2006「槍先形尖頭器の製作と遺跡群構成－相模野台地周辺地域におけるL1H層出土の石器群－」『考古論叢神奈河』14 神奈川県考古学会 p31-52
- 及川 穰 2008「有茎尖頭器石器群をめぐる行動論的研究－複数階層分析枠を利用した領域研究－」『旧石器考古学（特集 有茎尖頭器）』70 旧石器文化談話会 p1-10
- 国武貞克 2005「複数の時間的スケールを考慮した領域研究の試み」『石器文化研究』12 石器文化研究会 p215-

細石刃文化期のムラ

－細石器石器群の諸活動－

発表 砂田 佳弘
コメント 佐藤 明生

司会 それでは、「細石刃文化期のムラ－細石器石器群の諸活動－」として、かながわ考古学財団の砂田さんに発表していただきます。

砂田 こんにちは、砂田です。よろしくお願いします。

考古学財団の職員は私で4人目で、後ほど5人目栗原さんが発表されます。私は、1982年に県に入りまして、神奈川県立埋蔵文化財センターに所属しました。その後、県の方針により県立埋蔵文化財センターでは発掘調査をしなくなり、1994年に財団が設立されてそこに派遣されました。先ほど発表された鈴木さんは私の上司で、鈴木さんとは宮ヶ瀬遺跡群と一緒に調査を行い、また、今回の総括をされる白石さんとは吉岡遺跡群と一緒に調査を行いました。

前置きはこれくらいにして、今日、私が発表する「細石刃文化期のムラ」といいますのは、鈴木さんから与えられたテーマで、レジュメの55頁からになります。ということで、県内から出土している細石器石器群とそれ以前の槍の石器群についてまとめてみましたので、これから発表したいと思います。本日の冒頭、安森先生からお話がありましたが、岩宿発掘60周年ということで還暦を迎えたわけですが、細石器についていいますと、今年は80年、日本列島で細石器に目が向けられてから80年がたちます。もちろん、実際に発掘調査が行われたのは、岩宿発掘の1949年以降ということになります。

私は、これまで石器群の中でも技術論、石器製作に関わることを中心に勉強して参りましたが、今回、はじめて分布論についてお話することになりました。分布についてはどのような機能があるのか、何らかの証明とはいかないまでも、その手がかり・足がかりになればと考えております。

細石器石器群を出土した遺跡は、神奈川県では相模野台地が中心となり、後ほど佐藤さんがコメントで発表される打木原遺跡は三浦半島にあります。相模野台地から多くの遺跡が発見されています。また、最近では、新東名高速関係で伊勢原市域でも調査が多く行われ、小田

原周辺の足柄平野でも遺跡が見つかっております。今後、調査が行われればまだまだ多数の遺跡が発見されると思います。

写真47は、吉岡遺跡群の層序と石器ということで、吉岡遺跡群の各層位からどんな石器が出土したのかを示しています。3万年以上前の地層から石器が出土していますが、今回、私がお話するのは、細石刃という細石刃石核から剥がされた非常に小さな石器で、大きさは、(古いところから新しくなるにつれて段々大きくなりますが)、1cm弱から2cmくらいの長さで、単独では使用されず組み合わせられて使用されたということが定説になっております。最近では、石器の使用痕分析も行われ、後ほど図が出てきますが、骨角器といいますかシャフトにどのように細石刃を装着したのかという研究も行われております。相模野台地の層序では、こうした細石刃石器群は、L1H層の上部に突然出現します。それまではナイフ形石器や槍先形尖頭器が出土していたのに細石刃



写真47 吉岡遺跡群の層序と出土石器 (砂田2003)

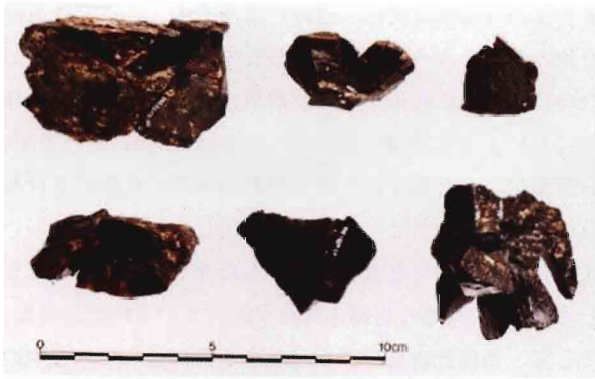


写真48 細石刃石核の接合資料（吉岡B区 LIH 上部）

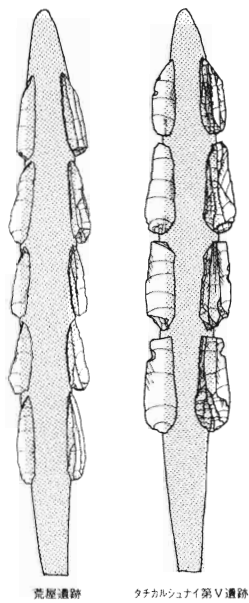


図66 細石刃の装着想定図（鹿又2005）

が出土し、その後細石刃石器群が広がるようになり、最終的には、縄文時代草創期の土器に共伴して出土します。それは両面調整の大きな槍のかたちをした石核から細石刃を剥がします。こうした細石刃石器群の流れが認められます。

写真48は、吉岡遺跡群B区L1H層上部から出土した細石刃石核の接合資料です。吉岡遺跡群では、非常に沢山の細石刃の資料が出土しています。しかも石材の100%近くが伊豆の柏峠産黒曜石を利用しており、黒曜石の原石を分割して細石刃石核を作っています。分割された一つの細石刃石核から、非常に単純ですが、側面調整を行いながら一端から細石刃を剥ぎ取るという工程がみられます。このL1H層上部の資料は、相模野を含め日本列島内で一番古い細石刃石器群になります。

図66は、先ほど説明した細石刃の装着ですが、近年、鹿又さんが使用痕分析を含め細石刃の装着について盛んに研究されています。新潟県荒屋遺跡や北海道タチカルシュナイ遺跡の分析を行い、この図の下が打面になりま

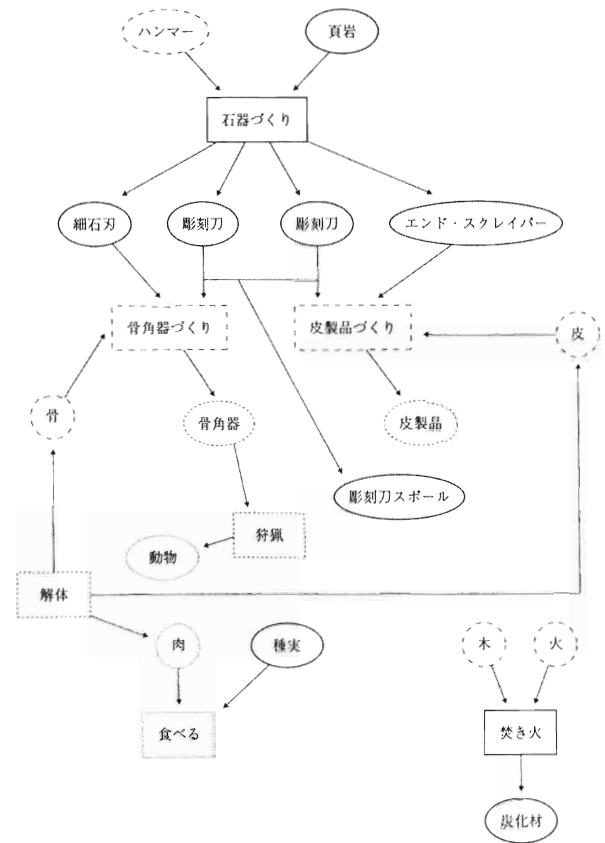


図67 細石刃文化期の諸活動（鹿又2004）

すので、正面の右側縁に二次加工を施した側を着柄器に装着するという想定をされています。図67ですが、これに絡めて今日のテーマでもある諸活動、当時の人々がどのような活動を行っていたのかといえますと、細石器の時代はあまり石製のハンマー（叩石）は出土しません。それ以前の石器群には、石製ハンマーが多数出土しますが、何故細石器の時代には石製ハンマーが出土しないのかといえますと、ひょっとすると、ハンマー自体が石製ではないということが想定されます。石以外のハンマーを使用した石器作りが行われていた可能性があり、それで作られたのが細石刃であったということも考えられます。それから骨角器作りには彫器が使用されていたと考えられますし、その骨角器を作ったり、搔器・削器などを使用して皮製品を作ったりしたことも想定されます。こうしたいろいろな道具がありますが、今回はこれらを一括りにして小さな加工具と捉えたいと考えています。小さな加工具とは、小手先で皮をなめす搔器とか、骨角器を加工する等の彫器や錐器などです。ほかには礫器という大きな石器、川原石の一端を打ち欠いただけの石器（相模野の細石刃石器群には、しばしば多数の礫器を伴います。）も使用するといった活動があったのかなと思います。また、火に関係した活動、例えば礫群の活動、



図68 細石刃製作作業の想定図

あるいは礫群とはいわないまでも大きな石を置いた配石や配礫を使用した活動も行われていたと考えられます。

図68は、吉岡遺跡群の報告書に掲載した細石刃製作を行っている想定図ですが、吉岡遺跡群では、石器群が出土した土層を採集してフローテーション（水洗選別）したところ、沢山の種実やそれに関連した小さな遺物が検出されました。分析した結果、常緑針葉樹ではヒノキ、サワラ、落葉広葉樹ではエノキ、クマノミズキ（実は食用になったと考えられますが）や貝の破片もみられ、私たちが知らないいろいろな活動が行われていたと考えられます。

今までの発表では、相模野台地の遺跡分布状態が語られてきましたが、図69も遺跡立地の類型ということで、相模野台地の中央に近い遺跡群の航空写真です。たまた

まDという場所は代官山遺跡になります。ここでは遺跡立地の類型をA～Gに分けております。A類型としたのは、南側に河川が流れ、河川に向かって湧水が流れることによって南側に張り出した地形を示しています。B類型は、Aと似ているのですが、河川の流路によりあるいは湧水を合わせて南側に張り出し地形を形成しています。次は、逆に北側に張り出した地形をC類型としました。さらに台地の北側を流路が流れているのがE類型、そして、相模野台地では川は北から南に流れていますので川の東西に立地する遺跡が多くあり、これらをF類型・G類型としました。以上、AからGまでの7つの類型に分けて、相模野台地の層序に合わせて細石器が出現する少し前の段階から細石器の終末まで、層位別に遺跡の立地をみてみます（表3）。L1H層下部～中位は細石器

層序	A	B	C	D	E	F	G	ABC	DE	FG	計
1 L1HF -L1H中	3	2	2	0	0	7	3	7	0	10	17
2 L1HL -E60中	8	6	4	3	7	5	3	18	10	8	36
3 E60上 -L1S中	2	10	4	6	6	6	7	16	12	13	41
4 L1S上 -FBL	1	8	1	2	7	6	3	10	9	9	28

表3 遺跡立地と遺跡層位数

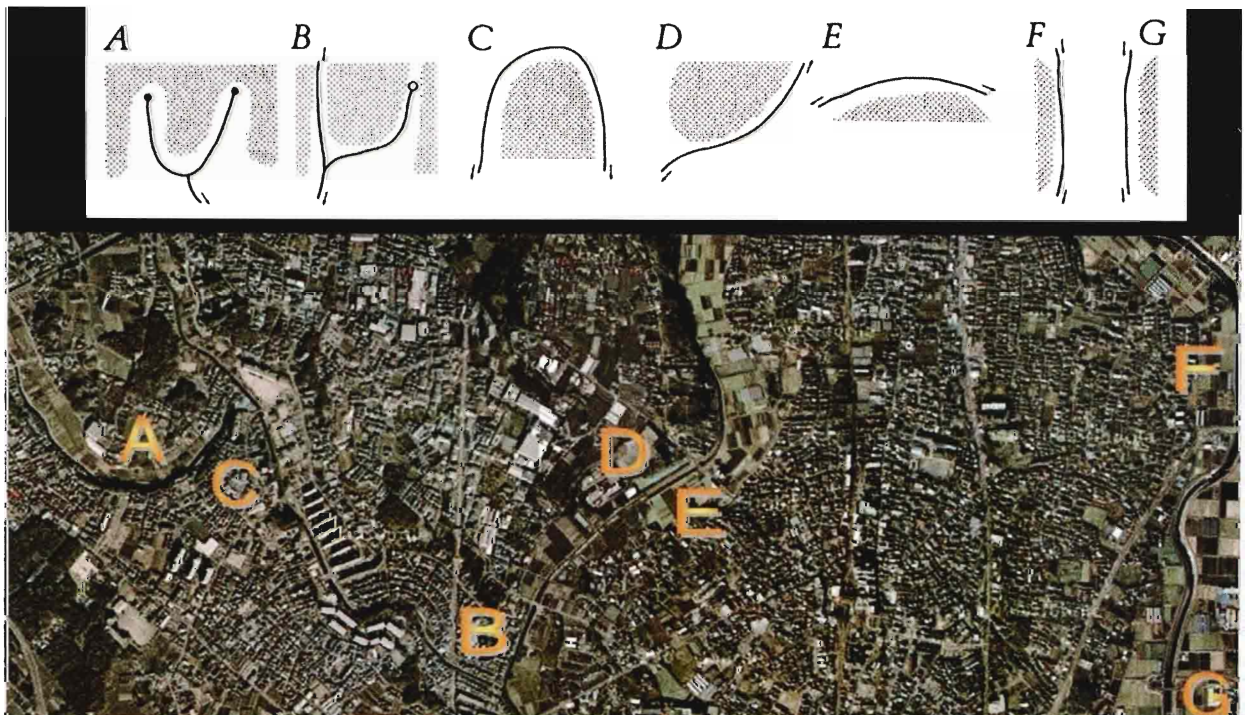


図69 遺跡立地の類型（上）と相模野台地中央部の航空写真（下）

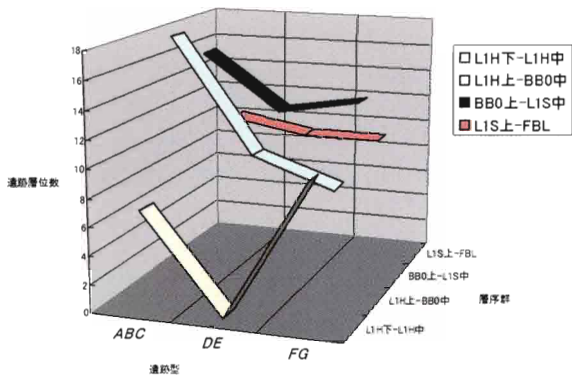


図70 相模野細石器器群の層位別遺跡立地の類型

が出現する直前の段階、L1H層上部～B0層中位は細石器が出現してある程度安定してみられる段階、B0層上部～L1S層中位は細石器が発展・展開した段階、最終的にL1S層上部～FB層下部（黒土層下部）は土器や有舌尖頭器が出る時期になります。類型A、B、Cは、おそらく活動するには非常に環境がよい立地と想定されます。D、Eは、A、B、Cに準じるのですが大きな活動はしていないと思われます。それにたいしてF、Gは、活動場所としては広くないちょっとした活動があった場所と考えられます。それで各時期の類型毎の遺跡数をみ

層序 (遺跡数)	細石器	槍先形尖頭器 (有舌尖頭器)	小加工	礫器	打製石斧	製作	台石 磨石	礫群	大形礫 配礫	炉跡	土坑	集中範囲	集中地点	石材
1 L1H下 -L1H中 (15)	-	164	218	-	-	768	1	10	2	-	-	4m>	5>	安黒チ> 粘凝砂
2 L1H上 -BB0中 (39)	4045	123	477	59	-	6374	19	14	8	3	-	9m>	6>	黒安> 凝砂
3 BB0上 -L1S中 (44)	1365	71 (2)	365	120	2	2168	16	16	8	-	2	5m>	10>	黒安凝> チホ砂粘
4 L1S上 -FBL (29)	65	809 (393)	704	63	54	54921	27	12	-	-	1	10m>	20>	安凝砂> ホ粘チ黒頁

表4 細石器器群の器種構成、施設、石材

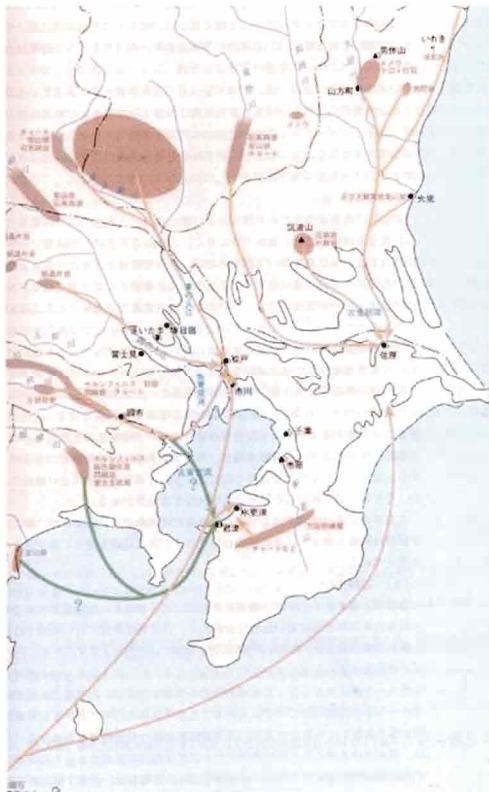


図71 石材（転礫）の原産地（柴田2004）

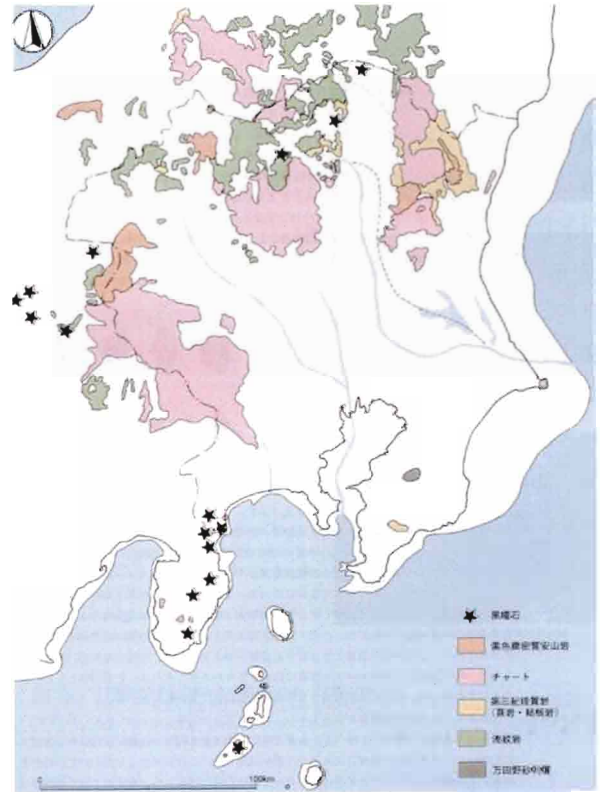


図72 石材（岩脈）の原産地（田村2004）

ますと、檜の時期にはまだ類型D、Eはみられません。それが細石器出現の段階になると突如D、Eが出てくる。そして、拠点的なA、B、Cの遺跡立地は、細石器出現の段階に非常に多くなり、その後、各立地の遺跡が均一になってくるようです。遺跡立地を7類型に分けましたが、特定の立地、規模にこだわらず、各種活動が行われたのでしょう。

図70は、いま説明した細石器以前から細石器の各段階の遺跡立地の推移を視覚的に表現しています。

表4は、レジユメに一覧表として提示しました細石器石器群の属性を、段階毎に集計しています。まず細石器ですが、これは細石刃と細石刃石核を合わせた数で、出現期には4,045点あります。槍先形尖頭器は有舌尖頭器を含んでいます。小加工としたのは、先ほど説明した搔器・削器・彫器・錐器・楔形石器といった石器です。礫器は、細石器の出現と同じく出土し、相当数みられます。石斧と同じく伐採といった作業に使用したと考えられます。製作は、いわゆる碎片です。基本的には石器製作作業が行われた場所に残される石器です。細石器の製作では、非常に多量の石くず（碎片）が生じます。台石・磨石は石器製作に使用された石器で、叩石も含まれます。この時期の礫群・大形礫・配礫については、基本的に非常に散漫な礫群が伴います。炉跡については、火を使った跡や焼土の検出がかなり難しく、土坑の検出も同様です。次に、集中地点の範囲ですが、9mをこえない、5mをこえない、10mをこえない、という規模の変遷がみられるようです。その数は時期的に新しくなると増加しています。石材については、最終的にはいろいろな石材を使用していますが、細石器が出現した当初は、多量の黒曜石を使用しています。黒曜石の産地をみると、当初は柏峠産、次に信州産になり、同時に箱根畑宿産も少し認められ、その次には神津島産と移り変わります。このように、石材はめまぐるしく交替したことが分かります。

図71の転礫の原産地というのは、神奈川の遺跡出土の石器石材については柴田徹先生にみてもらっていますが、基本的に河川等の転礫を中心とした原産地の見方であり、図72は、田村さんや国武さんによる岩脈を中心とした原産地の見方もあります。両方の考え方を合わせてみることによって石材原産地がよく分かると思います。

図73～75は、L1H層上部の細石器石器群の遺物分布状態です。3遺跡ありますが、基本的によく似ています。打木原遺跡については、後ほど佐藤さんが述べられると思いますが、各図のスケールは5mですので、各集

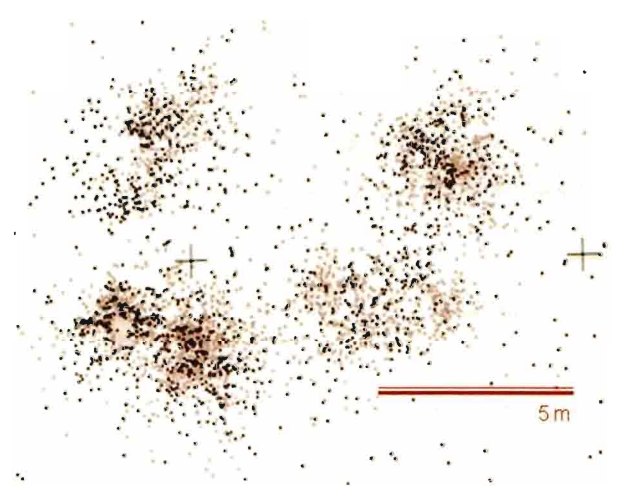


図73 吉岡遺跡群B区L1H層上部の遺物分布

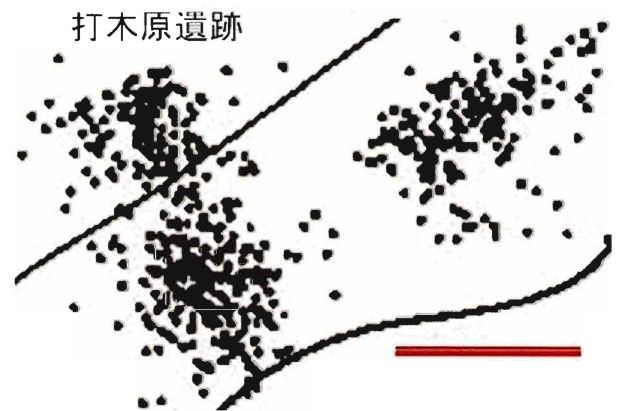


図74 打木原遺跡 L1H層上部の遺物分布

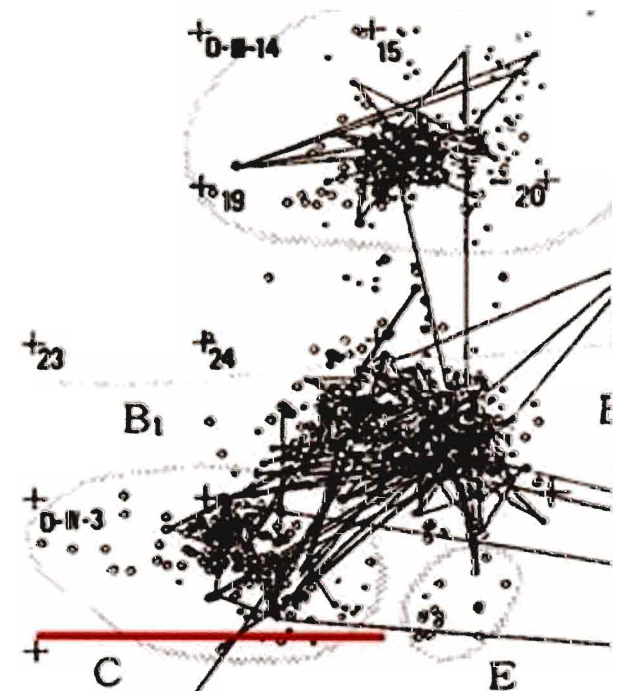


図75 代官山遺跡 L1H層上部の遺物分布



図76 田名塩田遺跡群B区B0層下部の遺物分布

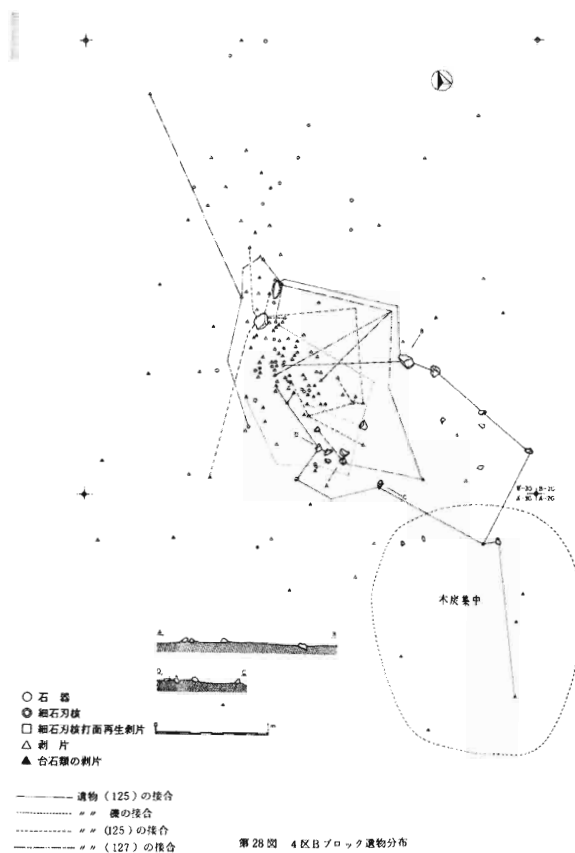


図78 上和田城山遺跡B0層下位の遺物分布

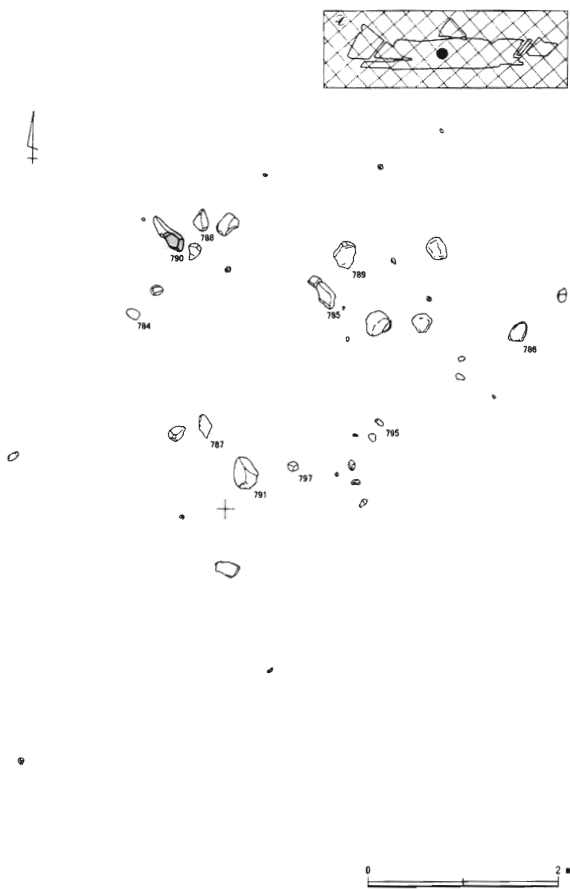


図77 三ノ宮下谷遺跡B0層中部の遺物分布

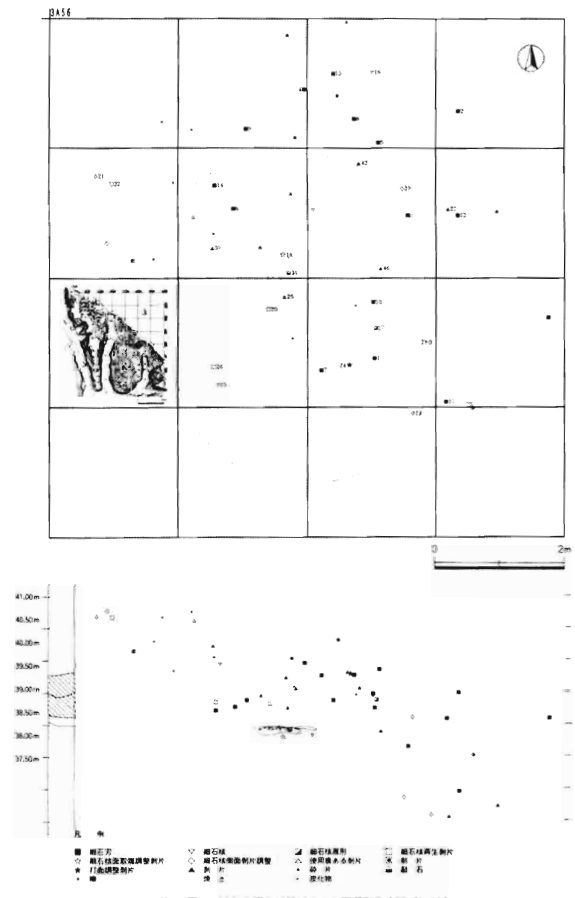


図79 吉岡遺跡群D区B0層の遺物分布

中地点は3 mあるいは4 mの分布範囲をもちます。吉岡遺跡群B区の場合は、集中地点が4箇所ありますが、集中地点によっては2つの集中が重なった状態の可能性も

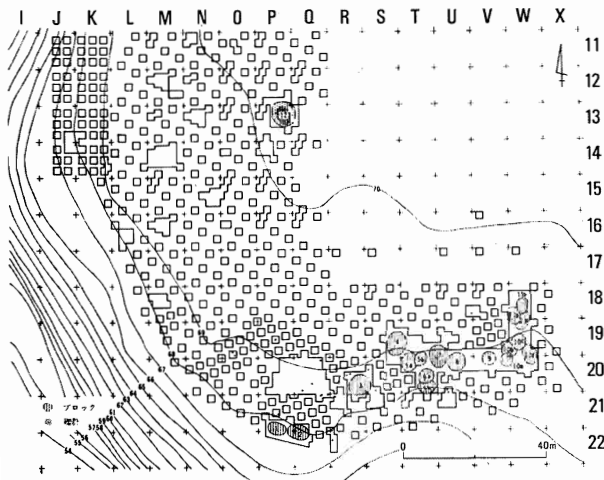


図80 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層全体図 (L1S層下部)

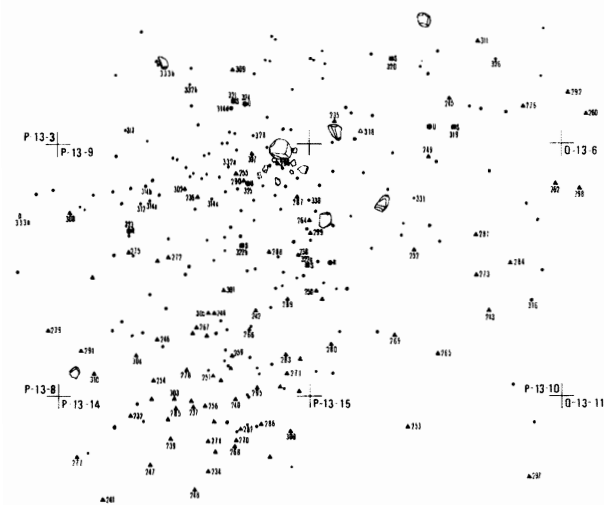


図81 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第12集中地点

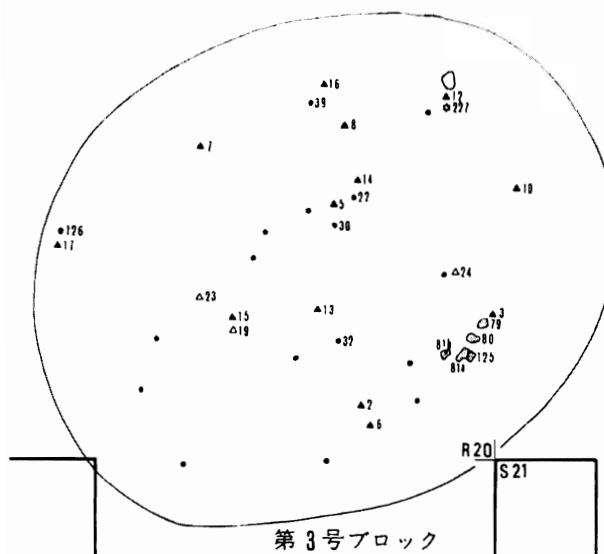


図82 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第3集中地点

あります。これらの集中地点は若干の時間差はあると思いますが、分布上の切り合い（重複関係）を考える必要があります。また、吉岡遺跡群B区の場合、多量の炭化物も検出されています。代官山遺跡の場合は、3 m、2 m前後の集中地点が4ないし5地点分布しています。打木原の場合も、5 mあるいは6 m前後の集中地点が3箇所分布しています。各遺跡とも集中地点の分布は環状ではなく、一方が開くような分布状況を示します。

次のB0層下部の層位になりますと、図76の相模原市田名塩田B区では、20~30cmの大きな礫が散漫に配置

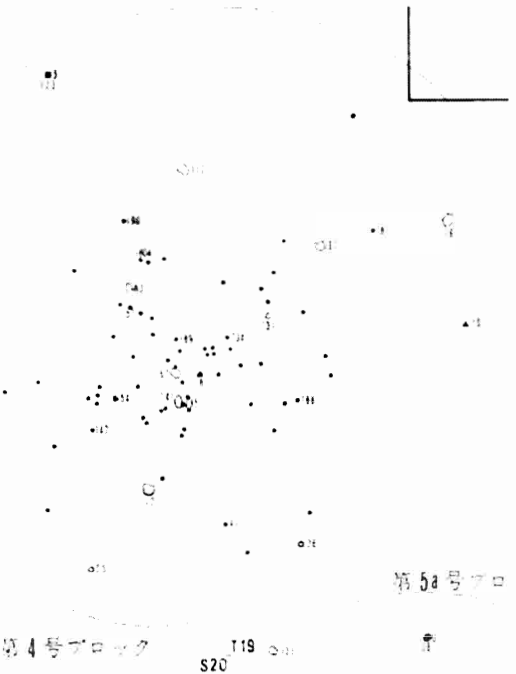


図83 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第4集中地点

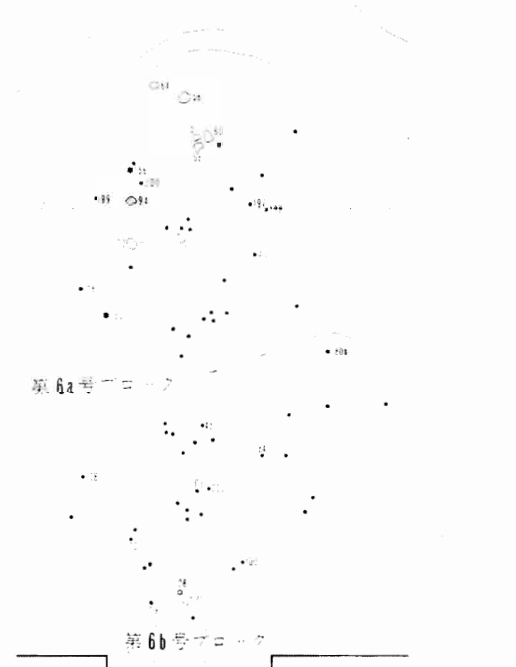


図84 栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第6集中地点



図85 南原遺跡L1 S上部遺物分布図

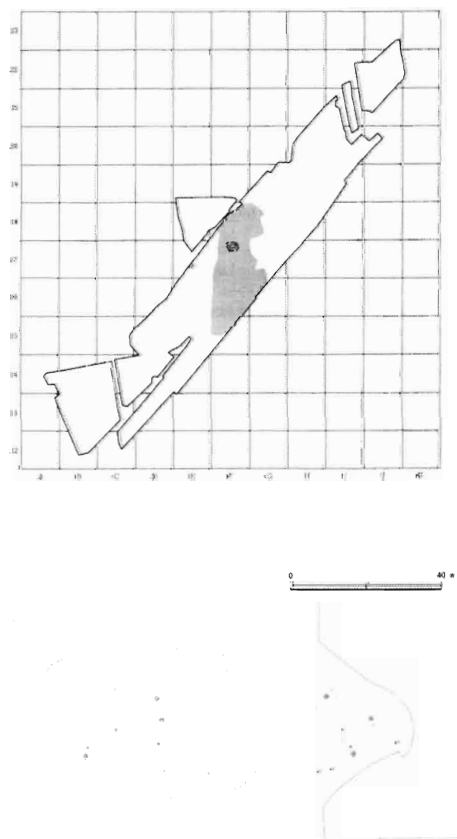


図86 三ノ宮下谷戸遺跡F B層下部遺物分布及び遺構図

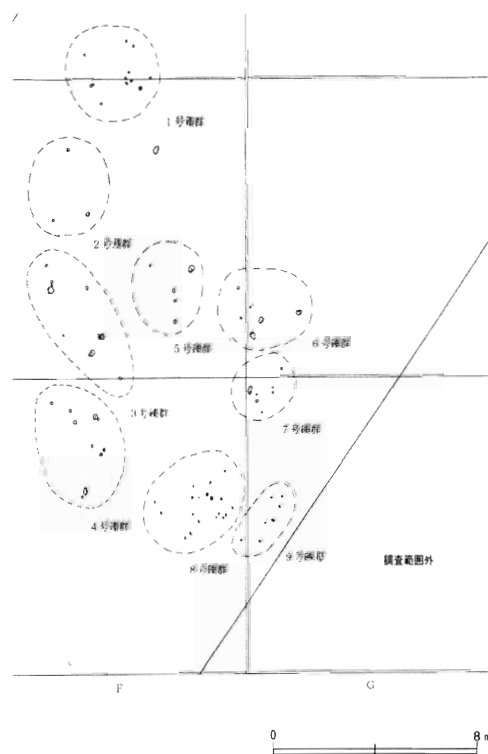
され、その中には遺物は少ないですが、北西方向に4m以上の分布を示しています。礫器状の石核あるいは細石刃石核、細石刃が分布しています。また、楔形石器が十数点まとまって出土しています。使用痕ある剥片や加工痕ある剥片のような決定器種ではない石器も多く分布しています。

図77は、伊勢原市三ノ宮下谷戸遺跡第3文化層ですが、大きな礫が礫群とはいえない配石あるいは配礫と呼ばれるように散漫に出土しています。

図78は、大和市上和田城山遺跡第2文化層です。大きな石は配礫または配石で、炭化物の分布もみられ、細石刃石核等も出土しています。

図79は、白石さんが調査された吉岡遺跡群D区のB0層で、細石刃に付随して炭化物が出土しています。

図80~84は、座間市栗原中丸遺跡第II文化層で、L1 S層下部になりますが、80m四方の広範囲から12箇所の集中地点が分布しており、礫器が多く44点出土しています。第3集中地点では礫器と細石刃が出土しており、第6集中地点では細石刃は出土していませんが礫器とその他の剥片が出土しています。また、第12集中地点では細石刃とその他の剥片が出土しています。これらの集中



△○◎: 伴出、▲●: 伴出しないが出土、単: 出土のみ、-: 出土なし

層序	細石器	槍先形尖頭器	小加工	礫器	打製石斧	製作	台石磨石	礫群	大形礫配礫	炉跡	土坑	集中範囲	集地点	石材
1 L1H下 -L1H中	-	●	▲	-	-	●	▲	▲	▲	-	-	4m>	5>	安黒チ> 粘凝砂
2 L1H上 -BB0中	○ ▲	○ ●	○	△ ▲	-	◎	○	△	△	▲	-	9m>	6>	黒安> 凝砂
3 BB0上 -L1S中	○	△	○	○ ● 単	○	○	○	△	△	-	▲	5m>	10>	黒安凝> チホ砂粘
4 L1S上 -FBL	△	● △ 単	◎	● △	● △	◎	◎	△	-	-	▲	10m>	20>	安凝砂> ホ粘チ黒頁

表5 細石器石器群の器種と施設の変遷

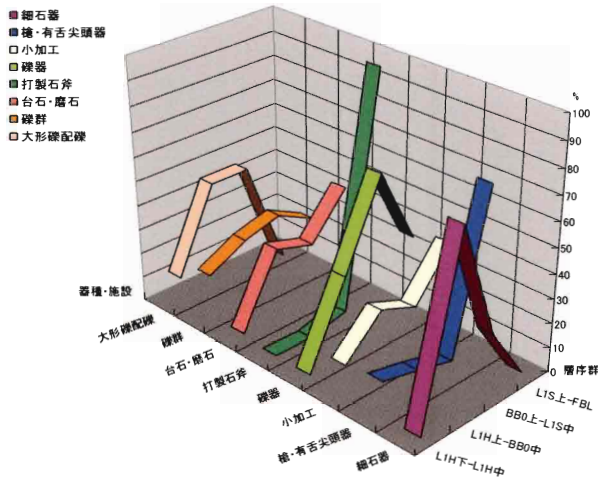


図87 細石器層序群別器種と施設の変遷

地点は径4m前後となります。

図85は、横浜市南原遺跡L1S上部で、礫器だけが集中しています。その周辺からは削器、加工痕ある剥片などが出土しています。

図86は、三ノ宮下谷戸遺跡FB層下部ですが、この時期になると槍先形尖頭器や有舌尖頭器が多く出土しており、20m四方の広範囲から5万点以上の石器が出土し、槍先形尖頭器や有舌尖頭器を製作しています。

以上、各遺跡でみてきた遺跡立地のあり方と器種組成、出土層位を重ね合わせると、表5に示すような器種と施設の変遷となります。当然、当初は細石器がありま



写真49 砂田佳弘氏

せんので、槍先形尖頭器があり、小加工とした石器も少ないという特徴がみられます。細石器の出現以降は、この図に示すような状況になります。●や▲は、細石器と伴出しないで出土した石器で、◎○△は細石器に伴出して出土した石器です。例えば礫器をみますと、礫器の出現の仕方と細石器の関わり方にいろいろなパターンがあります。現状では、まだまだ細石器主体で機能を区分する説明はできませんが、およそこの図のような流れが想定されます。

図87は、これらを視覚的に表現し、細石器と礫群あるいは配石との関わりの変遷を示しています。

以上で、私の発表を終わります。

司会 砂田さん、どうもありがとうございました。それ



写真50 長井台地と打木原遺跡

では、コメントを横須賀市教育委員会の佐藤明生さんをお願いします。

佐藤 こんにちは、横須賀市教育委員会の佐藤と申します。よろしくお願いします。

それでは、あらかじめコメンテーターとして指名されていたので、三浦半島の細石刃ということでコメントしたいと思います。

本題に入る前に、三浦半島のことを知っていただくため三浦半島の図(図88)を用意しました。三浦半島は、ご承知のように相模湾と東京湾に囲まれた半島です。最

寒冷期におきましては、東京湾は海退により古東京川という川になっておりましたので、いろいろな点で房総半島の方を視野に入れていかなければならないと思います。

旧石器時代の遺跡は、今のところ相模湾側で多く発見されています。といいますのは、三浦半島は急峻な丘陵地形をなしているため、江戸時代頃までは峠道を通らないと半島の先端まで行けないという状況でした。このため急峻な丘陵地形が大半を占める半島の真ん中には、旧石器時代遺跡だけではなく、縄文時代以降の遺跡も少なく、現在のところ佐島丘陵、打木原遺跡のある長井台地、三浦市にかけての三崎海蝕台地に、旧石器時代の遺跡が多く発見されています。

写真50は、打木原遺跡がある長井台地です。周囲を海と谷戸で囲まれた独立した丘陵となっております。標高が一番高いところで31m前後、そこから末広りの台地となっております。写真中央に建物などが見えますが、これは「ソレイユの丘」という公園になっており、ここはもともと旧日本軍の飛行場だったのですが、戦後は米軍の住宅となっていました。1986年から跡地の返還に伴って確認調査をしたところ、A T下位の落とし穴状土坑や今回お話する細石刃文化、それからナイフ形石器文化が発見され、三浦半島もいよいよ旧石器時代の本格的な調査・研究が始まった一つの画期と考えております。



図88 三浦半島全図

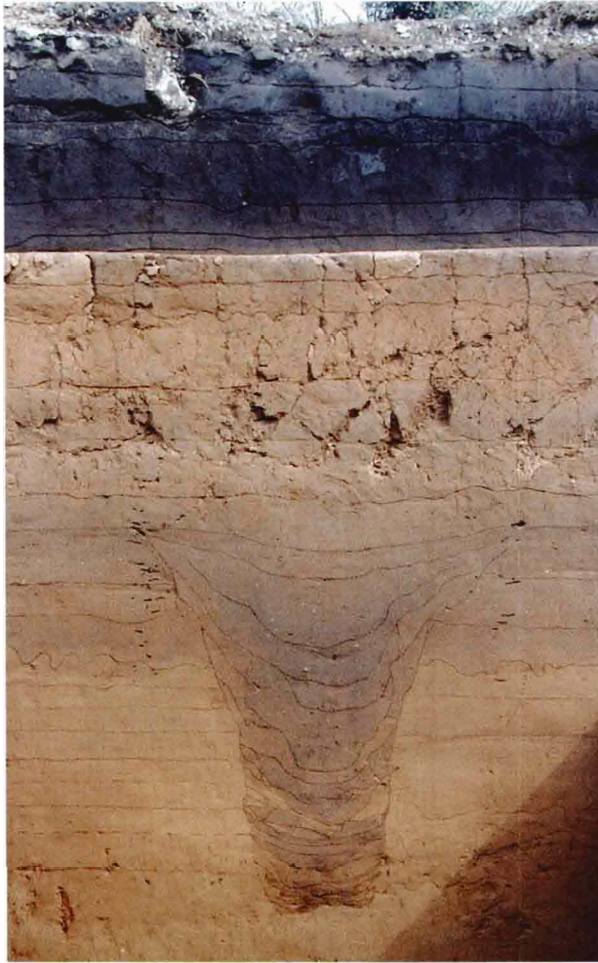


写真51 打木原遺跡のローム層序と落とし穴状土坑

今回お話しする細石刃文化は、1986年の確認調査と「ソレイユの丘」という公園の調整池の建設に伴って発掘調査を行い、●印の場所から細石刃のブロックが検出されました。ちなみにAT下位の落とし穴はその北側に並んで発見されました。

写真51は、ローム層の層序ですが、上に黒土があり、立川ローム層はトップから下底まで2m50cmほどの堆積が認められます。そして上面から1mくらいの深さに始良丹沢火山灰(AT)が認められます。中央に落とし穴状土坑の断面がありますが、ATの下から掘り込まれ、深さが1m70cmほどあります。このような落とし穴は、打木原遺跡では9基発見されています。落とし穴は、ローム層の上面からただか1m20~30cm掘れば確認できるという状況ではありますが、相模野台地では、1、2m掘ってもその層位には届きません。三浦半島でこのような落とし穴が発見されたのは、ローム層の層序のあり方にも関係していると思います。ただし、このような下層の文化層の調査には都合がよいのですが、ATの上の石器が多く出土する層序は圧縮されており、ローム層の層序の

把握は非常に難しいという面があります。このため、長井台地だけでは困難なので、現状では相模野台地の考古学層序に対比しながら作業を進めている状況です。今回お話しする細石刃のブロックは、L1Sの下、L1Hの層位から発見されました。1994年に県立埋蔵文化財センターから刊行された「神奈川の考古学の諸問題」という研究紀要の中で、鈴木次郎さんは、この遺跡の層序を評価して、出土層位による時期区分の検討はほとんど期待できないと発言され、これからやっと旧石器時代の研究が始まるという矢先に、この発言は非常にショックでいまだに尾を引いております(笑)。

それでは、早速細石刃のブロックを紹介したいと思います。写真52ですが、先ほど砂田さんが述べられたように、3つのブロックが検出されています。遺跡の調査では、SX02、03、04とした3つのブロックです。1986年からの確認調査で一部先行して調査したため、この写真では分布が希薄になっている箇所がありますが、ほぼ3つのブロックとして捉えられます。

時期的には、先ほどのお話にありましたように、L1H層の上部で細石刃文化としては古い時期に相当します。吉岡遺跡群B区とはほぼ同じで、石材も同じでそっくりといっても過言ではないと思います。ただこの時期の石器群は、細石刃は非常にやっかいでありまして、突然出現して、その前段階は不明ですが、関東地方では槍先形尖頭器文化があり、その中から細石刃が出てきます。代官山遺跡を含め、細石刃を考える場合は、その前が問題でして、どこかに手掛かりがないかと考えております。

次に、どんな石器が出土しているのか説明したいと思います。

写真53は、出土石器ですが、上段の石器と2段目の左側2点は、細石刃石核の正面と側面の写真で、伊豆柏峠の黒曜石を使用しています。多少灰色を呈した濁った黒曜石です。これが主体となり、主体となる細石刃石核・



写真52 打木原遺跡の遺物分布

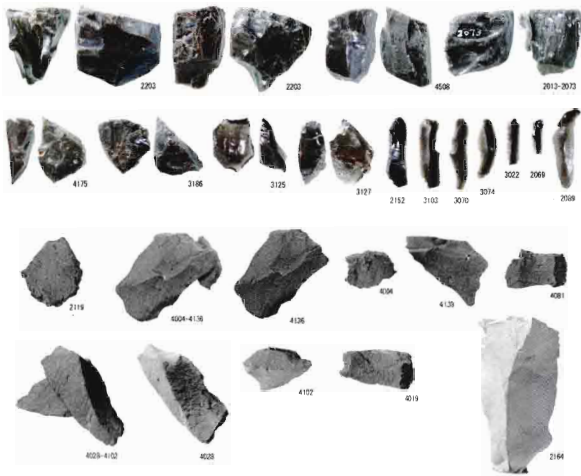


写真53 打木原遺跡出土石器



写真54 佐藤明生氏

細石刃をみると、吉岡遺跡群B区や代官山遺跡とそっくりなのですが、中には2つほど（2段目中央の2点）透明度の高い黒曜石があり、これは信州冷山の黒曜石で、非常に使い込んで小さくなっております。細石刃の中で

右側の一番大きなものは、冷山の黒曜石で長さが2.2cmあります。ただし一番小さな細石刃石核は冷山の黒曜石で、非常に使い込んでいますが、質がよいためと考えられます。打木原遺跡では、主体となる柏峠の黒曜石のほかに、信州の黒曜石が入っているのが特徴です。このため主体となる石器・石材だけでなく、客体となる石器・石材もみていかなければ石器群の特徴を捉えることはできません。また、槍先形尖頭器は製品がなく剥片・碎片のみです。槍先形尖頭器を製作した石材は、ガラス質黒色安山岩で、非常に薄い剥片です。おそらく槍先形尖頭器の調整剥片と考えられます。

今も述べましたように、3つの石器ブロックは、特に多い石材だけを考えますと、すべて同じようにみえがちですが、S X04にはガラス質安山岩の剥片が多く、信州の黒曜石はS X02、03に多くみられます（冷山産黒曜石の細石刃石核はS X03から出土）。ブロック自体を考えますと、非常に近接しているということで、たとえば縄文時代の竪穴住居にたとえると、同時存在は考えられません。小さいながらも同時存在ではなく、いくつかの時期に分けられると思います。S X02、03は、同時存在の可能性はありますが、S X04は明らかに異なると思われる、一時期には、1ブロックあるいは2ブロックの石器ブロックが営まれていたと考えられます。

これでコメントを終わります。

司会 佐藤さん、どうもありがとうございます。以上で、『各論1 旧石器時代のムラを探る』を終わりたいと思います。

田名向原遺跡の住居状遺構とその性格

発表 戸田 哲也・麻生 順司
コメント 島田 和高

司会 これより、各論2『旧石器時代の住まいを探る』ということで、2件の発表をしていただきます。まず、「田名向原遺跡の住居状遺構とその性格」と題しまして、玉川文化財研究所の麻生順司さんにご発表をお願いします。

麻生 玉川文化財研究所の麻生です。よろしく申し上げます。

この田名向原遺跡ですが、朝一番の安藤先生の講演で名前が挙がっておりますので、皆さん気にされていると思いますが、まず、田名向原遺跡の調査の経緯と概要をお話ししてから、住居状遺構の特徴とその性格についてお話しさせていただきたいと思っております。

田名向原遺跡は、相模原市の南西端に位置しており、相模川の中流域左岸に立地します。この遺跡の調査は、平成元年から土地区画整理事業に伴う発掘調査として行われ、一連の発掘調査の中で平成9年3月に住居状遺構が発見されました。この住居状遺構は、表土の下約2.5mのローム層中から、2箇所の炉址と考えられる焼土跡と、12箇所の柱穴と考えられる土壌変色部が発見されました。さらに、この遺構が住居としての範囲を示すかたちで拳大の礫が10m×10mの環状に配置されて出土しました。このように、本遺構では、住居あるいはそれに類する遺構を想定する上で重要な3つの構成要素が一箇所からまとまって発見されましたが、こうした遺構は国内



写真55 住居状遺構の調査風景

初の発見であります。このような遺構の発見は、当時、マスコミでも新聞やテレビで大きく取り上げられ、その後に行われた遺跡見学会では3,000人を超える市民が見学に來られました。当時としては大きな話題となりましたので、皆さんの中には覚えている方もいることと思っております。

この遺跡が立地する相模原市では、遺跡の重要性を考えて住居状遺構の保存と史跡指定の申請を行い、田名向原遺跡は平成11年1月28日に国の史跡に指定されたという経緯をたどっています。今回の講座は、『かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』というテーマですので、田名向原遺跡の住居状遺構は重要な事例として発表を行いたいと思っております。

それでは、スライドを使用して説明してまいりたいと思っております。

写真55は、田名向原遺跡の史跡指定の際に作成したパンフレットに使用した写真です。

図89は、遺跡の位置図で、●印が田名向原遺跡です。遺跡の下を流れる大きな川が相模川で、遺跡の北を流れる小川が八瀬川になります。そして遺跡の東側には国道129号線が南北に通っています。

図90は、遺跡付近を拡大した図です。相模川に面した網掛けの範囲が史跡指定範囲で、史跡公園となっており、住居状遺構は大きな○印の場所で発見されました。現在は、公園整備が終わり、道路の反対側には相模原市



写真56 麻生順司氏

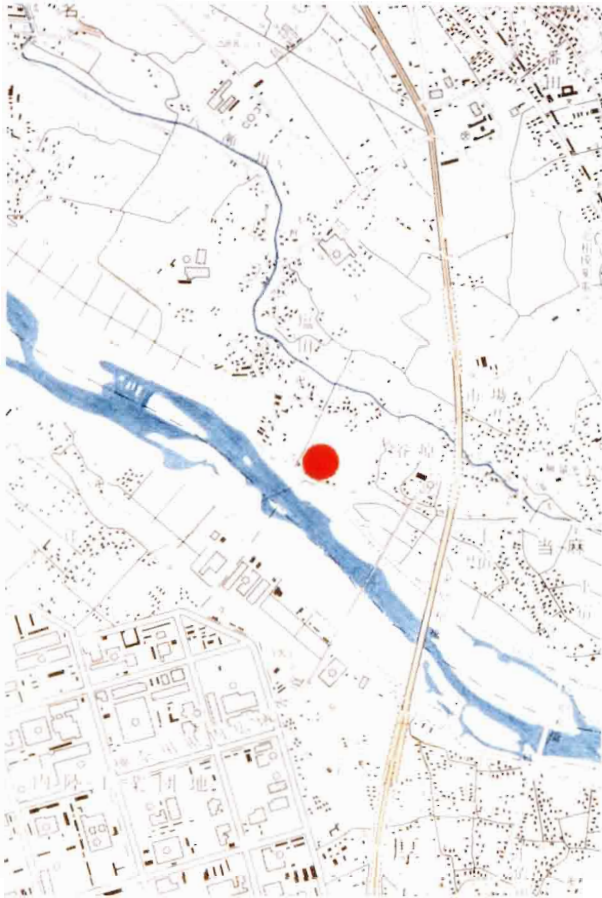


図89 田名向原遺跡の位置図(1)

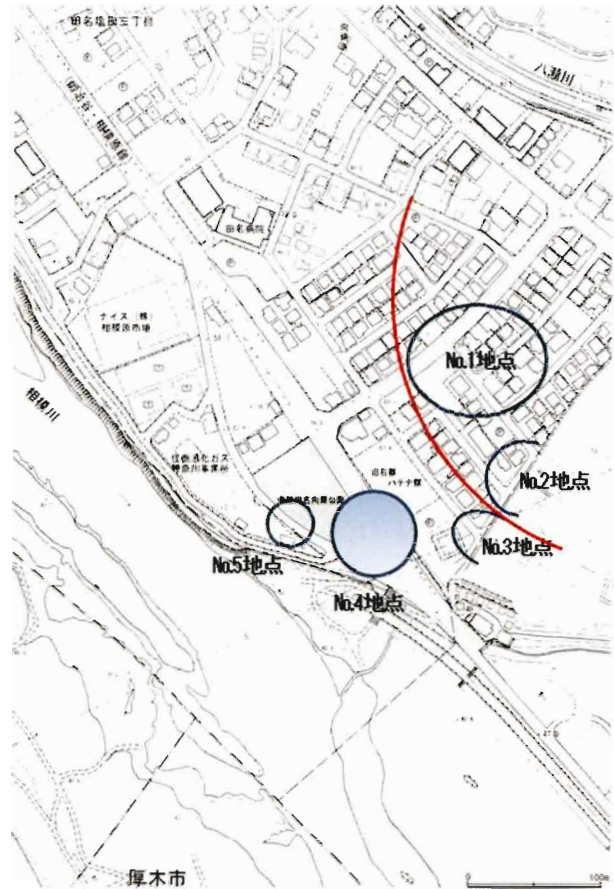


図90 田名向原遺跡の位置図(2)

の旧石器ハテナ館という展示施設が設置されています。

田名向原遺跡では、住居状遺構が発見されたNo.4地点を含め、旧石器時代の地点遺跡が5箇所発見されています。田名向原遺跡が立地する段丘は、相模野台地でもっとも低い(新しい)陽原面という地形面に該当します。陽原面はさらに4段の地形面に細分され、田名向原遺跡の調査では中央に小さな崖線が確認されました(赤のライン)。この崖面を境に北東側のNo.1・No.2地点がMS(陽原塩田)3面に比定され、川に近く一段低い南西側のNo.3~No.5地点がMS4面に比定されます。これらの地形面は形成時期が異なるもので、各地点の石器群の内容も異なっています。まず古い台地面に立地する崖線北東側のNo.1・No.2地点では、石器群の内容はナイフ形石器を特徴とするものでしたが、一時期新しい台地面に立地する南西側のNo.3~No.5地点では、No.4地点に代表される槍先形尖頭器を主要な石器とする石器群が発見されています。このように、田名向原遺跡は、一つの遺跡群の中で時代の変遷によって石器群の移り変わりが分かる遺跡です。

写真57は、遺跡の南側上空から撮影した画像です。写真の左側を相模川が手前方向に流れております。遺跡



写真57 遺跡遠景(南側上空より)

は、この相模川の河川敷まで十数mの場所に位置しています。遺跡は陽原段丘に立地しており、写真の右奥に一段高い田名原段丘が見え、さらに奥にはより高い段丘が見えます。このように、地形面としては相模川から内陸に向かって段々高くなっており、田名向原遺跡は一番低い段丘に立地していることが分かります。また、この遺跡が発見されたのは、段丘の手前を通る県道を直線状に付け替える工事に伴って調査を行ったことによります。

写真58は、遺跡調査区を北から見たものです。奥に相模川が見えます。この写真は、平成9年の調査時に撮っ

たものですが、後で、同じ角度から撮った現在の写真をお見せしますので景観の違いを比べてみてください。この写真からは調査区の奥に住居状遺構の遺物出土状態が見え、相模川寄りに位置しているのが分かります。

写真59は、撮影方向を変えた写真です。左側が住居状遺構の遺物出土状態です。このように円形をなして多数の遺物が出土しているのが分かると思います。そして、右の方には、ブロックと呼ばれる石器の集中部が発見されており、礫群を伴っております。このように、田名向原遺跡では、通常の遺跡で発見されるような石器集中部（ブロック）や礫群とともに、遺物の出土密度が非常に高くきれいな円形をなすような遺物出土状態を示す住居状遺構の両方が発見されています。

写真60は、住居状遺構の遺物出土状態のアップになります。直径10m×10mの円形をなし、周りには円礫や大形の石核や剥片が出土し、その内側からは3,000点を超える主に黒曜石を中心とした石器群が発見されています。さらに周囲からは、多孔質玄武岩（富士玄武岩）を石材とする磨石状の円礫が人為的に配置した状態で出土しました。

写真61は、内側の黒曜石を中心とした石器群を取り上げ、外周円礫と大形の石核・剥片だけを残した状態で、きれいに清掃した状態の写真です。そうしたところ、内部からは火を使用して焼けた炉址と考えられる部分が2箇所、さらに、外周円礫のすぐ内側を沿うように10箇所と中央の炉址付近から2箇所の合計12箇所の柱穴と思われる黒いシミ状の土壌変色部が確認されました。この土壌変色部は、この写真では不明瞭ですが、写真撮影時のように、タワーの上からやや離れて覗くと明瞭にシミ状の変色部が確認できました。

写真62は、外周円礫のアップです。このように丸い



写真59 調査区全景（東より）



写真60 住居状遺構の遺物出土状態



写真61 住居状遺構の外周円礫



写真58 調査区全景（北より）



写真62 外周円礫の部分拡大(1)



写真63 外周円礫の部分拡大(2)

磨石状の多孔質玄武岩を用いた扁平な礫が弧状に配置されています。

写真63も、外周円礫を低い位置から撮ったものです。円形に配置されているのが分かります。多孔質玄武岩の磨石状の礫が直線状に配置されたものや、磨石状の円礫が群集するもの、凝灰岩の大形剥片が剥片剥離された状態で出土したものなどがあります。

外周円礫の内側からは、石器だけではなく、炭化物も多量に発見されています。写真64は炭化物の大きなものを竹串で示したもので、こうした大きな炭化物はシミ状の土壌変色部や炉址から集中して発見されました。こうした炭化物は、外周円礫の外側からは検出されないという特徴があります。写真65の炭化物は、2cmもある大きなものです。



写真64 炭化物の分布状況(串で炭化物を示す)

写真66は、炉址の写真です。やはり多量の炭化物が検出されています。炉址には焼土がブロック状に認められています。この焼土の部分を十文字に掘り下げて調査を行い、観察するとともに資料採取して自然科学分析を行った結果、炉址では実際に火を使用していたことが明らかにされました。

先ほど、柱穴状の黒いシミが廻っていたとお話しましたが、これらが本当に柱穴なのかどうかは非常に重要なことだと考えました。この遺跡は住居状の遺構が発見されたことから保存することに決まりましたが、保存が決まってからも、先ほどの炉址のように実際に火を燃していたのか、あるいは柱穴が本当に穴が開けられたのかを調べるために最小限の調査を行いました。

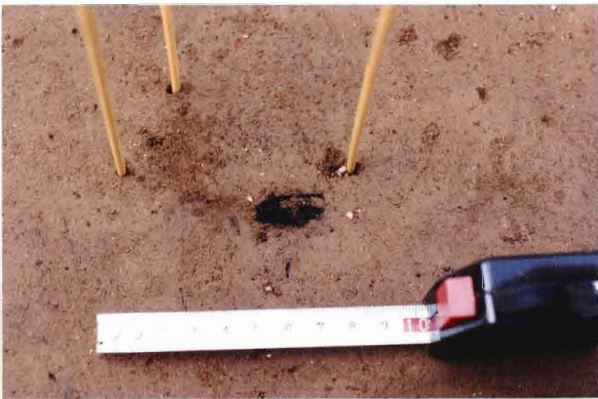


写真65 大型炭化物検出状況

写真67は、4号柱穴としたものの断面になります。一番下層には基盤の相模川礫層が見えます。そのすぐ上に赤い砂状の堆積物が見られますが、これは、この遺跡が立地する地形面が段丘化する直前に堆積した富士相模川泥流堆積物というものです。この泥流堆積物は、この

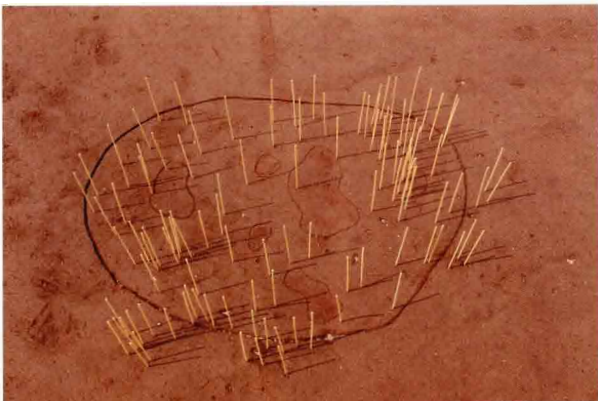


写真66 炉址



写真67 4号柱穴の断面

段丘面一帯を覆っているもので、今回、柱穴を断ち割った結果、ちょうどこの泥流堆積物を掘り込むかたちでローム層が落ち込んでいるのが確認されました。そして、ちょうど間にある粘土層は大分乱れていますが、これは水の影響で二次的に変色して特徴が変わった粘土層であります。このため、上部の掘り込みがはじめに見つかった柱穴でそれが粘土層を挟んでこのように泥流堆積物の掘り込みにつながったと考えました。そして、柱穴の覆土の中からも炭化物が多量に検出されました。このように、柱穴と想定したものはやはり柱穴として掘られた穴であることが確認されました。

このような調査の結果をもとに遺構を図化したのが図91で、住居状遺構の平面図となります。このように直径10mの範囲を巡るように外周円礫が回っています。そして、その内側に10本の柱穴が巡り、中央に2箇所の炉址が検出されました。さらに炉址と外周円礫の内側の柱穴との間に2本の柱穴がありますが、この柱穴は非常に重要な役割を果たしており、それが次の図92でわかります。確認された柱穴配置から想定されたのが上屋復原図（図92）になります。外側の10本の柱穴を使って外側の柱になります。そして対向する柱間は短いところでは6m、長いところでは7mの距離があります。そうしますと、その間の棟もち柱と考えられるのが中の2本の

柱穴で、これによって7mの柱穴間の距離を埋めていると考えられます。そして、想定されたのが図92右上の骨組みで、棟持ち柱の状況を想定復原しています。そして、平面図の南側に円礫の途切れたところが認められることから、この場所を入り口と想定して作成した図が図92の右下となります。朝方、安蒜先生が言われたようにかなり強固な建物を想定することができます。

次に、住居状遺構から出土した遺物について説明します。

図写真68～70は、田名向原遺跡から出土した特徴的な槍先形尖頭器です。住居状遺構から槍先形尖頭器は196点出土しましたが、その大半は全長3cm～4cmの大きさに石材はほとんどが黒曜石です。田名向原遺跡では

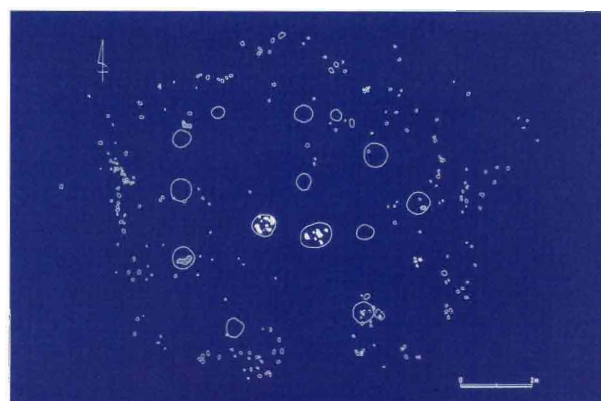


図91 住居状遺構の平面図

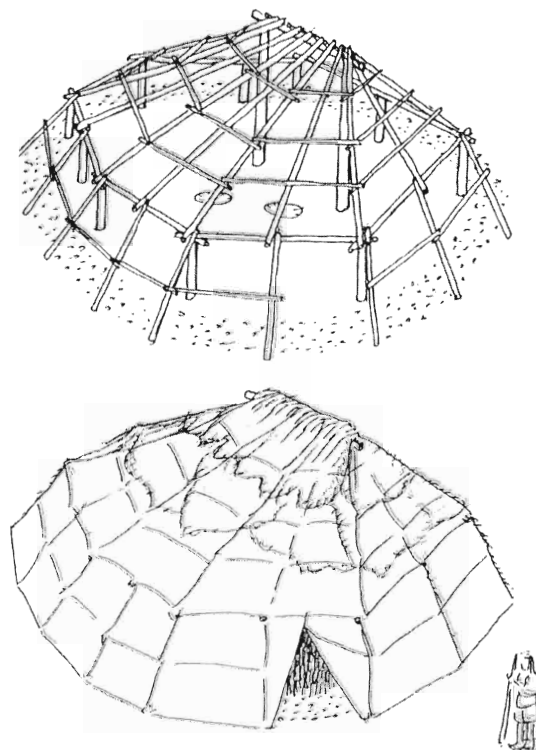
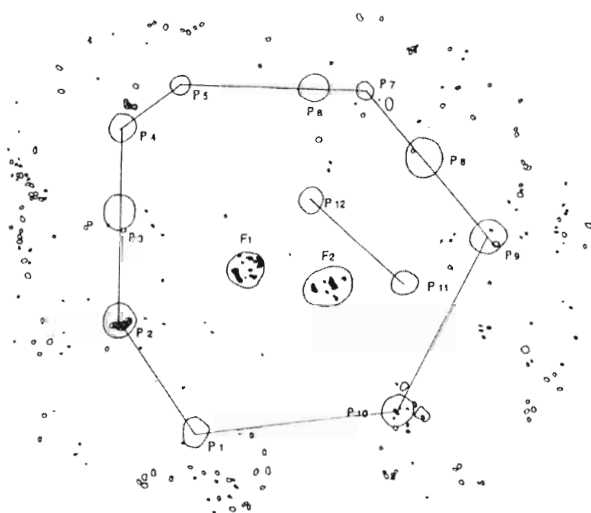


図92 住居状遺構と上屋復原図



写真68 住居状遺構出土石器 槍先形尖頭器



写真70 住居状遺構出土石器 槍先形尖頭器



写真69 着柄痕と想定される傷のある槍先形尖頭器



写真71 住居状遺構出土石器 スクレイパー

黒曜石の原産地分析を行いました。その結果は信州蓼科の麦草峠産の黒曜石が約6割を占めています。その他伊豆半島（柏峠）の黒曜石や北関東（高原山）の黒曜石も見られ、田名向原遺跡では関東周辺の各原産地の黒曜石が持ち込まれ、槍先形尖頭器に加工しています。槍先形尖頭器の特徴は、一部には両面加工もありますが、大半が半両面加工や周辺加工で全長3～4cmの横断面が蒲鋒状（D字状）を呈しております。もう一つの特徴は、槍先形尖頭器をよく観察すると、先端部がつぶれている石器や、先端からの衝撃による剥離痕の見られる石器が多く認められます。このように、槍先形尖頭器はこの場所で製作されただけでなく、それを使用した可能性が高いと思われます。また、着柄痕と思われる傷や（写真69）、全体に傷がついているもの、あるいは縁辺部にも傷が見られる槍先形尖頭器が多く見られます。このほか、熱を受けて表面が発砲しているものや、一旦折れた石器を再加工して寸詰まりとなった小形の槍先形尖頭器などもあります。このように、再利用・リサイクルを行ったと考えられる石器も多くあり、頻繁に槍先形尖頭器を使用していた状況が考えられます。

写真71はスクレイパーで、皮をなめしたり、物を削っ

たりしたと考えられる石器です。上段が黒曜石製、中段・下段が凝灰岩や安山岩を利用した石器で、刃部をアップにしますと（写真72）、すり減っているのがわかります。先ほどの槍先形尖頭器は野外で狩猟に用いた石器であり、これらのスクレイパーは何らかの加工に用いた石器で、住居状遺構の中で作業を行って使用したものと考えられます。

写真73は、現在史跡公園として整備された田名向原遺跡であり、その中にレプリカで復原された住居状遺構が展示してあります。先ほど調査時の住居状遺構の写真をご紹介しましたが、先ほどの写真と同じく北側から撮影しており、現在は高速道路のインターチェンジが建設されています。10年間でかなり景観が変わっております。

以上で、スライドによる遺跡の説明は終わりますが、最後に、田名向原遺跡の調査から考えられることを申し上げます。

まず、もっとも大きな特徴として、住居状遺構の存在が挙げられます。住居状遺構では、その範囲を示す明確な区画が認められます。そして、その上屋・屋根を架けていたことを示す柱穴、さらに、屋内施設と考えられる炉址、これらの3点セットが検出されたということが最も重要なことだといえます。ただし、本遺構については



写真72 刃部がすり減っているスクレイパー



写真73 歴史公園として整備された住居状遺構

この3点がそろっても住居とは呼ばず、住居状遺構と呼んでおります。なぜならば、住居という言葉を使うということは、こうした遺構が普遍的に何軒もあるということになりますが、現時点では田名向原遺跡以外には類例がないため、遺構名として使用する場合には慎重にしなければいけないと考えます。

次に、この遺構から出土した遺物から考えますと、住居状遺構からは3,000点を超える石器が出土しております。その内容を見ますと、多量の槍先形尖頭器を製作しており、しかも頻繁に使用した痕跡を残しています。つまり、槍先形尖頭器を製作し、使用してまた戻ってきているということが想定されます。さらに、石器を再加工・リサイクルして何回も使用しており、狩猟採集生活では回帰的行動を行っていたものと推測される状況も認められました。このような状況からはこの遺構がどうしてあの場所に残されたのかということを考えることが重要な点だと思います。また、遺跡の立地から見ても、現在では相模川に面した一番低い段丘上であるものの、河床まで10m前後の高さがありますが、当時は遺跡のすぐ横が川で、遺構の中にも川砂が堆積していたことから、大雨が降ったら遺構内に川の水が入ってくるような場所であったことが推測されます。そのような場所になぜ遺構を作らなければならなかったのか、今後は、こうした点

も考えていく必要があります。

目の前の大きな相模川には、魚も棲んでいたものと考えられますが、どんな魚がいたのか。また、狩猟を行ったとすれば、何を捕ったのか。こうしたことも考えていかなければいけないと思います。

このようないろいろな状況を組み合わせて考えていけば、本遺構がこの場所に構築された理由も解明されるものと考えられ、さらにこの遺構がこのような環境にとって必要な遺構であったのか、あるいはある程度普遍的な遺構が今回初めて発見されたのかという点も含めて、まだまだ多くの課題を残している遺跡であるということが言えると思います。

司会 麻生さん、どうもありがとうございました。

それでは、明治大学の島田さんからコメントをお願いしたいと思います。

島田 こんにちは、島田と申します。よろしく申し上げます。

この田名向原遺跡は、発見されて10年以上経ちますが、本日の考古学講座のテーマである「旧石器時代のムラと住まい」を考える上では、いまだに一級の資料であります。これより、麻生さんのご発表と重なる部分もありますが、田名向原遺跡の住居状遺構について、私なりの見解を述べさせていただきます。

午前中のご講演で安蒜先生は、この住居状遺構は「堅牢なイエ」であるという表現を用いました。では、田名向原遺跡の住居状遺構は、日常生活とかかわるイエなのか、特別な性格を帯びたイエなのか考えていく必要があります。麻生さんのご発表で端的にまとめられたように、住居状遺構には他の遺跡にはみられないいくつかの特徴があります。その特徴とは、私の場合、ヒトによる様々な行為が累積した結果形成されたと考えられるブロックそのものを点検していくことで明確になってくるのではないかと考えています。これから田名向原遺跡の住居状遺構について、4項目にわたる点検を行いながら住居状遺構の性格について考えていこうと思います。

点検の1として、石器の分布(図93)を点検します。柱穴をつないだラインの内側について、これを区画1とします。そして、外側を巡る外周円礫の外側をつないだラインと柱穴をつないだラインの間を区画2と呼んでいきます。

まず、槍先形尖頭器の分布ですが、この図では、▲で示しております。槍先形尖頭器は、区画2にも分布が及んでいますが、むしろ区画1に密集しております。ブロックの中で、区画1から区画2に段々と少なくなっていく

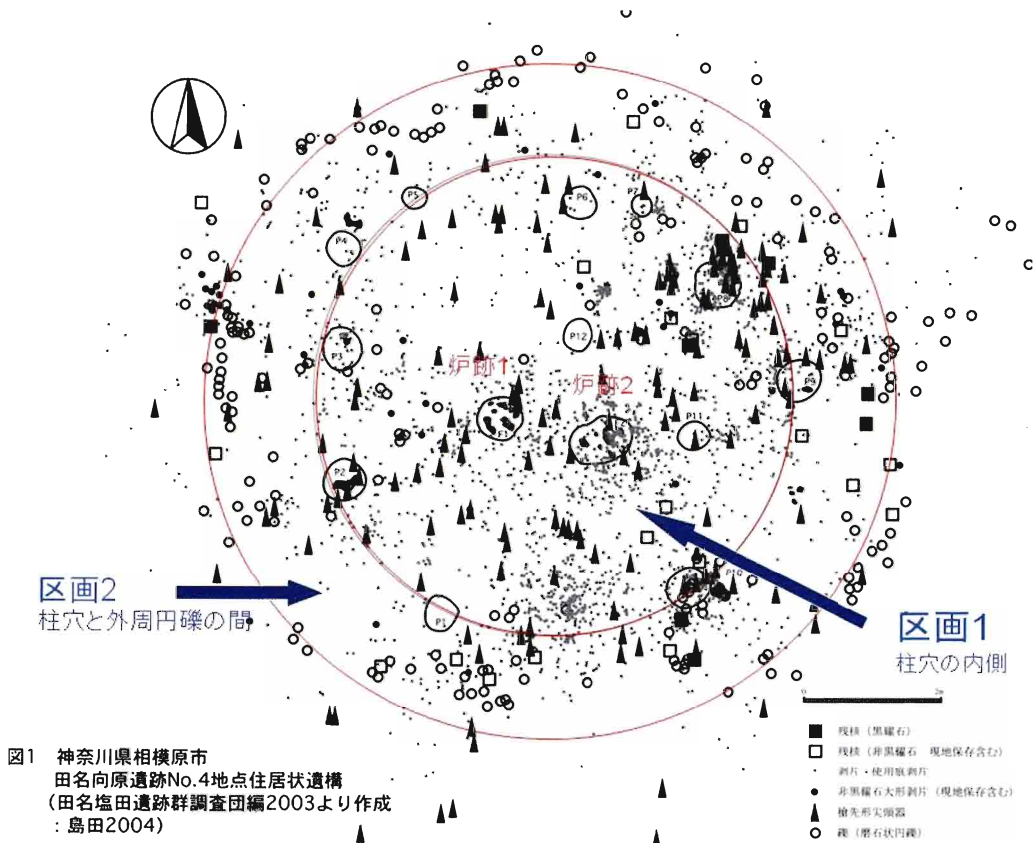


図93 住居状遺構内の石器の分布状況

のではなく、区画1のラインを境として急激に分布が散漫になります。このほか残核や非黒曜石製の大型剥片は区画1には少なく、区画2の方に多く分布するという特徴もみられます。

ところで、普通の発掘では回収できないほどの細かな破片があります。これは微細石片とよばれ、発掘した土を洗浄して回収されるものです。ここでは図を提示していませんが、石器製作の際に飛び散った微細石片の分布は、区画1には密集する一方、区画2では散漫な分布を示しております。そして、外周円礫の外側には微細石片は飛び散ってはいないということがすでに分かっております。

そして、2008年に坂下さんが発表されましたように、もっとも興味深いのは、熱を受けた黒曜石製石器の分布です。坂下さんの2008年の論考では、炉跡2に熱を受けた黒曜石が集中します。これは炉址ですから当然ですが、ところが、それ以外にP8やP10といった柱穴と思われる場所にも熱を受けた痕跡のある黒曜石が分布していることが指摘されました。

これまでの点検1では、区画1と区画2の石器分布を比べると、区画1と区画2の境、そして区画2の外側にそって石器の分布が連続しないあり方がありそうだと

うことが分かりました。このことに関連して、2003年に小野昭先生も指摘されておりますが、こうした区画1と区画2の境目、あるいは区画2の外側の境目に何か石器の分布を妨げる遮蔽物があった可能性が指摘されています。さらに、残核や非黒曜石製の大型剥片が遺構の中心部にはなくむしろ外側に分布するというあり方は、飛び散ったままの分布ではなく、石器が移動している、つまり住居状遺構の中で石屑が片付けられているという可能性があるのではないのでしょうか。さらに、熱を受けた黒曜石が柱穴の部分にも分布するという事実は、住居状遺構の柱の位置が部分的に改修されていた可能性を示唆すると考えています。このように、住居状遺構における石器の分布は、柱と上屋があったことを支持しています。

点検その2ですが、石器作りの内容を点検しますと(図94)、住居状遺構のブロックの中では、石核から剥片を打ち剥がすことはほとんど行われておらず、素材剥片をもとに槍先形尖頭器を製作するという作業が集中的に行われていたことが分かっています。こうした状況を示すことは、住居状遺構の中で行われていた石器作りが、その場だけでは完結していないことを示しています。つまり、田名向原遺跡の住居状遺構での石器作りの契機と内容は、他の場所で作られた素材の剥片を前提とし、それ

らに依存していることを示しております。いいかえれば、住居状遺構は、他の遺跡やブロックと結びつくことによって形成されたということです。

点検3としては、黒曜石の原産地のことです。望月先生の蛍光X線の分析によれば、黒曜石の産地は、多い順に八ヶ岳産（麦草峠）、箱根産、霧ヶ峰産、高原山産と示されており、神津島を除く各地の産地に由来する素材剥片が住居状遺構に持ち込まれています（表6）。この時期の遺跡やブロックでは普通、黒曜石の原産地リストは特定の産地からの搬入に偏ったあり方を示しております。これを単純な黒曜石原産地の構成と呼ぶと、田名向原遺跡の住居状遺構の場合は複合的な黒曜石原産地の構成と呼ぶことができます。ということは、住居状遺構と結びついている他の遺跡やブロックは、一ヶ所だけではなく複数の遺跡やブロックが関与することで、住居状遺構が運用されていたということを示すものではないでしょうか。また、結びつく遺跡やブロックの数が多ということは、住居状遺構の形成と運用の期間に対して、比較的長い時間を想定できることを意味します。

点検4としたブロックの規模について、結論から申し

上げると、田名向原遺跡の住居状遺構は、同じ編年上の時間幅にある他のブロックに比べて突出した規模を誇っており、大規模なブロックです（図95）。どうしてこのようなブロックが形成されたのかということが問題となります。

以上、4つの点検項目をまとめます。住居状遺構の性格をめぐる見解には、黒曜石流通の中継地点、あるいは定住性の萌芽ということも言われております。4つの点検項目を検討した結果、田名向原遺跡の住居状遺構は、特定の単位集団が定住したというイメージではなく、複数の単位集団による共同利用の繰り返しによって形成されたと考える方に妥当性があると判断します。立地条件もやはり重要な要素です。つまり、河川（魚類）資源という場所が定まった、いわば定地的な資源を共同で管理して利用する、そうした場所が田名向原遺跡の住居状遺構ではないかと考えられます。このように、いくつもの集団により繰り返し共同利用されることによって住居状遺構に付随するブロックが他に例をみないほど大規模になる。そして、田名向原遺跡の住居状遺構が共用地であったということ自体が、恒常的な上屋構造が構築された理

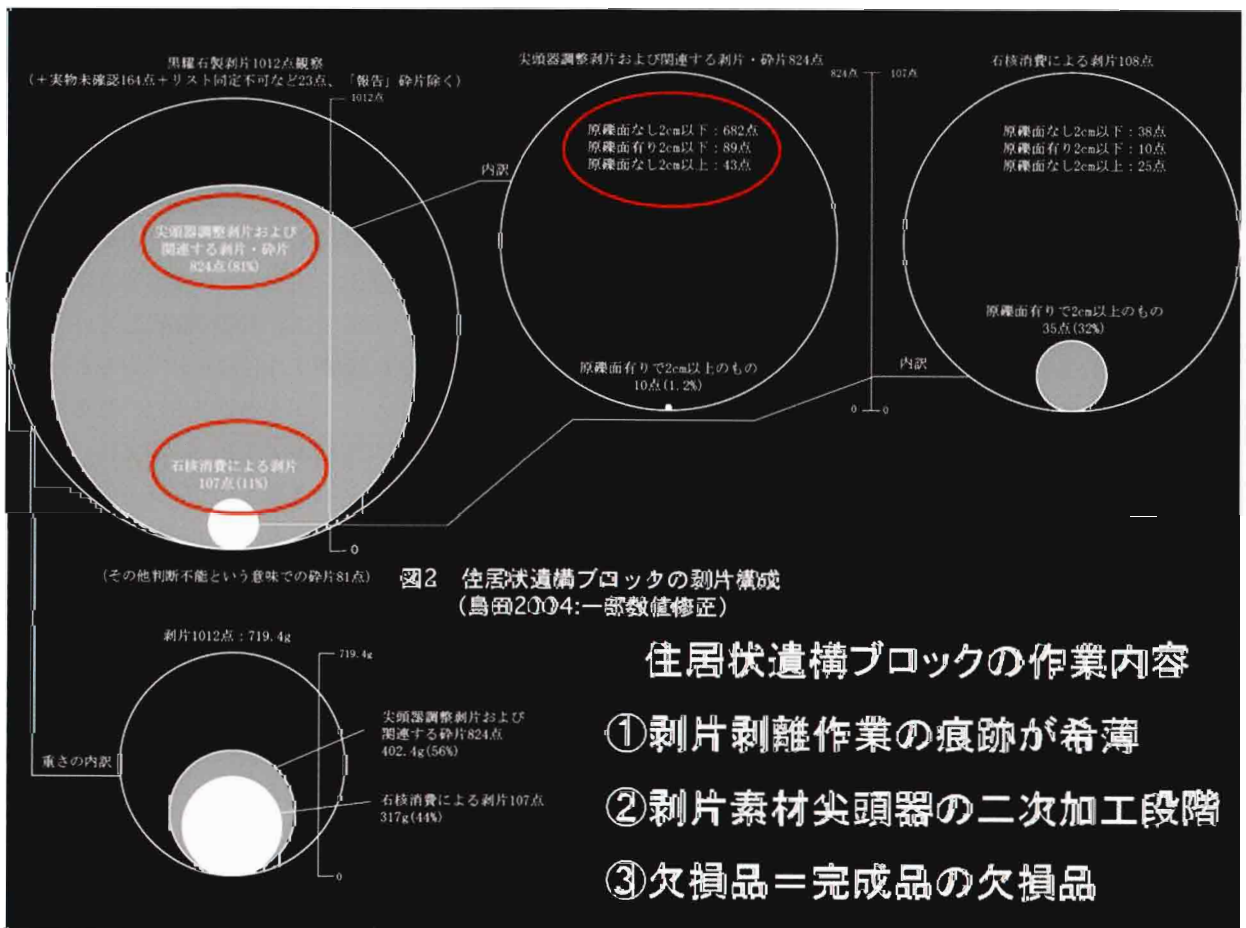


図94 住居状遺構ブロックの剥片構成

表2 田名向原遺跡A地区石器群の石材構成

	霧ヶ峰系	八ヶ岳系	箱根系	高原山系	不明等	判定数/OB計	非黒曜石	OB：総数
A地区No. 1：Ms3面	14	5	142	0	26	187/187	382	34%
A地区No. 2：Ms3面	402	3	0	0	29	434/434	2	99%
A地区No. 3：Ms4面	331	0	34	0	46	411/413	7	98%
A地区No. 4：Ms4面	住居状遺構	122	958	288	39	1563/2357	624	79%
	1ブロック	67	10	6	0	90/90	249	27%
	2ブロック	1	1	0	0	0/2	102	1.9%
	3ブロック	—	—	—	—	0/180	20	90%
	4ブロック	—	—	—	—	0/40	15	73%
	5ブロック	—	—	—	—	0/327	2	99%
	6ブロック	—	—	—	—	0/803	28	97%
	7ブロック	—	—	—	—	0/24	1	96%

麻生2004より作成

表6 田名向原遺跡A地区石器群の石材構成

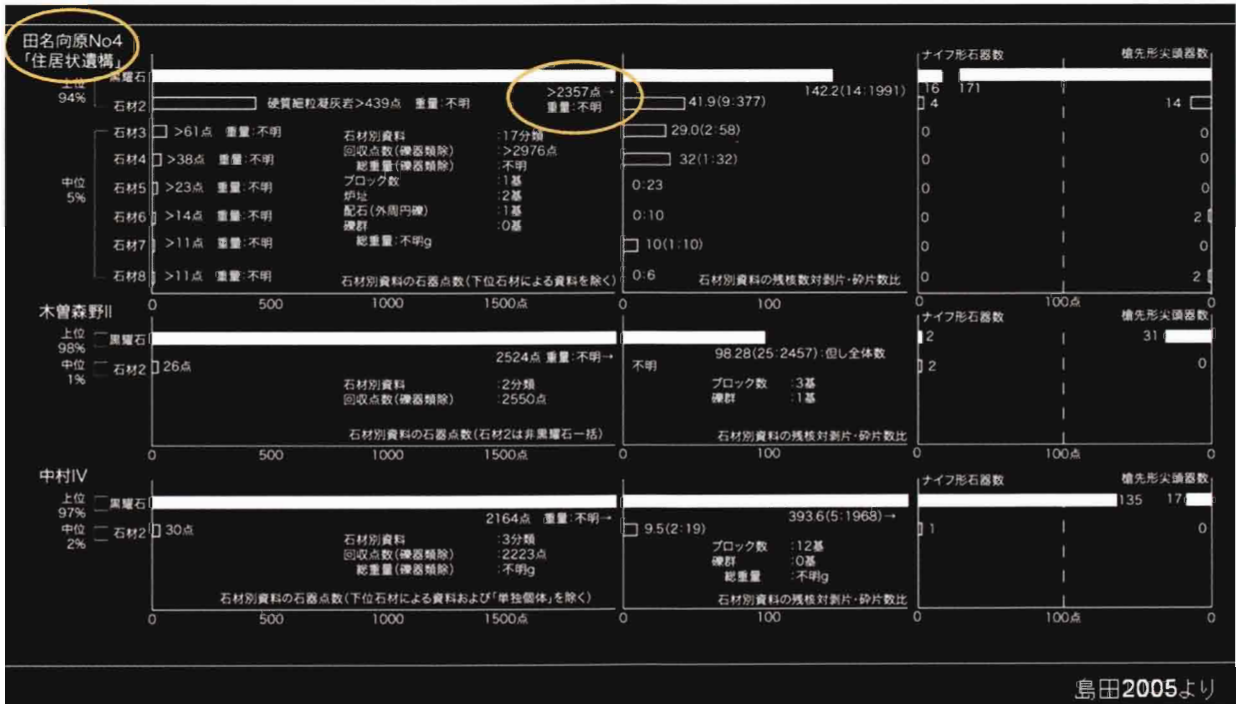


図95 同時期石器群とのブロック数・礫群・石器群の内容の比較



写真74 島田和高氏

由であったと考えます。

最後に、こうした資源利用の共有地、つまり住居状遺構は1ヶ所だけとは限りません。今後の発掘調査でこうした住居状遺構が川辺に次々に発見されるだろうということを大胆に予測してコメントを終わります。

司会 島田さん、どうもありがとうございました。

小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報）

発表 栗原 伸好
コメント 御堂島 正

司会 それでは、次の発表に移ります。速報となりますが、旧石器時代の住まいを探る上で重要な遺跡になると思われます「小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群」について、かながわ考古学財団の栗原伸好さんに発表していただきます。

栗原 ただいまご紹介いただきました、かながわ考古学財団の栗原と申します。よろしくお願いします。

小保戸遺跡は、調査が終わったばかりで詳細な分析はこれからですが、本日の『かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る』というテーマに関連すると考えられる遺構が発見されましたので、発表する機会を与えていただきました。とはいいまでも、小保戸遺跡の場合は、田名向原遺跡のような、安藤先生がいう堅牢な住居ある

いは住まいとは異なり、確認されたブロックとか石器集中地点といわれるものが、ひょっとしたら、簡易な住まいあるいはイエと考えられるかもしれないという出土状況を示す遺跡であります。これからスライドで紹介しながら遺跡の内容についてご説明し、最後に、少し飛躍するかもしれませんが、現在のイエとか住まいの場面、生活の一つの場面の中で、こうしたことが想定できないかという投げかけをしてみたいと思います。

さて、小保戸遺跡の位置は、先ほど畠中さんが発表した津久井城跡馬込地区の串川を挟んだ対岸になります。遺跡全体図（図96）をみていただきたいのですが、発掘調査は、遺跡全体で約15,000㎡を調査しており、南側は上段の大保戸遺跡との境をなす段丘崖になり、大保戸

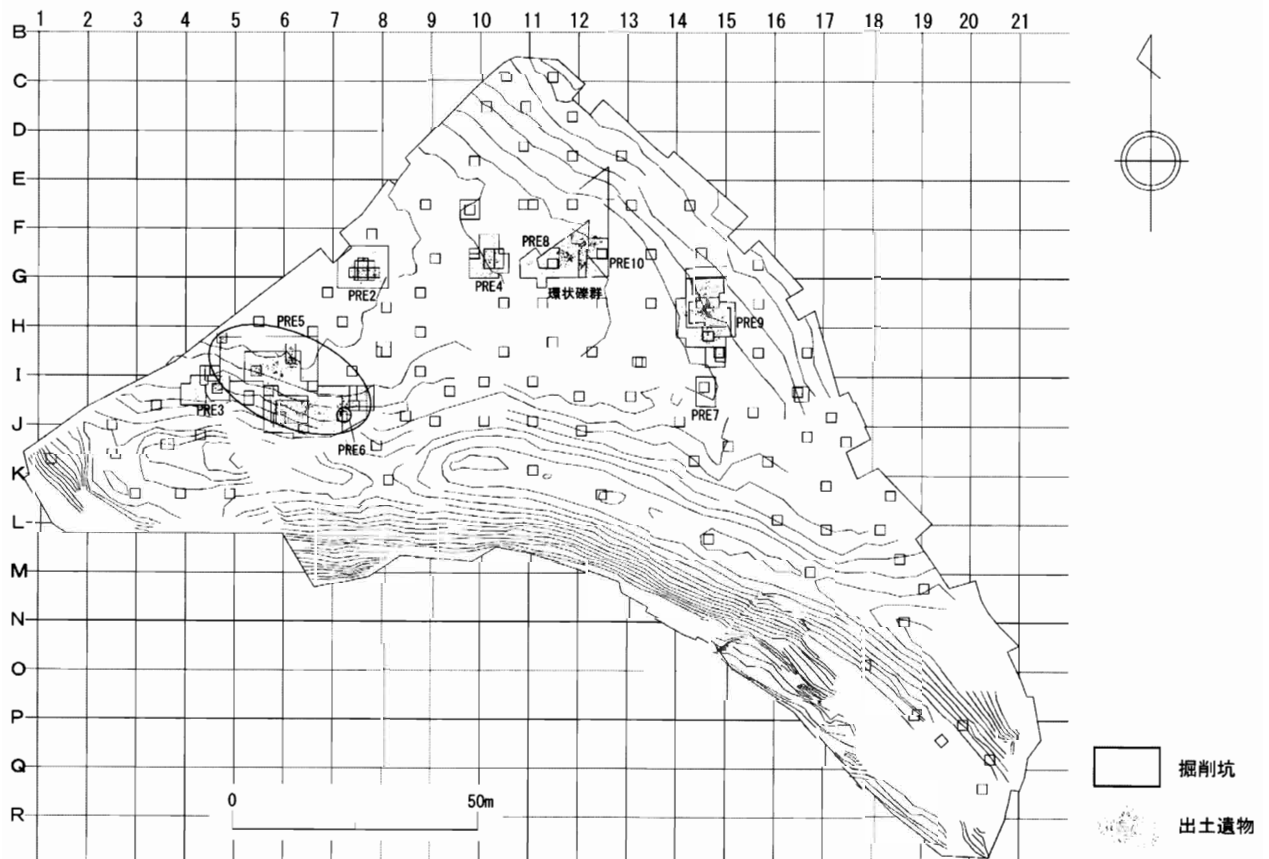


図96 小保戸遺跡の旧石器時代調査区全図・遺物分布図

遺跡との比高差は約30mで、小保戸遺跡の標高は130～132mです。また、北東側は比高差20mほどの一段低い段丘に続く段丘崖となり、北西側は串川に面した段丘崖となっています。このように、地形的には三角形の独立した一つの段丘となっています。

旧石器時代の遺物は、石器の単独出土が1箇所と大まかに9箇所の石器集中地点から出土しました。図96の11～12列に環状分布を呈する礫群を伴う石器集中地点が見つかっており、4～7列からは1,000点ほどの石器が出土しています。

写真75は、相模野台地と相模川中流を南西上空から見た写真で、中央に新旧の昭和橋がみえます。旧石器時代の住居状遺構が発見された田名向原遺跡は左側の新昭和橋よりやや上流の左岸の川岸に位置します。

写真76は、写真75より上流の相模原市城山町小倉地区の遺跡群を東方から見た写真で、相模川は右側から大きく蛇行して手前左側に流れ、その後方の段丘群に小保戸遺跡・大保戸遺跡・津久井城跡馬込地区があり、馬込地区と小保戸・大保戸遺跡の間の深い谷が串川で、手前で相模川と合流しております。



写真75 相模川中流と相模野台地の航空写真



写真76 相模原市城山町小倉地区の旧石器時代遺跡群

写真77は、相模野台地の標準的な層序で綾瀬市の早川天神森遺跡です。写真78は、上層部分がありませんが同じ綾瀬市の上土棚遺跡の層序です。相模野台地の層位については、B1あるいはL2などと表現されますが、これは相模野のローム層の特徴として、何枚もの黒い帯（黒色帯：B0～B5）とその間の黄色い帯（L1～L5）がみとめられ、遺物の出土層位を何番目の黒い帯とか何番目の黄色い帯として呼称しております。田名向原遺跡は、第1黒色帯の上部（B1層上部）から石器が出土しておりますが、小保戸遺跡は、第1黒色帯の下部（B1層下部）から石器が出土し、綾瀬市吉岡遺跡群と藤沢市用田鳥居前遺跡の遺跡間石器接合資料の出土層

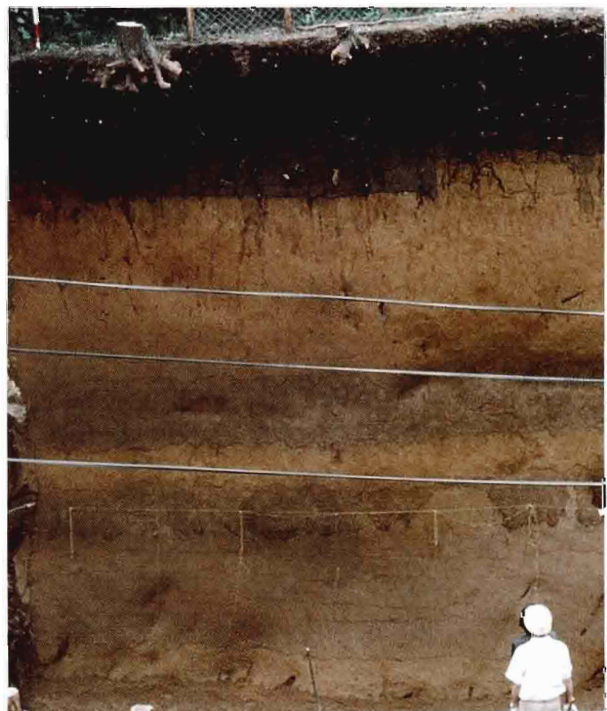


写真77 相模野台地のローム層序（早川天神森遺跡）

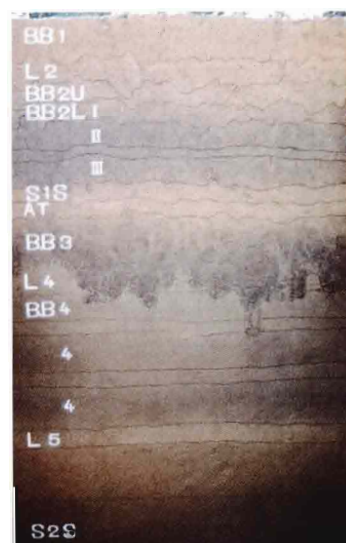


写真78 相模野台地のローム層序（上土棚遺跡）

位とほぼ同じです。炭化物による年代測定によると、およそ23,000年前ということになります。

写真79は、藤沢市用田南原遺跡の石器出土状況です。旧石器時代遺跡の一般的な遺物出土状況を示しています。旧石器時代の出土遺物は、そのほとんどが、石器などの石に限られています。これは、日本の土壌が酸性で有機質の遺物が残らないためで、動物の骨などはほとんど出土しません。まれに写真80(藤沢市用田鳥居原遺跡)のような大形の炭化物が見つかったり、落とし穴(写真51、横須賀市打木原遺跡)が見つかることもありますが、ほとんどの場合、石器しか出土しません。当時の人々は、



写真79 藤沢市用田南原遺跡の遺物出土状況



写真80 藤沢市用田鳥居原遺跡出土の大型炭化材



写真81 埼玉県砂川遺跡の接合資料

遺跡で石器製作を行い、写真81の接合資料(埼玉県砂川遺跡出土石器)で示されるように、ある遺跡では母岩の表皮など不要部分を残し、そこから真ん中の石器の素材を獲得できる石核の部分を持ちだし、次々と移動する遊動生活を行っていたと考えられています。

小保戸遺跡で検出された環状分布を呈する礫群は、はじめは少し上層、田名向原遺跡とほぼ同じB1層上部から石器集中地点が3箇所検出されました(写真82)。大きな石や礫は安定しているのですが、小さな石器は出土する高さが一定せずさらに下層からも出土する可能性があるため、だめ押しのため30cm~50cmほど掘り下げを行うという調査方法をとりました(写真83)。そうしたところ、先ほどの面から20~30cmほど下層から焼けた礫がまとまって出土することが分かりました(写真84)。そして、数人で作業を行っていたので、こちらでも出た、あちらでも出たということでしたので、暖をとったり調理を行ったと考えられている礫群という焼けた礫の密集がまとまって検出された当初は考えていました(写真85)。しかし、その中に1点だけ大きな石が出土し(写真86)、さらにその周りを拡張したところ、その



写真82 小保戸遺跡B1層上部石器出土状態



写真83 小保戸遺跡B1層石器出土状態

大きな石を取り囲むように焼けた石がぐるりと回るように検出されました。あれっ、少し変じゃないかなと、よく観察すると、礫自体は拳大で焼けており、田名向原遺跡の外縁礫と呼ばれているものとは外見上、あるいは性格も違うと思いますが、石器ではない礫が大きな石を取り囲んでいることが分かりました。これはおかしいと思い、さらに調査を進めました。この大きな石は、住まいに関する炉の石なのか、あるいは石器を作る際の台石なのか、その周りからは石器の素材となる剥片などが出土しましたし、小さな炭化物も検出されましたので、そ

のどちらかなと考えながら調査を行いました。最終的には、やはりその大きな石を取り囲むように、礫が円弧状に回って分布していることが確認されました。

写真87は、1号～4号の環状分布を呈する礫群とした遺構の全体写真です。これらの遺構からは共通して礫で囲まれた範囲の内側から石器が出土しています。1号～3号からは、60点～70点ほどの少量の石器が出土しています。これに対し、4号とした遺構では、他の遺構に



写真84 礫群調査（掘削）状況



写真85 礫群出土状況



写真86 大型礫出土状況



写真87 1号～4号礫群（環状分布を呈する礫群）(1)



写真88 1号～4号礫群（環状分布を呈する礫群）(2)



写真89 1号礫群

比べて出土石器が多く、当初は周りの礫がきちっと回っている状況が把握できませんでしたので、おそらく1号～3号の礫で囲まれた遺構の外側で本格的な石器製作を行い、礫で囲まれた遺構の内側では、必要最低限の石器製作を行っていたのではないかと認識しておりました。

写真88は、角度を変えてみた全体写真です。その後、4号とした遺構でも石器の分布を囲むように礫が回っている状況が確認されましたので、これを含め環状分布を呈する礫群は4基あると判断しました。

遺構を一つ一つ見ていきますと、写真89は、最初に確認された1号とした礫群です。これは一番形がしっかりした遺構で、環状に回る礫の密集部を部分的に一つの礫群として捉えるよりも全体として一つの遺構（礫群）として捉えた方がよいという視点をもち調査を行いました。この遺構の中央にある大きな石は、偶然この位置にあるようにもみえますが、この石は平らな面を上にして出土しており、下の面は中央に稜をもち断面逆三角形形状を呈していることから、平らな面を上にするには地面を少し掘り窪めることが必要です。また、その周りからは炭化物が集中して検出されましたが(700点を記録)、

石器は60～70点しか出土しておりません。

写真90は、2号とした遺構で、よく見ますと礫が外周を回っており、その内側にも私たちが礫群と呼んでいるような調理等に使用した礫の密集部があります。そうしますと、午前中の安藤先生の言う前の段階になるかもしれませんが、外側を回る礫の内側に礫群が伴う例かもしれません。また、この内側の礫群に接して一回り大きな石がみとめられますが、これは、その位置関係や大きさなどから、1号と同じように、遺構の中央部に台石のような石が残されたものではないかと考えられます。

写真91の3号とした遺構は、遺物がさらに少なく分かりづらいのですが、礫がやはり円弧状に回っており、その中から多量の炭化物と少量の石器が出土するというあり方は、1号や2号の遺構と共通しております。

先ほど麻生さんは、田名向原遺跡では柱穴はタワーの上から覗いたときに確認されたという、その経緯をご説明されましたが、写真92・93は、1号の遺構について、たまたま雨あがりの時に見たところ、大きな石を囲むようにロームが黒っぽくみえるのが確認されました。それで詳細に観察した結果、その範囲の線引きをおこなって



写真90 2号礫群



写真92 1号礫群の炉址(1)



写真91 3号礫群



写真93 1号礫群の炉址(2)

炉址と想定しました。

図97は、環状分布を呈する礫群4基の全体図です。小さな赤いドットが炭化物、丸く示したものが焼けた礫、×印が石器であり、4号とした遺構からは多量の石器が出土していることが分かります。また、1号では、ロームが変色した範囲と炭化物の密集する部分が重なっていることが分かります。そして、石器はロームが変色した範囲のすぐ近く（礫で囲まれた範囲の中央部付近）に分布しており、こうした状況は2号や3号でも共通しております。そして、4号については、1号～3号と同

様に礫の内側に石器や炭化物が分布しますが、出土石器が多い点だけが違うということになります。

以上が、小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群の特徴であります。

次に、これらの遺構を田名向原遺跡の住居状遺構と比較してみようと思います。田名向原遺跡の場合、鳥田さんも述べていたように、住居の遺構としての要素がすべて認められる確実な例として捉えられています。写真94が小保戸遺跡、写真95が田名向原遺跡です。

まず、遺構の時期としては、14Cの測定年代（暦年較正）は、小保戸遺跡が約23,000年前に対して田名向原は



写真94 小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群



写真95 田名向原遺跡の住居状遺構

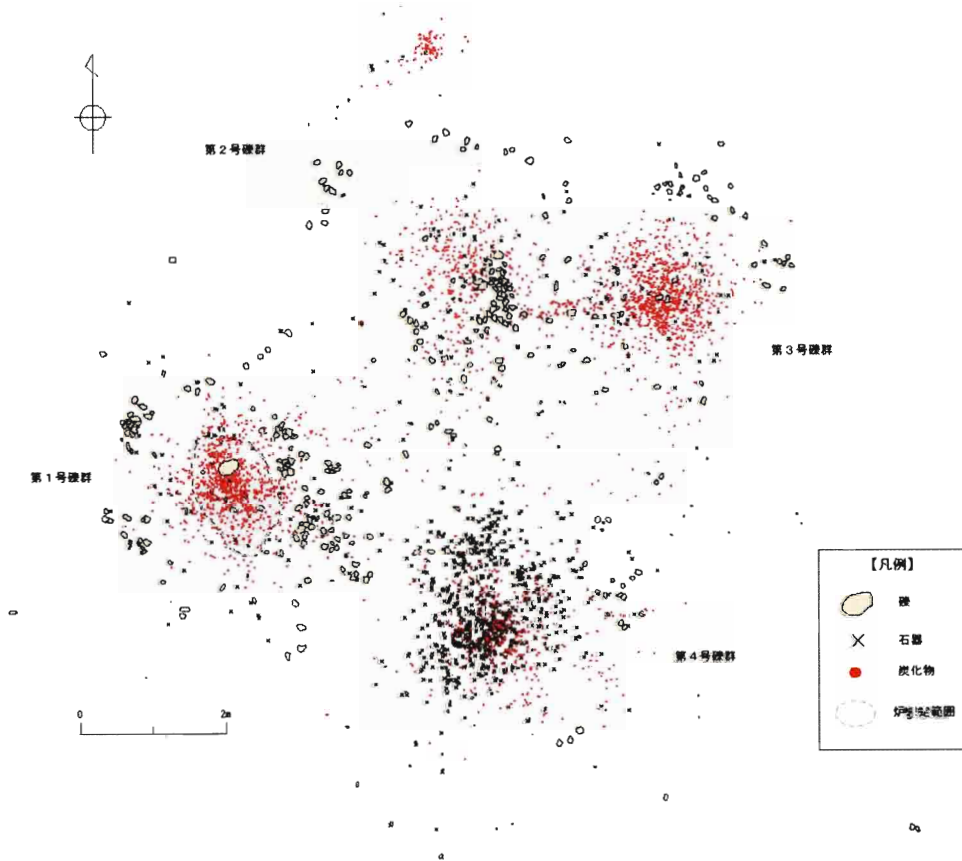


図97 1号～4号礫群全体図

約20,000年前ですが、石器の内容にも同様の差異があり、両遺跡は時期的な違いがあると考えられます。

遺構の規模・大きさは、小保戸遺跡の場合は4基ともほぼ均一の大きさであり、径2～3mを測ります。これに対して田名向原遺跡の遺構は、外周円礫までの全体で径10mの規模をもってあります。ただ、小保戸遺跡の遺構群は、4基全体が13m×10mの範囲に収まり、4基全体の規模が田名向原遺跡の規模とほぼ同じだということが興味深い点です。

遺構の形状は、両遺跡とも円を描くような形状をなして共通しております。

しかし、関連施設の面では両遺跡間には大きな違いが認められ、田名向原遺跡では、外周円礫に沿うかたちで



写真96 現代のイエ（3階建て住宅と平屋建て住宅）



写真97 江戸時代のイエ（旅籠と商家）



写真98 合掌造りの家並み

10箇所柱穴と内側の棟もち柱と考えられる2箇所の計12箇所の柱穴が認められ、また焼土をもつ明確な炉址が2箇所認められます。これに対して小保戸遺跡では、1号では炉址を想定しておりますが、炭化物の分布のみで、柱穴や炉址などの明確な施設は検出されていません。

石器や礫の出土状態はどうかといいますと、田名向原遺跡では、住居状遺構の外側にあるブロックを除外すれば、外周円礫の内側から石器が出土しており、この点では、小保戸遺跡でも4基とも同じような石器の分布が認められます。

最後に、現在の住居などを比較しながら参考にして小保戸遺跡の遺構について、考えてみたいと思います。写真96は、ある雑誌に掲載してある住宅を例にしましたが、いずれも現代の住宅で平屋・三階建て・マンションと各種のイエがあります。次に写真97の2軒は、少し前の江戸時代終わり頃のイエです。右側のものは旅籠とされるイエであり、横には蔵もあります。両方とも中に台所があり、寝室があり、風呂があつてトイレもあります。これに対して写真98・100は、合掌造りの家並みと、静岡県浜松市の蜷塚公園にある旧高山家住宅という19世紀半ば（江戸時代後期）の標準的な農民の住宅とされるイエです。旧高山家住宅は、平面図（図98）があり、それによると高床の部屋は「なんど」（納戸）と「おい」（座敷）があり、そのほか「にわ」と書いてある土間があるだけです。この土間には、「ながし」と書いてある台所はありますが、建物の中に風呂やトイレはありません。そうしますと、これをイエといわないかという、やはりイエというと思います。こういうことを考慮して旧石器時代の人々の生活を考えますと、先ほど吉田さんが発表した吉岡遺跡群と用田鳥居前遺跡の接合資料（写真101）が示すように、ある遺跡（吉岡遺跡群）で石器を作り、その一部を携えて狩りに出かけ、また違う遺跡（用田鳥居前遺跡）に立ち寄った。そこでは、多量の炭化物



写真99 栗原伸好氏



写真100 江戸時代のイエ（農家）旧高山家住宅

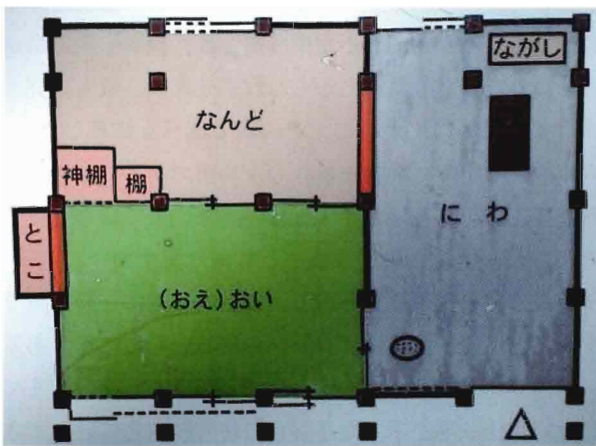


図98 旧高山家住宅の平面図

が検出されたことから、火を囲んで食事をとったり、暖をとったことが遺物の出土状態から想定されます。このように、石器が多い・少ない、炭化物がある・ない、という違いはありますが、こういったあり方が旧石器時代遺跡の遺物出土状態の一般的なあり方であります。こうした点から遊動生活を中心とした当時の人々の生活を考えますと、もともと田名向原遺跡の住居状遺構のように建物の存在を示すすべての要素がそろって発見される遺構は非常に少なく、1万箇所以上もある日本の旧石器時代遺跡の中でわずか数遺跡のみで、多くは石器や礫・炭化物が出土するだけというのが日本の旧石器時代遺跡の特徴であります。旧石器時代の生活様式は、定住生活が始まった縄文時代以降とは異なり、雨・風・暑さ・寒さや動物＝外敵などから身を護るだけの一定空間を囲っただけの簡易な建物を住まいの大前提として捉えていく必要があると私は思います。そうしますと、例えば狩りに行った時に食事をしただけの場所や、あるいは食事をする空間があってその近くにすぐにも移動できるような簡易なイエあるいは住まいに近いものがあることが想定さ

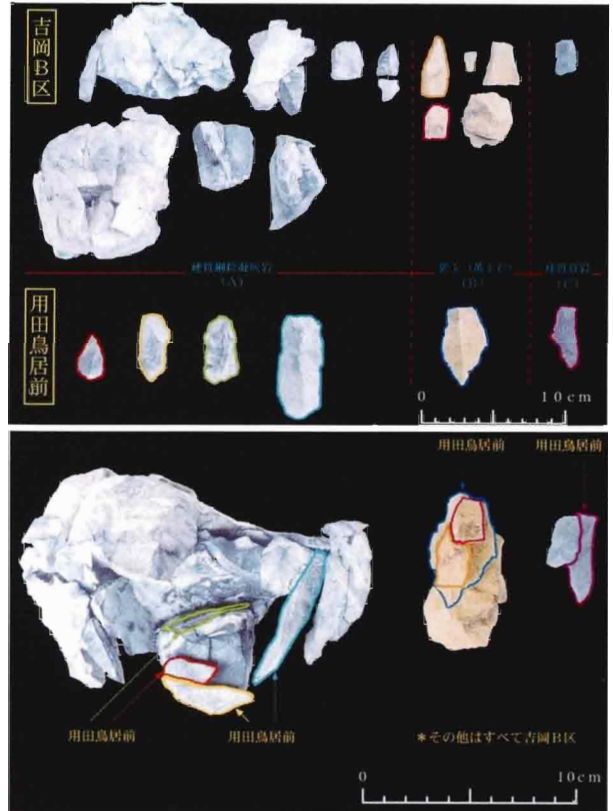


写真101 吉岡と用田鳥居前の遺跡間接合資料

れ、小保戸遺跡の場合、たまたまその場所が礫に囲まれた空間から見つかったため、「ムラと住まいを探る」という本日の講座の発表対象になったのではないかと考えております。

司会 栗原さん、どうもありがとうございました。それでは、ただいまの小保戸遺跡の速報に対して、神奈川県教育委員会の御堂島さんからコメントをいただきたいと思ひます。

御堂島 御堂島です。よろしくお願ひします。

ただいまの発表では、小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群は、田名向原遺跡と同様、当時のムラと住まいを探る貴重な発見であるとされました。また、レジメでは、一時的な居住施設である可能性が高いとして、その根拠として礫による一定空間の限定とその内側での石器製作、火の使用などを挙げておりました。

田名向原遺跡の住居状遺構が何らかの建物跡とする根拠は、先ほど麻生さんが発表されたように、外周円礫の範囲内に炉址や柱穴があり、しかもそれがかなり明確なカタチで確認され、多量の石器群が内側から出土しているということです。それを栗原さんが先ほど示されたように、小保戸遺跡と比べますと、まず規模の上で大きな違いがあります。小保戸遺跡の2～3mに対して田名向原遺跡では約10mの規模をもっています。また、特徴的



写真102 御堂島正氏

な外周円礫または環状分布を呈する礫をみますと、田名向原遺跡では焼けていない礫が大半であり、しかも富士玄武岩を主体的に選択しております。また、田名向原遺跡の炉址では、明確な焼土が確認されています。こういう要素が田名向原遺跡の住居状遺構が建物跡であるということを積極的に支持しております。このように比較しますと、田名向原遺跡の際だった特徴が小保戸遺跡とは違っていると思います。

小保戸遺跡と田名向原遺跡で共通するのは、礫が環状に分布するという点だと思いますが、礫をみますと、小保戸遺跡の礫は焼けていて通常の礫群と変わらないということです。大きさもそうです。これを通常の礫群と捉えることも可能であり、山梨県の保坂さんは、環状を呈しているということの理由として、礫群を使用した後で礫を取り除く時に周りに礫を置いた状態を示しているというお話しもしております。その状態は、礫群の使用・廃棄の一断面を示しているとも考えられます。今後、報告書に向けて整理・分析をしていくわけですが、こういった考えもぜひ検討していただきたいと思います。

ということで、田名向原遺跡と比較してみますと田名向原遺跡とは違い、居住施設というよりも、通常のブロックと礫群と同じく位置づけることも考えられます。午前中の安蒜先生のご発表にありましたように、ブロック＝イエとするのであれば、小保戸遺跡の場合は礫の範囲が居住施設の範囲を示すと考えられます。しかし、ブロックの多くは石器製作の場と考えられますが、そのすべてがイエあるいは居住施設を表すのかといいますと、もう少し検討が必要だと私自身は考えます。石器の製作を試みますと、剥片とか碎片は、短時間の製作作業でも相当数生じます。小規模なブロックはすぐに形成されるわけです。先ほど、吉岡と用田の接合資料に関して遊動生活という言葉が出てまいりましたが、用田鳥居前遺跡や服部さんが紹介された小規模な遺跡は、複数家族で出かけるようなこともあったかもしれませんが、数人の狩人が狩猟のために出かけて、その場で道具を修理したり、食事をとったり、動物を解体した場所であるとも考えられます。この場合は、イエとはいえないのではないかと考えられます。このようなこともありますので、今後、小保戸遺跡の整理を行う中で、田名向原遺跡との比較をするとともに、通常のブロックの解釈として、イエあるいは居住施設といえるのかどうかということ、今までにない出土状態を示した小保戸遺跡で検討していただきたいと思います。いずれにしても環状分布を呈する礫群をどのように解釈できるのかということが重要だと考えますし、田名向原遺跡と同じ意味の環状を呈する礫群なのかどうか、その検討もよろしくお願ひしたいと思います。以上で、私のコメントを終わります。

司会 御堂島さん、どうもありがとうございました。

講 評

愛知学院大学文学部教授 白石浩之

司会 これでは各論の発表を終わらして、最後に、愛知学院大学文学部教授の白石浩之先生に講評をお願いしたいと思います。

白石 こんにちは白石です。講評ということですが、これまでの皆さんの発表やコメントは、非常に懇切丁寧な説明でしかも内容が深く優れているため、私はいったい何をお話ししたらいいのか苦心しております。そこで、私はいくつかの絞ってお話ししたいと思います。加えて皆さんが発表されたように慎重な意見もよろしいのですが、私は少し大胆に踏み込んで話をしたいと思います。

今日は、安蒜先生は「旧石器時代のムラと住まい」という題で話をされました。相模野台地では非常に秀逸な遺跡が多く、多数の文化層が層位的に出土する遺跡も多いという特徴がみられます。しかも、近年非常に特筆すべき事例が認められます。その中には、先ほど吉田さんが発表された吉岡遺跡群と用田鳥居前遺跡の遺跡間石器接合もありますし、田名向原遺跡の住居状遺構も注目されております。そして最近では、小保戸遺跡で礫群が環状に巡るといった遺構が発見され、話題が尽きないと思っております。そういった中で、今日の安蒜先生の話の中に、環状のムラ、川辺のムラという話が出てきました。私は、環状のムラというものについては、今日の津久井城跡馬込地区の事例をみますと非常におもしろいと思えました。それで既存の環状の集落をみてみますと、やはりそこには規則性があります。それは、先ほどの小池さんの話でも出ていましたが、馬込地区のみならず、環状集落の多くで、一定の地域において石材について違いがあるということです。今日の馬込地区の話でも、黒曜石あるいはホルンフェルスのあり方が、分布の違いがあるということですが、群馬県の下触牛伏遺跡においては、北ないし西には安山岩が散漫にみとめられますが、南ないし東では認められません。また、千葉県の中山新田遺跡では、珪質頁岩は北側に、流紋岩や黒曜石は南側に分布しているというように、非常に差違が目立っております。加えて、日本最大の規模をもつ栃木県の上林遺跡でも、在地系の石器群と遠隔地系の石器群、つまり石材が在地のチャートと外来の黒曜石で分布が分かれています。出居博さんは、これらの石材をもつ集団が一つ

の集落を形成していたということを述べております。この点についても同時存在であるかもしれないし、また2時期に跨るかもしれません。もし同時期のものであるならば、どのような集団のあり方を示すのか、あるいは異集団のあり方が場所を代えて同じ集落を形成していたと考えられますし、例えば秩序の問題とか、系譜の問題とかいろいろ出てきます。先のことを考えますと、妄想の世界に入り込んでしまいますが、今後、こうしたことも少しずつ分かってくるのかと思います。

環状集落の立地については、馬込地区は相模川と串川の合流部に立地し、近くには相模川の広い流れがあったのではないかという指摘がありました。一般的に環状集落の立地をみますと、近くには湿地が多いということが指摘されております。湿地というのは沼地でありまして、沼地の近くに立地するのが環状の集落であります。そして、今日の安蒜先生の話では、その時期が過ぎると川辺のムラという時期になります。私の川辺のムラに対する考えというものは、先ほど鳥田さんの話でもありましたが、漁撈に対する展開が川に向いていたのではないかと考えております。今日は、細石器の時期に河川漁撈、内水面漁撈が出てくるのではという話が出ていましたが、私はもう少し早い段階にあったのではないかと考えております。あとで田名向原遺跡についてお話ししますが、田名向原遺跡もそのようなあり方をしていたのではないかと考えております。

次に、図99の1・2は、2001年に小畑弘巳さんがシベリアの先史考古学で紹介されたものです(小畑2001)。これは、西ザバイカルの後期旧石器時代から中石器時代の住居址と炉址で、10~13層が中石器時代、14~19層が後期旧石器時代といわれています。今日の発表の中で、小保戸遺跡の事例は礫を巡らしている遺構ですが、ストゥディノエ I 17層は、面積が5.1m×4.4mの規模を示し、ごらんのように周囲に礫を巡らしております(図99-1)。そして、その真ん中には石囲い炉があります。さらにストゥディノエ I 19層では、3.6m×3.2mの小形の範囲に石が巡っています(図99-2)。先ほどの小保戸遺跡でもこれに近い面積で石を巡らせ、真ん中に炉址と思われる遺構がありました(図99-3)。こ



- 1・2 ロシア共和国チタ州（ザバイカル）ストウデノエ I 17・19 層の住居址（2001 小畑弘己）
- 3 神奈川県相模原市小保戸遺跡の環状遺構（2009 財団法人かながわ考古学財団）
- 4 神奈川県相模原市田名向原遺跡の住居状遺構（2004 相模原市教育委員会）

図99 旧石器時代の住居址と関連遺構



写真103 白石浩之氏

の図に示されたシベリアの住居址の例では、さらに、遺物が中央の炉石に近い場所に集中し、外縁部には遺物の分布が少ない状況を示しております。これは、先ほど島田さんが田名向原遺跡の住居状遺構（図99-4）で区画2とした外縁部に遺物が少ないということと共通しております。小保戸遺跡や田名向原遺跡のこうした事例をそのままシベリアの遺跡と比較することは問題があるとは思いますが、ほかにこうした事例があるということをご参考にご検討していくことも必要だと思います。例えば、鈴木さんが宮ヶ瀬サザランケ遺跡の石囲い炉でご説明されましたが、これなどは3mくらいの小規模な住居址の可能性がございます。さらに、石囲い炉のないもの、ウスチ・キャフタ17などもありますので、こういった事例を含め、今後注意していく必要があると思います。また、田名向原遺跡の住居状遺構についてですが、小保戸遺跡の遺構と田名向原遺跡の遺構は、大きさ・規模を含めまったく

違うものだということは、皆さん方もいうとおり私もそうと思いますが、小保戸遺跡の遺構が一般的な住居址だということになりますと、田名向原遺跡の住居状遺構は規模の大きな堅牢な建物ということになります。そうしますと、この建物は（サケ漁に伴う）ムラの共同施設あるいは作業小屋的なもので、短期間で終わる住居施設ではないと思います。

これまでに述べたことを含め、本日はその他いろいろと皆さん方のお話を聞かせていただきました。砂田さんの発表はレジュメとは全く違いまして今日の話の方が良かったと思っておりますが、今後、それをさらに展開していただければいいと思います。また、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の規模の大きい礫群の分布と遺物の分布についても、他には例がないと思いますが、こうしたことがムラとどのような関係なのか今後の課題だと思います。旧石器時代のムラと住まいについては、今日のような講演会・討論会を含め、日頃から細かな分析を行って検討を行っていけば分かってくるのではないかと思います。

司会 白石先生、どうもありがとうございました。

これで本日の講座のすべての日程を終了しました。最後に、神奈川県考古学会副会長の中村若枝より、閉会のご挨拶を申し上げます。

中村 皆様、今日一日長い時間ありがとうございました。特に、講師の皆様はベルさえ鳴らなければ1時間はお話しされた内容を、30分、10分で話をされ、私たちは16本の講演を聴いたようで頭が一杯です。

講座開催後のコメント

補記 相模野の細石器石器群の諸活動

砂田 佳弘

2010年3月6日に神奈川県考古学会による平成21年度考古学講座として「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」が開催された。ご担当の鈴木次郎さんから「細石刃文化期のムラー細石刃生産ブロックとその他の活動ブロック」というお題を頂いていた。

相模野台地を中心とする神奈川県内で発見される細石器石器群から当時の生業活動をどこまで復原することができるか、そして当時のイエとムラ、そしてそこに活動したヒトビトをどこまで表出することができるか。講座の副題部分が「細石器石器群の諸活動」と変題し、当日図を示すにとどまった器種交代の変遷を中心に補記したい。

細石器出現以前から細石器消滅までを出土層位ごとの単位として各器種構成の内容と特徴を表すことができる。

講座では、「器種組成から想定される場として、1. 細石刃・細石核・細石核素材、2. 槍先形尖頭器を狩猟具・加工具としての場、3. 礫器、打製石斧を大きな身振りとしての加工具の場、4. 加工痕、使用痕を有する剥片・搔器・削器・磨石・台石を小さな身振りとしての加工具の場、4. 碎片を石器製作の場、5. 石材組成の偏在性の有無から各時期の場の特徴を抽出した」(砂田佳弘 2010「細石刃文化期のムラー細石器石器群の諸活動」平成21年度考古学講座 旧石器時代のムラと住まいを探る 58頁 55-61頁)。器種構成の大枠は、狩猟・加工具、大身振りの加工具、小身振りの加工具、石器製作の場となる。なお、小身振りの加工具には錐器、彫器、楔形石器、叩き石を含む。

1. 細石器出現直前のL1H層下部～L1H層中位

小振りの縦長剥片が散見される時期であり、細石刃製作工程を生み出す直前の類細石刃剥離工程を所持している。槍先形尖頭器の出土点数では上野第一地点第IV文化層、中村第Ⅲ文化層に代表され、ナイフ形石器を遺存する。叩き石、磨石など礫石器が僅少であり、大身振りの加工具は認められない。

2. 細石器出現後から普及のL1H層上部～B0層中位

遺跡としての痕跡が増大し、炉跡や配礫もその一端を示している。細石器出現当初の遺跡はLIH層上部の吉

岡B区、西富岡・向畑、代官山、打木原の4遺跡と僅少である。前二者から後二者へは細石刃製作工程の調整方法の多様化と、黒曜石の産地同定等から原産地単一遺跡から原産地複数遺跡へという変化に対応させることが可能である。器種構成では大身振り加工具の中でも礫器が伴出し始め、狩猟・加工具の槍先形尖頭器は減少するものの確実に遺存する。小身振りの加工具は倍増するが、溝彫具と称される彫器は遺跡数に比例した数量にとどまる。彫器が細石器出現とともに爆発的に増大することは無く、他の小身振りの加工具等も併せた細石刃装着軸の加工が想定される。

3. 細石器が発展・展開したB0層上部～L1S層中位

遺跡数は安定するが、狩猟・加工具の細石刃が三分の一以下、細石刃核が二分の一以下、小身振りの加工具は四分の三に減少し、大身振りの加工具である礫器が倍増する。各遺跡内での器種構成が画然とした差を示している。

4. 細石器石器群が消滅し、土器と有舌尖頭器が出現するL1S層上部～FB層下部

遺跡数は三分の二に、狩猟・加工具の細石器の激減と槍先形尖頭器・有舌尖頭器が激増するが土器出現まで並存する。小身振り加工具は倍増し、大身振り加工具の中でも礫器は半減するものの石斧が安定激増の大変化を見せる。また、各遺跡内では細石器に礫器は共存し難く、細石器出現後にそのまま検出された大形礫の配礫が姿を消している。

以上の各時期の器種構成の変化に呼応して集中地点の広範囲化と遺跡内における集中地点数の増大化が認められる。すなわち、遺跡内における視覚的な遺物分布の広範多地点化は遺跡立地にこだわらない遺跡型の均等化と場の機能分化を反映している。神子柴・長者久保系石器群や削片系細石器石器群から土器発生に至る狭間に石斧の普及度は高く、狩猟・加工具は槍先形尖頭器・有舌尖頭器が未だ僅少な石鏃を凌駕し、大身振り加工具は礫器と石斧を使用する。多様化した生業活動には小身振りの加工具で対応するが、初源期石斧がすでに打製石斧や局部磨製石斧など大きさや形態を違えて大身振りや小身振りの加工具に機能分化している。同様に、槍先形尖頭器の大形化と有舌尖頭器の普及は狩猟・加工具における機能分化を果たし、まもなく細石器による諸活動は終焉を向かえることとなる。(2011.1.3)

旧石器時代のムラと住まいの復元に向けて

東京都埋蔵文化財センター 比田井民子

遺跡は、分布調査、試掘・発掘調査等により遺跡の位置が明らかにされ、その広がりや推定される。特に発掘では、遺構や遺物の有無、確実な広がりや明らかにされ、結果の単位が遺跡として扱われている。しかし、多くの遺跡についてこれは人が残した遺物・遺構ではあるのだが生活するうえでの如何なる機能、単位のものであるかは、正直のところよく解っていない。南関東地方の多くの遺跡の遺物や遺構の広がりや発掘した範囲を超えて広がっていく兆候を示している。例え数万㎡を越えるような広い台地上の発掘でも、遺構・遺物の広がりや途切れたと思っても次のまとまりが現れるか、すぐ隣の台地に同じようなまとまりが連鎖的に広がっていくところが後期旧石器時代の遺跡である。

こうしたなかで、遺構、遺物は一定のまとまりを集中部、ブロック、ユニットなどの名前ですり、複数あるそれらにおける遺物の接合、同一石材の共有関係から考えられる遺物の動きから、一定の単位が設けられた。砂川遺跡ではそうした単位の設定からさらに発展して、各遺物のまとまりについて、石器製作を復元するなかでの位置づけと遺物群間の相互関係を明らかにし、そこにおける作業過程を復元し、さらに遺跡外に持ち出された遺物との関連が論じられた。

近年、住まい、ムラに深く関わる研究として、後期旧石器時代の前半期の一時期を特徴づけると言われる環状ブロックの解釈について少しふれてみたい。仮説とされる環状ブロック、環状集落について遺跡で環状とされる部分についてはよく発掘されているが、発掘区外への広がりや可能性のある遺跡もあり、おそらく周り全体を広げていくと本当に環状になる遺跡がどの位残るのかは疑問である。また、後期旧石器時代前半期の特徴的分布と捉えられているが、対象とされている環状ブロックとして取り上げられている分布状態のなかには、後期旧石器時代後半期の分布と峻別し難い分布も多く含まれており、今後これらのものが時代性を示すものとしてどのような定義で如何なる範疇で括られるものなのか一度整理される時期に来ているように思われる。後期旧石器時代後半期の遺跡の遺物集中と分布を検討していくと、集中部は何らかの円形をなし、集中部群も円形、不整円形を含む何らかの円形をなす。

今回取り上げられている後期旧石器時代後半期の柏ヶ谷長ヲサ第Ⅸ文化層のブロック群についてもところに

よっては、ブロック、ユニットに囲まれる空間部がある。また、前半期の津久井城馬込地区遺跡のブロック群は見方によっては馬蹄形を呈するように見える。つまり、こうした環状といわれるような部所は後期旧石器時代全体を通じての遺物集中群のいずれにも見方によっては存在しており、環状も連結する形状であるばかりではない。改めて環状ブロックの本来の機能的特異性についての説明と定義が問われるところであると考え。筆者は環状ブロックの存在を全面否定するものではないが、立川ローム層下部の時期のこうした環状ブロックについての時代性、社会性に直結するような特殊化された解釈については、本来それが用語としてスタートした時点のものと現在のものに内容的に大きな隔りがあるように思われる。

このたびの神奈川の相模野台地のムラが対象であるが、筆者がフィールドとしている武蔵野台地と今回の相模野台地のムラとはイメージが多少異なるように思われるため、少々その違いについて触れたい。特に後期旧石器時代後半期になるといずれの地域も礫群が発達するが、その質量では両地域には大きな差がある。特に武蔵野台地の西南地域である野川流域では遺跡における礫群の占める面積の割合が高く、数量、重量において、t単位の出土量を示す遺跡があり、古多摩川、武蔵野礫層、立川礫層の構成礫を反映する礫群の石材構成を示す。言い換えると多摩川流域には大規模礫群を活用する生業のムラが存在し、複数出土する礫群は接合等により再構築、再利用が頻繁である。あたかも「礫群王国」といったような様相を示す地域であるといえ、日本のなかでもなかなかこうした大規模な礫群利用が活発な地域は多くない。対する相模野台地の礫群は全体に小規模にちぢまりとまとまり、大規模な礫群が連なり、礫接合も礫群間で広域に多くあるというような事例は少ないようだ。こうした観点での礫群利用を含むムラの機能の地域性を明らかにしていくことも課題と考える。

私達が認識している遺跡、石器群とは当時の社会構造のなかでのどのような位置づけがされる部分であるのか、或いは生活上どのように機能する場所であるのかは、個々の遺物群から始まり、地域的、時間的な流れの上での解明もまだこれからである。

かつて出土する石器とそれを個々に保有する遺物集中部の機能を解明していこうとする議論があったが、特定石器のみを対象として論を進めるところに限界性があった。遺構の研究では、鈴木忠司氏、保坂康夫氏らにより礫群の接合関係、礫の属性から礫群の機能を明確にする

研究は学史的に大きな位置を占め、実験等を含めて一定の成果を挙げている。ここにさらに石器群も含めた総合的観点から大きな単位からの個々の遺跡の位置づけや機能を明らかにすることが理想的な目標であるのだが、各遺跡における情報は限られており、なかなかそれに迫っていく研究までは至れない。遺跡のなかの遺物の動きを語ることが遺跡研究の核となってきたが、いずれもそこで立てられた仮説を証左する手だてが旧石器時代研究の場合、非常に限られている。

しかし、日本旧石器学会のデータベースで明らかにされたように、関東地方は日本のなかでも有数の旧石器時代遺跡の最密集地域である。旧石器時代のムラを考える

一つの手段として、南関東地方の旧石器時代遺跡では、多くの情報が共有できる環境のなか遺物の動きを中心とした研究から、遺跡を一つの単位として位置づけていくなかで遺物の動き、礫群、石器集中部のあり方から総合的に遺跡を評価してその機能性を考えていくことも可能な段階にきている。このたびの「かながわの旧石器時代のムラと住まいを考える」講座は暫く停滞していた遺跡の構造を多くの調査資料が積み重ねられたなかで、改めてどういう形で整理し、ムラや住まいに繋がるような議論に展開できるかということを考える新たな契機を与えた。

あとがき

今回の考古学講座において、「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」というテーマを設定した経緯については、予稿集の緒言に記載したとおりである。これまで神奈川県内では、旧石器時代の住まいを対象とした公開講座は、13年前の1997年に（財）かながわ考古学財団と神奈川県立埋蔵文化財センターが、公開セミナー「旧石器時代の住居遺構を探る」を開催している。当時は、用田鳥居前遺跡において下部遺構のピットを伴う大型炭化材が発見され、ある種の建築遺構の可能性が考えられたことと、田名向原遺跡の住居状遺構が発見された直後で、事例報告後の討論では住居状遺構の性格を巡って活発な議論が行われた。

その後、田名向原遺跡については、相模原市教育委員会から調査報告と市が設置した田名向原遺跡研究会による研究報告が刊行され、住居状遺構についての一定の評価がなされた。また2002年には、目久尻川に沿って南北に2km程隔てて位置する吉岡遺跡群と用田鳥居前遺跡の出土石器が遺跡間で接合することが確認されて話題となった。しかし、こうした特定の遺跡や事例を除く旧石器時代遺跡の遺物分布や礫群等の遺構についての議論は、その後も大きな進展が認められない状況であった。

こうした中で、2007年に津久井城跡馬込地区において、立川ローム層下部のB4層において県内で初めて環状ブロック群が確認され、また2009年には小保戸遺跡において環状分布を呈する礫群が発見されて新たな話題を提供した。こうした背景もあって2009年度の考古学講座では、旧石器時代の遺物分布と生活遺構を対象とした今

回のテーマを設定した。

今回の考古学講座では、基調講演で「旧石器時代のムラと住まい（イエ）」の全体像と時期的な変遷について話していただいた後、各論の前半では、各時期を代表する遺跡の遺物分布のあり方や礫群・炉址など特徴的な遺構と遺物分布の関係について発表していただいた。また後半では、田名向原遺跡の住居状遺構と小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群を取り上げ、それぞれ遺構そのものの特徴と遺構の性格（小保戸遺跡は現段階での評価）について発表していただいた。

各論の発表については、その後で全体討論を行うことも検討したが、各発表の時期が異なるだけではなく視点や論点がそれぞれ異なることから議論がかみ合わないことが予想されたため、討論を行うことはしなかった。その代替えとして、発表とは異なる見解がある場合や補足的な発表が必要な場合もあることから、それぞれ1名の方にコメントをお願いした。また、発表内容については、専門的すぎて県民を対象とした講座としてはどうなのかというご意見もいただいた。しかし、旧石器時代の集落論にもつながる未開拓な分野をテーマとしたことと、専門の研究者以外の一般県民の方々も最新の詳しい情報提供を期待しているという昨今の状況から取って直接調査を担当された方々に発表をお願いした。この結果、講座の内容がやや難解であったという感想と、一方では詳細な内容をもった事例報告で良かったという対照的なご意見もいただいた。この点は今後の考古学講座のあり方を考える上で改めて検討する必要があると思われる。

また、本県においては、これまで旧石器時代研究における遺物分布論・集落論といった分野は、特徴的な遺物分布状況を示す「環状ブロック群」を含めそれほど議論されることがなかったが、今回の考古学講座を契機として活発な議論が行われ、関心が高まることを希望するものである。

なお、この記録集に掲載した図・表・写真は、講座当日のスライド（パワーポイント）を使用したもので、データの大きさの関係でやや不鮮明なものや画像自体が小

さく見苦しいものがあることについてお詫び申し上げたい。また、使用した図・表の出典を記載していないものもあるが、これはすべて編集者である私の責任である。

最後に、この考古学講座の開催に当たっては、横浜市歴史博物館には共催者として会場を提供していただいた。また、講演・発表・コメントを行っていただいた方々をはじめ関係者に厚くお礼申し上げます。

（鈴木次郎）

平成21年度考古学講座 記録集

かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る

発行日 平成23（2011）年3月6日

編集・発行 神奈川県考古学会

印刷 （有）平電子印刷所

